

すべし。當に知るべし、隨佗の前には暫く定散の門を開くと雖も、隨自の後には還て定散の門を閉づ。一たび開きて以後永く閉ぢざるは、唯是念佛の一門也と。又云、念佛の行者、必ず三心を具足すべきの文、觀無量壽經に云、同經の疏に、問て曰、若解行不同邪雜の人等あつて、外邪異見の難を防がん。或は行くこと一分二分にして群賊等喚回すとは、即ち別解別行惡見の人等に喩ふ。私に云、又此中に一切の別解別行異學異見等と言ふは、是聖道門を指す也。又最後結句の文に云、夫速に生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、且く聖道門を開きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中、且く諸の雜行を抛ちて、選んで應に正行に歸すべし。之に就て之を見るに、曇鸞道綽、善導の譯釋を引て、聖道淨土、難行易行の旨を建て。法華真言總じて一代の大乗、六百三十七部二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て、皆聖道難行雜行等に攝して、或は捨て或は閉ぢ、或は開き或は抛つ。此四字を以て多く一切を迷はし。剩へ三國の聖僧、十方の佛弟等を以て皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の淨土三部經の、唯除五逆誹謗正法の誓文に背き。遠くは一代五時の肝心たる法華經第二の、若人不得毀

謗此經乃至其人命終入阿鼻獄の誠文に迷ふ者也。是に代已に末代に及び、人聖人に非ず、各冥徯に容りて、竝に直道を忘る。悲哉瞽瞍を樹へず、痛哉戕徒に邪信を催す。故に上國王より下土民に至るまで、皆經は淨土三部の外の經無く、佛は彌陀三尊の外佛なしと謂へり。仍て傳教、義真、慈覺、智證等、或は萬里の波濤を涉りて渡せし所の聖教、或は一朝の山川を回りて崇むる所の佛像。若ば高山の巔に華界を建て、以て安置し。若ば深谷の底に蓮宮を起て、以て崇重す。釋迦樂師の光を並るや、威を現當に施し。虛空地藏の化を成すや、益を生後に被らしむ。故に國主は郡卿を寄せて以て燈燭を明にし。地頭は田園を充て以て供養に備ふ。而るを法然の選擇に依つて、則教主を忘れて、西土の佛陀を貴び、付屬を抛て東方の如來を開き。唯四卷三部の經典を専らにして、空く一代五時の妙典を抛つ。是を以て彌陀の堂に非れば、皆供佛の志を止め。念佛の者に非れば、早く施僧の懷を忘る。故に佛堂零落して瓦松の煙老ひ。僧房荒廢して庭草の露深し。然と雖も各護惜の心を捨て、並に建立の思を廢す。是を以て住持の聖僧行きて歸らず、守護の善神去りて來ることなし。是偏に法然の選擇に依る也。悲哉、數十年の間百千萬の人、魔縁に

蕩されて多く佛教に迷へり。傍を好んで正を忘る、善神怒を爲さらん哉。圓を捨て、偏を好む、惡鬼便を得ざらん哉。如かじ彼の萬祈を修せんよりは、此一凶を禁せんには。客殊に色を作て曰、我本師釋迦文淨土の三部經を説き給ひてより以來、曇鸞法師は四論の講説を捨て、一向に淨土に歸し。道綽禪師は涅槃の廣業を開きて、偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛ちて專修を立て。慧心僧都は諸經の要文を集めて、念佛の一行を宗とす。彌陀を尊貴すること誠以て然也。又往生の人其れ幾哉、中ん就く法然聖人幼少にして天台山に昇り、十七にして六十卷に涉り、並に八宗を究め、具に大意を得たり。其外一切の經論七遍反覆し、章疏傳記究め看ざることを莫く、智は日月に齊く、徳は先師に越えたり。然と雖も猶出離の趣に迷ひ、涅槃の旨を辨へず、故に遍く觀悉く臨み、深く思ひ遠く慮り、遂に諸經を抛ちて專ら念佛を修す。其上一夢の靈應を獲り、四裔の親疎に弘む。故に或は勢至の化身と號し、或は善導の再誕と仰ぐ。然れば則十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女歩を速ぶ。爾より來、春秋推し移り、星霜相積れり。而るに忝も釋尊の教を疎にして、恣に彌陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ、強て先師

を毀り更に聖人を罵るや。毛を吹いて疵を求め、皮を剪りて血を出す。昔より今に至まで此如き惡言未だ見ず、惶るべく慎むべし。罪業至て重し、科條爭でか遁れん。對座猶以て恐れあり、杖を携へて則歸らんと欲す。主人咲み止めて曰、辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷廁に忘る。善言を聞いて惡言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ。正師を疑ふて、惡侶に擬す。其迷誠に深く、其罪淺からず。事の起りを聞け委く其趣を談せん。釋尊說法の内一代五時の間に、先後を立て、權實を辨す。而るに曇鸞、道綽、善導既に權に就て實を忘れ、先に依て後を捨つ、未だ佛教の淵底を探らざる者なり。中ん就く法然其流を酌むと雖も其源を知らず。所以は何かん、大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の字を置いて、一切衆生の心を薄す。是偏に私曲の詞を展べて、全く佛經の説を見ず。妄語の至り惡口の科、言ても比ひ無く責ても餘りあり。人皆其妄語を信じ、悉く彼の選擇を貴ぶ。故に淨土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一佛を仰ぎて諸佛を忘る。誠には諸佛諸經の怨敵、聖僧衆人の讎敵也。此邪教廣く八荒に弘まり、周く十方に遍す。抑近年の災難、往代の由を以て強に之を恐る、聊か先例を

引て汝の迷を悟すべし。止觀第二に史記を引て云、周の末に被髮袒身禮度に依らざる者ありと、弘決第二に此文を釋するに左傳を引て云、初め平王の東遷するや、伊川に髮を被る者野に於て祭るを見る。識者の曰、百年に及ばずして其禮先亡びんと。爰に知んぬ、微前に顯れ災後に致ることを。又阮籍逸才にして蓬頭散帶す。後に公卿の子孫皆之に敬て、奴狗相辱しむる者を方に自然に達すと云ひ、擗節競持する者と呼んで田舎と爲す。司馬氏の滅ぶる相と爲す。又慈覺大師の入唐巡禮記を案するに云、唐の武宗皇帝、會昌元年敕して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て彌陀念佛の教を傳へしむ。寺毎に三日巡輪すること絶えず。同二年回鶻國の軍兵等、唐の堦を侵す。同三年河北の節度使忽ち亂を起す。其後大蕃國更命を拒み、回鶻國重て地を奪ふ。凡そ兵亂秦項の代に同く、災火邑里の際に起る。何に況んや武宗大に佛法を破し、多く寺塔を滅す、亂を揆ると能はずして遂に以て事あり。此を以て之を惟ふに、法然は後鳥羽院の御宇建仁年中の者也。彼の院の御事既に眼前に在り、然れば則大唐に例を殘し、吾朝に證を顯す。汝疑ふこと莫れ、汝怪こと莫れ、唯須く凶を捨て、善に歸し、源を塞ぎ根を截るべし。客卿か和きて曰、未だ

淵底を究めず、數其趣を知る、但し華洛より柳營に至るまで、釋門に樞樞あり、佛家に棟梁あり、然れども未だ勘狀を進せず、上奏に及ばず。汝賤身を以て輒く秀言を吐く、其義餘あり其理謂れなし。主人曰、予少量たりと雖も、忝くも大乘を學す。若蠅驥尾に附て萬里を渡り、碧蘿松頭に懸りて千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生れ、諸經の王に事ふ。何ぞ佛法の衰微を見て、心情の哀惜を起さらんや。其上涅槃經に云、若善比丘ありて法を壞る者を見て、置て呵責し、駢遣し、舉處せずんば、當に知るべし是人は佛法の中の怨なり。若能駢遣し、呵責し、舉處せば、是我弟子眞の聲聞也と。余善比丘の身たらずと雖も、佛法中怨の責を遁れんが爲に、唯大綱を撮て粗一端を示す。其上去る元仁年中に延曆興福の兩寺より度々奏聞を經、敕宣御教書を申し下して、法然の選擇の印板を大講堂に取上げ、三世の佛恩を報せんが爲に之を燒失せしめ、法然の墓所に於ては、感神院の大神人に仰付けて、破卻せしむ。其門弟隆觀、聖光、成覺、薩生等は遠國に配流し、其後未だ御勘氣を許されず、豈未だ勘狀を進せずといはんや。客則和きて曰、經を下し僧を誘ふること、一人として論じ難し。然れども大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛善

薩、及び諸の世天等を以て、捨閉開拋の四字を載す。其詞勿論也。其文顯然也。此瓊
 璣を守りて其誹謗を成す。迷ふて言歎。覺りて語る歎。賢愚を辨たす。是非定め難
 し。但し災難の起るは選擇に因るの由。盛に其詞を増し、彌其旨を談す。所詮天下泰
 平國土安穩は君臣の樂ふ所。士民の思ふ所也。夫國は法に依て昌へ、法は人に因て
 貴し。國亡び、人滅せば、佛を誰か崇むべき、法を誰か信すべき哉。先國家を祈りて、
 須く佛法を立つべし。若災を消し、難を止むるの術あらば聞かんと欲す。主人
 の曰、余は是頑愚にして敢て賢を存せず、唯經文に就て聊か所存を述べん。抑治術
 の旨、内外の間其文幾多ぞや。具に擧ぐ可きこと難し。但し佛道に入て、數愚案を
 回すに、謗法の人を禁めて、正道の侶を重せば、國中安穩にして、天下泰平ならん。
 卽涅槃經に云、佛言く唯一人を除きて餘の一切に施さば、皆讚歎すべし。純陀問
 て言く、何なるをか名けて唯除一人と爲す。佛言く、此經の中に説く所の如きは破
 戒なり。純陀復曰く、我今未だ解せず唯願くば之を説き給へ。佛純陀に語りて言く、破
 戒とは謂く一闍提なり。其餘のあらゆる一切に布施するは、皆讚歎すべし。大果報
 を獲ん。純陀又問ひ奉る、一闍提とは其義云何。佛言く、純陀若比丘及び比丘尼、優婆

塞、優婆夷あつて、麤惡の言を發し、正法を誹謗し、是重業を造りて永く改悔せず、心
 に懺悔なからん。斯如き等の人を名づけて、一闍提の道に趣向すと爲す。若四重を
 犯し、五逆罪を作り、自定めて是の如き重事を犯すと知れども、而も心に初より
 怖畏懺悔無く、肯て發露せず。彼の正法に於て永く護惜建立の心無く、毀背輕賤し
 て言に禍咎多からむ。是如き等を亦一闍提の道に趣向すと名く。唯此の如き一闍提
 の輩を除きて、其餘に施さば一切讚歎すべしと。又云、我往者を念ふに閻浮提に於
 て大國の王と作り、名を仙豫と曰き、大乘經典を愛念し、敬重し、其心純善に
 して、麤惡嫉妬あること無し。善男子、我爾時に於て心に大乘を重んず、婆羅門の方
 等を誹謗するを聞き、聞き已て即時に其命根を斷つ。善男子、是因縁を以て、是より
 已來地獄に墮せすと。又云、如來昔國王と爲りて菩薩の道を行せし時、そこばくの
 婆羅門の命を斷絶すと。又云、殺に三あり。謂く下中上なり。下とは蟻子乃至一切の
 畜生なり。唯菩薩示現生の者を除く。下殺の因縁を以て、地獄畜生、餓鬼に墮して具
 に下の苦を受く。何を以ての故に、是諸の畜生に微の善根あり、是故に殺さば具
 に罪報を受く。中殺とは、凡夫人より阿那含に至るまで是を名けて中と爲す。是業

因を以て地獄、畜生、餓鬼に墮して、具に中の苦を受く。上殺とは、父母乃至阿羅漢、辟支佛、畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に墮す。善男子、若能く阿提提を殺んことあらん者は、則此三種の殺の中に墮せず。善男子、彼の諸の婆羅門等は、一切皆是一阿提提也。仁王經に云、佛波斯匿王に告げ給はく、是故に諸の國王に付屬して、比丘比丘尼に付屬せず、何を以ての故に、王の威力無ければなり。涅槃經に云、今無上の正法を以て、諸王、大臣、宰相及び四部の衆に付屬す。正法を毀る者をば大臣四部の衆當に苦治すべしと。又云、佛言はく迦葉能正法を護持する因縁を以ての故に、是金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は五戒を受けず、威儀を修せずして、刀劍、弓箭、鉞、鎧、斧、持すべしと。又云、若五戒を受持せん者あらば名けて大乘の人と爲すことを得ざる也。五戒を受けざれども正法を護るを以て、乃ち大乘と名づく。正法を護る者は、當に刀劍器仗を執持すべし。刀杖を持つと雖も、我是等を説きて、名けて持戒と曰はんと。又云、善男子、過去の世に此拘尸那城に於て、佛の世に出で給ふありき。勸喜増益如來と號し奉る。佛涅槃の後正法世に住すること無量億歲なり。餘の四十年佛法の未爾時に一の持戒の比丘あり、名を覺徳と

曰ふ。爾時に多く破戒の比丘あり、是説を作すを聞いて皆惡心を生じ、刀杖を執持して是法師を逼む。是時の國王名を有徳と曰ふ。是事を聞き已て、護法の爲の故に即ち説法者の所に往至して、是破戒の諸々の惡比丘と、極めて共に戰闘す。爾時に説法者、厄害を免るゝことを得たり。王爾時に於て、身に刀劍鉞、鎧の垢を被り、體に完き處は芥子の如き許も無し。爾時に覺徳尋で王を讚めて言く、善哉善哉、王今眞に是正法を護る者なり。當來の世に、此身當に無量の法器と爲るべし。王是時に於て法を聞くことを得已て、心大に歡喜し、尋で即命終して、阿閼佛の國に生ず。而も彼佛の爲に第一の弟子と作る。其王の將從人民奮勵戰闘すること有りし者歡喜すること有りし者、一切菩提心を退せず、命終して悉く阿閼佛の國に生ず。覺徳比丘卻て後壽終りて、亦阿閼佛の國に往生することを得。而して彼佛の爲に、聲聞衆の中の第二の弟子と爲る。若正法盡さんと欲することあらん時、當に是の如く受持し、擁護すべし。迦葉爾時の王とは、則我身是なり。説法の比丘は、迦葉佛是なり。迦葉正法を護る者は、是の如き等の無量の果報を得ん。是因縁を以て、我今日に於て種々の相を得て、以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成す。佛迦葉菩薩に告げ給

はく。是故に法を護らん優婆塞等は、刀杖を執持して擁護すること是の如くなるべし。善男子、我涅槃の後、濁惡の世に、國土荒亂し、互に相抄掠し、人民飢餓せん。爾時に多く飢餓の爲の故に、發心出家するものあらん。是の如きの人を名けて禿人と爲す。是禿人の輩、正法を護持するを見て、驅逐して出さしめ、若は殺し、若は害はん。是故に我今持戒の人、諸の白衣の刀杖を持つ者に依て、以て伴侶と爲すことを聽す。刀杖を持つと雖も、我是等を説いて名けて持戒と曰はん、刀杖を持つと雖も、命を斷すべからずと。法華經に云、若人信せずして此經を毀謗せば、即一切世間の佛種を斷せん。乃至其人命終して阿鼻獄に入らん。夫經文顯然なり、私の詞何を加へん。凡法華經の如くんば、大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり。故に、阿鼻大城に墮して永く出づる期なけん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず、蟻子を殺す者は、必三惡道に落つ。謗法を禁むる者は、定めて不退の位に登る。所謂覺徳とは、是迦葉佛なり。有徳とは、則釋迦文也。法華涅槃の經教は、一代五時の肝心也。其禁實に重し、誰か歸仰せざらん哉。而るに謗法の族、正道の人を忘れ、剩へ法然の選擇に依て、彌愚痴の盲瞽を増す。是を以て或は彼遺體を忍びて、木盡の像に露はし、或は其妄説を信じて、秀言を模に彫り、之を海内に弘め、之を廓外に統

ふ。仰ぐ所は、則其家風、施す所は、則其門弟なり。然る間或は釋迦の手指を切り、彌陀の印相を結び、或は東方如來の雁宇を改めて、西土教主の鵝王を居る。或は四百餘回の如法經を止めて、西方淨土の三部經と成し、或は天台大師の講を停めて、善導講と爲す。此の如き群類其誠に盡し難し。是破佛に非ず哉。是破法に非ずや。是破僧に非ず哉。此邪義は則選擇に依る也。嗟呼悲哉。如來誠諦の金言に背くこと哀れなり。愚侶迷惑の麤語に隨ふこと、早く天下の靜謐を思はば、須く國中の謗法を斷つべし。客の曰、若謗法の輩を斷じ、若佛禁の遠を絶たんには、彼經文の如く軒罪に行ふ可きか。若然らば殺害相加へ、罪業何か爲ん哉。則大集經に云、頭を剃り、袈裟を著せば、持戒及毀戒天人彼を供養すべし。則爲我を供養するなり、是我子なり。若彼を搥打すること有れば、則爲我子を打つなり。若彼を罵辱せば、則我を毀辱するなりと。料り知んぬ、善惡を論せず、是非を擇ぶこと無く、僧侶たらんに於ては供養を展ぶべし。何ぞ其子を打辱して、忝も其父を悲哀せしめん。彼竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み、提婆達多の迷華比丘尼を殺せしや、久く阿鼻の焰に咽ぶ。先證斯明なり、後昆最も恐あり。謗法を誡むるに似て既に禁言を

破す、此事信じ難し、如何が意得ん。主人の曰、客明に經文を見て、猶斯言を成す。心の及ばざるか、理の通せざるか。全く佛子を禁むるに非、唯だ偏に謗法を思む也。夫釋迦の以前の佛教は其罪を斬ると雖も、能忍以後の經説は則其施を止む。然れば則四海萬邦一切の四衆、其惡に施さず、皆此善に歸せば、何なる難か。竝び起り、何なる災か。鏡ひ來らん。客則席を避け襟を刷ひて曰、佛教斯區にして、旨趣窮め難く、不審多端にして、理非明かならず。但し法然聖人の選擇現在也。諸佛、諸經、諸菩薩、諸天等を以て、捨閉閑抛を載す、其文顯然也。茲に因て聖人國を去り、善神所を捨て、天下飢渴し、世上厄病すと。今主人廣く經文を引て明に理非を示す。故に妄執既に翻り、耳目數明かなり。所詮國土泰平天下安穩は、一人より萬民に至るまで、好む所也。樂ふ所也。早く一闢提の施を止め、永く衆の僧尼の供を致し、佛海の白浪を收め、法山の綠林を截らば、世は義農の世と成り、國は唐虞の國と爲らん。然して後法水の淺深を斟酌し、佛家の棟梁を崇重せん。主人悦て曰、鳩化して鷹となり、雀變じて蛤となる。悦哉。汝蘭室の友に交り、麻敵の性と成る。誠に其難を願みて、専ら此言を信せば、風和ぎ、浪靜にして、不日に豐年ならん耳。但し人の心は、時

に隨つて移り、物の性は、境に依て改る。譬ば水中の月の波に動き、陣前の軍の劍に靡くが如し。汝當座に信すと雖も、後定めて永く忘れん。若先國土を安じて現當を祈らんと欲せば、速に情慮を回し、急て對治を加へよ。所以は何ん、樂師經の七難の内、五難忽に起り、二難猶殘れり。所以佗國侵逼の難、自界叛逆の難也。大集經の三災の内、二災早く顯れ、一災未だ起らず。所以兵革の災也。金光明經の内、種々の災禍一々起ると雖も、佗方の怨賊國內を侵掠する、此災未だ露れず。此難未だ來らず。仁王經の七難の内、六難今盛にして一難未だ現せず。所以四方の賊來りて、國を侵すの難也。加之國土亂れん時は、先鬼神亂る。鬼神亂るゝが故に、萬民亂ると。今此文に就て、具に事の情を案するに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ。先難是明なり。後災何を疑はん。若殘る所の難、惡法の科に依て、竝び起り競ひ來らば、其時なにか爲ん哉。帝王は、國家を基として天下を治め、人臣は、田園を領して世上を保つ。而るに佗方の賊來りて、其國を侵逼し、自界叛逆して、其地を掠領せば、豈驚かざらん哉。豈驚かざらん哉。國を失ひ、家を滅せば、何れの所に世を通れん。汝須く一身の安堵を思はば、先四表の靜謐を禱るべきもの歟。中ん就く人の世に在るや、各後

生を恐る。是を以て或は邪教を信じ、或は謗法を貴ぶ。各是非に迷ふことを惡む。雖も、猶佛法に歸することを哀む、何ぞ同じく信心の力を以て、妄に邪義の詞を崇めんや。若執心、翻らず、亦曲意猶存せば、早く有爲の郷を辭して、必無間の獄に墮ちなん。所以は何ん大集經に云、若國王あつて、無量世に於て、施戒惡を修すとも。我法の滅せんを見て、捨て、擁護せずんば、是の如く種ゆる所の無量の善根、悉く皆滅失し。乃至其王久しからずして、當に重病に遇ひ、壽終の後、大地獄に生すべし。王の如く夫人、太子、大臣、城主、柱師、郡主、宰官、も亦復是の如くならん。仁王經に云、人佛教を壞らば復孝子無く、六親不和にして天龍も祐けず。疾疫惡鬼日に來りて侵害し、災怪首尾し、連禍縱横し、死して地獄、餓鬼、畜生に入らん。若出でて人と爲らば、兵奴の果報ならん。響の如く影の如く、人の夜書するに火は滅すれども、字は存するが如く、三界の果報も亦復是の如しと、法華經第二に云、若人信ぜずして此經を毀謗せば、乃至其人命終して阿鼻獄に入らんと、同第七卷不輕品に云、千劫阿鼻地獄に於て、大苦惱を受くと。涅槃經に云、善友を遠離し、正法を聞かず、惡法に住せば、是因縁の故に沈没して、阿鼻地獄に在て受くる所の身形縱横

八萬四千山延ならんと。廣く衆經を披きたるに、専ら謗法を重んず。悲哉若正法の門を出でて、深く邪法の獄に入る、愚かなり。各惡教の網に懸りて、鎖に謗教の網に纏はる。此朦霧の迷ひ、彼盛焰の底に沈む。豈愁へざらん哉、豈苦からざらん哉。汝早く信仰の寸心を改めて、速に寶乘の一善に歸せよ。然れば則三界は皆佛國也。佛國其れ衰ん哉、十方は悉く寶土也。寶土何ぞ壞れん哉。國に衰微無く、土に破壞無くんば、身は是安全にして、心は是禪定ならん。此詞この言、信す可く崇む可し。客の曰、今生後生誰か愼まざらん、誰か恐れざらん。此經文を披きて具に佛語を承るに、誹謗の科至て重く、毀法の罪誠に深し。我一佛を信じて諸佛を抛ち、三部經を仰ぎて諸經を開きしは、是私曲の思に非ず、則先達の詞に隨ひしなり。十方の諸人も、亦復是の如くなるべし。今世には性心を勞し、來生には阿鼻に墮せんこと、文明かに理詳かなり。疑ふ可らず。彌貴公の慈誨を仰ぎ、益惡客の癡心を開き、速に對治を回らして、早く泰平を致し、先生前を安じ、更に没後を扶けん。唯我信するのみに非ず、又佗の誤を誡めん耳。

文應元年七月

沙門日蓮 勘之

立正安國論

四〇〇

文應元年之を勘ふ。正嘉より之を始め、文應元年に勘へ畢る。去る正嘉元年八月廿三日戊亥の尅の大
地震を見て之を勘ふ。其後文應元年七月十六日を以て宿谷禪門に付て最明寺入道殿に獻じ奉れり。其後
文永元年七月五日大明星の時彌々此災の根源を知る。文應元年より文永五年正月十八日に至るまで九箇
年を経て、西方大梁古國より我朝を襲ふべきの由牒狀之を渡す。又同六年電て牒狀之を渡す。既に勘文
之に叶ふ。之に準じて之を思ふに未來亦然るべき歟。此書は徴しある文也。是偏に日蓮の力に非ず法華
の眞文聖の感應する所歟。

文永六年十二月八日寫之

開目鈔上

夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり、所謂主師親これなり。又習學すべき物三つあ
り、所謂儒外内これなり。儒家には三皇、五帝、三王、此等を天尊と號す。諸臣の頭身
萬民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず、人皆禽獸に同す。五帝已後は父母を辨へ
て孝をいたす。所謂重華は頑しき父を敬まひ。沛公は帝となつて太公を拜す。武
王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形を彫刻めり。此等は孝の手本也。比干は殷の
世の亡ぶべきを見て、しゐて帝をいさめ頭を刎ねらる。公胤といひし者は懿公の肝
を取て我が腹をさき、肝を入れて死しぬ。此等は忠の手本也。尹壽は堯王の師、務成
は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。此等を四聖と號す。天尊頭を
傾け、萬民掌をあわす。此等の聖人に三墳、五典、三史等の三千餘卷の書あり。其
の所詮は三玄をいせず。三玄とは一には有の玄、周公等此を立つ。二には無の玄、老
子等。三には亦有亦無等、莊子が玄これなり。玄とは黒也。父母未生已前をたづぬれ

開目鈔上

四〇一

ば、或は元氣より生り、或は貴賤、苦樂、是非、得失等は皆自然等云。是の如く巧に立
 といへども、未だ過去未來を一分もしらず。玄也、幽也、故へに玄と云ふ。但現
 在計りしれるに似たり。現在に於て仁義を制して身をまほり、國を安ず。此に相違
 すれば族を滅ぼし、家を亡ぼす等いふ。此等の賢聖の人々は聖人なりと雖も、過去
 を知らざることを、凡夫の背をみず、未來を鑑みざることを盲人の前を見ざるが如
 し。但現在に家を治め、孝をいたし。堅く五常を行すれば、傍輩もうやまい。名も國
 にきこえ、賢王もこれを召して或は臣となし、或は師とたのみ、或は位をゆづり、天
 も来て守りつかふ。所謂周の武王には、五老來りつかえ。後漢の光武には、二十八宿
 來て、二十八將となりし此なり。而りと雖も過去未來をしらざれば、父母、主君、師
 匠の後世をも助けず、不知恩の者也。まことの賢聖にあらず。孔子が此土に賢聖な
 し、西方に佛圖といふ者あり、此聖人なりといひて、外典を佛法の初門となせしこ
 れなり。禮樂等を教て内典わたらば、戒定慧を知り易からせんがため、王臣を教て
 尊卑をさだめ、父母を教へて孝の高さを知らしめ。師匠を教へて歸依を知らしむ。
 妙樂大師云、佛教の流化實に茲に頼る、禮樂前に駢せて眞道後に啓く等云。天台

云、金光明經に云、一切世間所有の善論、皆此經に因る。若深く世法を識れば、即
 是佛法なり等云。止觀に云、我三聖を遺して、彼眞丹を化す等云。弘決に云、清淨法
 行經に云、月光菩薩彼に顔回と稱し、光淨菩薩彼に仲尼と稱し。迦葉菩薩彼に老
 子と稱す。天竺此震旦を指して彼と爲す等云。二には月氏の外道が三日八臂の摩
 醯首羅天、毗細天、此二天をば一切衆生の慈父悲母、又天尊主君と號す。迦毗羅、
 漏樓僧伽、勒婆婆、此三人をば三仙となづく。此等は佛前八百年已前已後の仙人な
 り。此三仙の所説を四韋陀と號す。六萬歳あり。乃至佛出世に當て、六師外道の此外
 經を習傳して、五天竺の王の師となる。支流九十五六等にもなれり。一々に流々多
 くして、我慢の幢の高こと、悲想天にもすぎ。執心の心の堅こと、金石にも超たり。
 其見の深こと、巧なるさま、儒家には似るべくもなし。或は過去二生三生乃至七生
 八萬劫を照見し、又兼て未來八萬劫をしる。其所説の法門の極理は、或は因中有果
 或は因中無果、或は因中亦有果亦無果等云。此外道の極理なり。所謂善き外道は、
 五戒十善戒等を持て、有漏の禪定を修し、上色無色をさわめ、上界を涅槃と立て、屈
 武蟲の如くせめ昇れども、悲想天より返て三惡道に墮つ、一人として天に留るもの

なし、而れども天を極むる者は、永くかへらずと思へり。各々自師の義をうけて堅く執する故に。或は冬寒に一日に三度恆河に浴し、或は髪をぬき、或は巖に身をなげ、或は身を火にあぶる、或は五處をやく、或は裸形、或は馬を多く殺せば福を得、或は草木をやき、或は一切の木を禮す。此等の邪義其數をしらず。師を恭敬する事、諸天の帝釋を敬ひ、諸臣の皇帝を拜するが如し。然れども外道の法九十五種、善惡につけて一人も生死を離れず。善師に仕へては、二生三生等に惡道に墮ち、惡師に仕へては、順次生に惡道に墮つ。外道の所詮は內道に入る即最要也。或外道云千年已後佛出世す等云。或外道云、百年已後佛出世す等云。大涅槃經に云、一切世間の外道の經書は、皆是佛說にして外道の說に非ず等云。法華經に云、衆に三毒ありと示し、又邪見の相を現す、我弟子、是の如く方便して衆生を度す等云。三には大覺世尊は此一七衆生の大導師、大眼目、大橋梁、大船師、大福田等也。外典外道の四聖、三仙は其名は聖なりと雖も、實には三惑未斷の凡夫。其名は賢なりと雖も、實に因果を辨へざる事嬰兒の如し。彼を船として生死の大海を渡るべしや。彼を橋として六道の巷こえがたし。我大師は變易猶わたり給へり。況や分段の生死をや。元品

の無明の根本、猶俯け給へり。況や見思枝葉の蠱惑をや。此佛陀は三十成道より八十御入滅に至るまで、五十年が間一代の聖教を説き給へり。一字一句皆眞言なり、一文一偈妄語にあらず。外典外道の中の聖賢の言すら云事誤りなし、事と心と相符へり。況や佛陀は無量曠劫よりの不安語の人。されば一代五十餘年の説教は、外典外道に對すれば大乘なり。大人の實語なるべし。初成道の始より泥洹の夕に至るまで、説く所の法皆眞實也。但し佛敎に入て五十餘年の經々、八萬法藏を勘へたるに、小乘あり、大乘あり、權經あり、實經あり、顯敎、密敎、輓語、雜語、實語、妄語、正見、邪見等の種々の差別あり。但法華經計り敎主釋尊の正言也。三世十方の諸佛の眞言也。大覺世尊は四十餘年の年限を指して、其内の恆河の諸經を未顯眞實、八年の法華經は要當說眞實と定め給ひしかば、多寶佛大地より出現して皆是眞實を證明す。分身の諸佛來集して、長舌を梵天に付く。此言赫赫たり、明明たり、晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月の如し。仰で信せよ、伏して懷ふべし。但し此經に二箇の大事故あり。俱舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗等は名をもしらず。華嚴宗と眞言宗との二宗は、偷に盗んで自宗の骨目とせり。一念三千の法門は、但法華經の本門焉

量品の文の底にしづめたり。龍樹、天親知て而も未だ拾ひ出さず。但我が天台智者のみこれをいだけり。一念三千は十界互具よりことはじまれり。法相と三論とは八界を立て十界をしらす。況や互具をしるべしや。俱舍、成實、律宗等は阿含經によれり。六界を明て、四界をしらす。十方唯一佛と云て、一方有佛だにもあかさず。一切有情悉有佛性とこそ説かざらめ。一人の佛性猶ゆるさず。而るを律宗、成實宗等の十方有佛有佛性なんと申は、佛滅後の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし。例せば外典外道等は、佛前の外道は執見あさし。佛後の外道は佛教をさくみて自宗の非をしり、巧の心出現して佛教を盗み取り、自宗に入れて邪見最も深し。附佛教學佛法成等これなり。外典も又々是の如し。漢土に佛法未だ渡らざりし時の儒家道家は、いうくとして嬰兒の如くはかなかりしが。後漢已後に釋教渡りて對論の後、釋教漸く流布する程に、釋教の僧侶破戒の故に、或は還俗して家にかへり。或は俗に心をあはせ、儒道の内に釋教を盗み入れたり。止觀の第五に云、今世多く惡魔の比丘有て、戒を退き家に還り、駢策を懼畏して更に道士を越濟す。復名利を邀めて、莊老を誇談し、佛法の義を以て偷んで邪典に安き、高を押し下き

に就け、尊を推て卑に入れ、概して平等ならしむ云。弘に云、比丘の身と作て佛法を破滅す。若は戒を退き家に還るは、衛の元嵩等が如し即在家の身を以て佛法を破壞す。此人正教を偷竊して邪典に助添す。押高等とは道士の心を以て二教の概と爲し邪正をして等からしむ、義此理なし。曾て佛法に入て正を偷んで邪を助け、八萬十ニの高きを押しして、五千二篇の下れるに就け、用ひて彼典の邪部の教を釋するを推曾入卑と名く等云。此釋を見るべし次上の心也。佛敎又是の如し。後漢の永平に漢土に佛法渡りて、邪典破れて内典立つ。内典に南三北七の異執起りて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師に打破られて、佛法二たび群類をすくふ。其後法相宗、眞言宗、天台より渡り、華嚴宗又出來せり。此等の宗々の中に法相宗は一向天台宗に敵を成す。宗法門水火なり。然れども玄奘三藏、慈恩大師委細に天台の御釋を見ける程に、自宗の邪見翻るかの故に、自宗をばすてねども其心天台に歸服すと見へたり。華嚴宗と眞言宗とは、本は權經權宗なり。善無畏三藏、金剛智三藏、天台の一念三千の義を盗み取て、自宗の肝心とし。其上に印と眞言とを加て超過の心をおこす。其子細をしらぬ學者等は、天台より大日經に一念三千の法門ありけりとうち思

ふ。華嚴宗は澄觀が時、華嚴經の心如工畫師の文に、天台の一念三千の法門を偷み
 入れたり。人これをしらす。日本我朝には華嚴等の六宗、天台眞言已前に渡りけり。
 華嚴、三論、法相、淨論水火なりけり。傳教大師此國に出でて、六宗の邪見を破るの
 みならず。眞言宗が天台の法華經の理を盗み取て、自宗の極とする事あらはれをば
 んぬ。傳教大師宗々の人師の異執をすて、專經文を前として責させ給しかば、
 六宗の高徳八人、十二人、十四人、三百餘人、並に弘法大師等責め落されて、日
 本國一人もなく天台宗に歸伏し。南都、東寺、日本一州の山寺、皆叡山の末寺とな
 りぬ。又漢土の諸宗の元祖の、天台に歸伏して謗法の失を免れたる事もあらは
 れぬ。又其後漸く世衰へ、人の智淺くなる程に、天台の深義は習ひ失ひぬ。佗宗の執
 心は強盛になる程に、漸く六宗七宗に天台宗をとされて弱りゆくかの故に、結局は
 六宗七宗等にも及ばぬ。いふに甲斐なき禪宗、淨土宗にをとされて、始は檀那漸く
 彼の邪宗に移る。結局は天台宗の碩徳と仰がるる人人、皆おち行て彼の邪宗をたす
 く。さるほどに六宗八宗の田畠所領みな倒され、正法失はてぬ。天照太神、正八幡、
 山王等諸の守護の諸天善神も、法味をなめざるか、國中を去り給かの故に、惡鬼

便を得て國すでに破れなんとす。此に予愚見を以て前四十餘年と、後八ヶ年との相
 違を考へみるに、其相違多しと雖も、先世間の學者もゆるし、我が身にもさもやと
 うちをばうる事は、二乗作佛、久遠實成なるべし。法華經の現文を拜見するに、舍利
 弗は華光如來、迦葉は光明如來、須菩提は名相如來、迦旃延は閻浮那提金光如來、
 目連は多摩羅跋梅檀香佛、富樓那は法明如來、阿難は山海慧自在通王佛、羅睺羅は
 踏七寶華如來。五百七百は普明如來、學無學二千人は寶相如來、摩訶波闍波提比丘
 尼、耶輸陀羅比丘尼等は、一切衆生喜見如來、具足千萬光相如來等也。此等の人人
 は、法華經を拜見し奉つるには尊きやうなれども、爾前の經經を披見の時は興さむ
 る事ども多し。其故は佛世尊は實語の人也。故に聖人、大人と號す。外典、外道の中
 の賢人、聖人、天仙など申すは、實語につけたる名なるべし。此等の人人に勝れて
 第一なる故に、世尊をば大人とは申すぞかし。此大人唯以一大事因緣故出現於世と
 なのらせ給て。未顯眞實、世尊法久後要當說眞實、正直捨方便等云。多寶佛證明
 を加へ、分身舌を出す等は。舍利弗が未來の華光如來、迦葉が光明如來等の説を
 ば、誰の人か疑網をなすべき。而ども爾前の諸經も又佛陀の實語也。大方廣佛華嚴

經に云、如來の智慧、大藥王樹、唯二處に於て生長の利益をなす能はず、所謂二乘、無爲廣大の深坑に墮ると、及び善根を壞る非器の衆生、大邪見貪愛の水に溺るゝと也等云。此經文の意は雪山に大樹あり、無盡根となづく。此を大藥王樹と號す。閻浮提の諸木の中の大王なり。此木高は十六萬八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は、此木の根ざし枝葉華果の次第に隨て華菓成るなるべし。此木をば佛の佛性に譬へたり。一切衆生をば一切の草木にたとふ。但此大樹は、火坑と水輪の中に生長せず。二乗の心中をば火坑に譬へ、一闍提人の心中をば水輪に譬へたり。此二類は永く佛に成るべからずと申す經文也。大集經に云二種の人あり、必死して活さず。畢竟して恩を知り恩を報すること能はず。一者聲聞、二者緣覺なり。譬ば人有て深坑に墮墜し、是人自利し佗を利すること能はざるが如く。聲聞緣覺も亦復是の如し。解脫の坑に墮して、自利し及び佗を利すること能はざるが如く。外典三千餘卷の所詮に二あり。所謂孝と忠となり。忠も又孝の家よりいでたり。孝と申すは高也。天高けれども孝よりも高からず。又孝とは厚也。地厚けれども孝よりも厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいでたり。何に況や佛法を學せん人、知恩、報恩なかるべ

しや。佛弟子は必ず四恩を知つて、知恩報恩をいたすべし。其上舍利弗迦葉等の二乘は、二百五十戒、三千の威儀持整して、味、淨、無漏の三靜慮、阿含經を究め、三界の見思を盡くせり。知恩、報恩の人の手本なるべし。然を不知恩の人なりと世尊定め給ひぬ。其故は父母の家を出て出家の身となるは、必ず父母を救はんが爲なり。二乘は自身は解脫と思へども、利佗の行缺けぬ。設ひ分々の利佗ありと雖も、父母等を永不成佛の道に入れば、却て不知恩の者となる。維摩經に云維摩詰又文殊師利に問ふ、何等か如來の種となす。答て曰一切塵勞の時、如來の種と爲る。五無間を以て具すと雖も、猶能此大道意を發す等云。又云譬は族姓の子、高原陸土には青蓮芙蓉の華を生せず。卑溼汗田乃此華を生ずるが如し等云。又云已に阿羅漢を得、應眞となる者、終に復道意を起して、佛法を具すること能はざる也。根敗の士、其五樂に於て能復利すること能はざるが如し等云。文の心は、貪瞋癡等の三毒は佛の種となるべし。殺父等の五逆罪は佛種となるべし。高原の陸土には青蓮華生ずべしとも、二乘は佛になるべからず。いふ心は二乗の諸善と、凡夫の惡と相對するに。凡夫の惡は佛になるとも、二乗の善は佛にならじと也。諸の小乘經には惡を戒

め善を褒む。此經には二乗の善をそしり、凡夫の惡をほめたり。かへつて佛經ともおぼへず、外道の法門のやうなれども、詮する所は二乗の永不成佛を強く定させ給にや。方等陀羅尼經に云、文殊、舍利弗に語らく、猶枯樹の如く更に華を生ずるや、不や。亦山水の如く木處に還るや、不や。折石還て合ふや、不や。焦種芽を生ずるや、不や。舍利弗の言く、不也。文殊の言く、若得可らずんば、何ぞ我に菩提の記を得るを問て、心に歡喜を生ずるや等云。文の意は枯たる木華さかず。山水山に還らず。破たる石あはず。焦れる種生いす。二乗または是の如し、佛種をいれり等となん。大品般若經に云、諸の天子今未だ三菩提心を發さずんば當に發すべし。若聲聞の正位に入れば是人能く三菩提心を發さる也。何を以ての故に、生死の爲に障隔を作す故に等云。文の意は二乗は菩提心を發されば、我隨喜せし、諸天は菩提心を發せば我隨喜せん。首楞嚴經に云、五逆罪の人、是首楞嚴三昧を聞て阿耨菩提心を發せば、還て佛と作るを得。世尊漏盡の阿羅漢は、猶破器の如く、永く是三昧を受るに堪忍せず等云。淨名經に云、其汝に施すものは福田と名けず、汝を供養せん者は三惡道に墮す等云。文の心は迦葉舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は、必三惡道に

墮つべしと也。此等の聖僧は佛陀を除きたてまつりては、人天の眼目、一切衆生の導師とこそ思ひしに。幾許の人天大會の中にして、かう度を仰せられしは本意なかりし事なり。只詮する所は我御弟子を責ころさんとにや。此外牛驢二乳、瓦器金器、燈火日光等の無量の譬を取て、二乗を呵嘖せさせ給き。一言二言ならず、一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一經二經ならず、四十餘年が間無量無邊の經々に無量の大會の諸人に對して、一言もゆるし給事も無くそしり給しかば、世尊の不安語なりと。我も知る、人も知る、天も知る、地も知る。一人二人ならず、百千萬人三界の諸天、龍神、阿脩羅、五天、四洲、六欲、色、無色、十方世界より雲集せる人天、二乘、大菩薩等皆これを知る。又皆これを聴く。各々國々へ還りて、娑婆世界の釋尊の説法を、彼々の國々にして一々に語るに、十方無邊の世界の一切衆生一人もなく迦葉舍利弗等は永不成佛の者、供養しては惡かりぬべしと知りぬ。而るを後八年の法華經に、忽に悔還して二乗作佛すべしと佛陀説かせ給はんに、人天大會信仰をなすべしや。用ゆべからざる上、先後の經々に疑網をなし、五十餘年の説教皆虛妄の説となりなん。されば四十餘年末顯眞實等の經文はあらまさせか、天魔の佛

陀と現じて、後八年の經をば説かせ給かと疑網する所に、實に實にしげに劫國名
 號と申して、二乗成佛の國を定め、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給
 へば、教主釋尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申はこれなり。外道が佛陀を
 大妄語の者と笑ひしことこれなり。人天大會興さめてありし程に、爾時に東方寶淨
 世界の多寶如來、高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬の大七寶塔に乘じて、教主釋尊
 の人天大會に自語相違をせめられて、左宣べ右宣べ、さまざまに宣べさせ給しかど
 も、不審猶ほ晴るべしとも見へず、もてあつかいてをばせし時、佛前に大地より涌
 現して虚空にのぼり給ふ。例せば暗夜に満月の東山より出るが如し。七寶の塔大虛
 にかゝらせ給て、大地にも付かず、大虛にも付せ給はず、天中に懸りて、寶塔の中よ
 り梵音聲を出して證明して云、爾時に寶塔の中より大音聲を出して歎めて言く、善
 哉善哉、釋迦牟尼世尊。能く平等大慈教菩薩法佛所護念の妙法華經を以て、大衆の
 爲に説き給ふ。是の如し、是の如し。釋迦牟尼世尊所説の如きは、皆是眞實なり等云。
 又云、爾時に世尊文殊師利等の無量百千萬億億住娑婆世界の菩薩、乃至人非人等、一
 切の衆の前に於て、大神力を現じ給ふ。廣長舌を出して上梵世に至らしめ、一切

の毛孔より、乃至十方世界諸の寶樹下の師子座上の諸佛も、亦復是の如く、廣長
 舌を出し、無量の光を放ち給ふ等云。又云、十方より來り給へる諸の分身の佛やし
 て、各本土に歸らしめんとして、乃至多寶佛の塔還て故の如くし給ふべし等云。
 大覺世尊初成道の時、諸佛十方に現じて釋尊を感諭し給ふ上、諸の大菩薩を遣し
 き。般若經の御時は、釋尊長舌を三千にをほひ、千佛十方に現じ給ひ、金光明經
 には、四方の四佛現せり。阿彌陀經には六方の諸佛舌を三千にをほふ。大集經には
 十方の諸佛菩薩、大寶坊に集れり。此等を法華經に引合て考ふるに、黃石と黄金と、
 白雲と白山と、白水と銀鏡と、黒色と、青色とをば、瞶眼の者、眇目の者、一眼の者、
 邪眼の者はみたがへつべし。華嚴經には先後の經なければ、佛語相違なし。何に付
 てか大疑いで來べき。大集經、小品經、金光明經、阿彌陀經等は、諸の小乘經の
 二乗を彈呵せんが爲に、十方に淨土を説き、凡夫菩薩を欣慕せしめ、二乗をわづら
 はず。小乘經と諸大乘經と一分の相違あるゆへに、或は十方に佛現じ給ひ、或
 は十方より大菩薩を遣はし、或は十方世界にも此經を説く由を示し、或は十方より
 諸佛集り給ふ。或は釋尊舌を三千におほひ、或は諸佛の舌を出す由を説せ給ふ。此

偏に諸小乘經の十方世界唯一佛と説せ給ひしおもひを破るなるべし。法華經の如くに、先後の諸大乘經と相違出來して、舍利弗等の諸の聲聞、大菩薩、人天等に將非魔作佛と思はれさせ給ふ大事にはあらず。而るを華嚴、法相、三論、眞言、念佛等の醫眼の輩、彼々の經々と法華經とは同じと打ち思へるは拙き眼なるべし。但在世は四十餘年を捨て、法華經につき候ものもやありけん。佛滅後に此經文を開見して信受せんこと難かるべし。先一には爾前の經々は多言也。法華經は一言也。爾前の經々は多經也。此經は一經也。彼々の經々は多年也。此經は八年也。佛は大妄語の人、永く信すべからず。不信の上に信を立てば、爾前の經々は信する事もありなん。法華經は永く信すべからず。當世も法華經をば皆信じたるやうなれども、法華經にてはなきなり。其故は法華經と大日經と、法華經と華嚴經と、法華經と阿彌陀經と一なるやうを説く人をば悦で歸依し、別々なるなんと申す人をば用す。たとひ用ゆれども、本意なき事と思へり。日蓮云日本に佛法渡つて既に七百餘年、但傳教大師一人計り法華經をよめりと申をば、諸人これを用す、但し法華經に云若須彌を接て他方の無數の佛土に擲げ置かんも、亦未だ爲難しとせず。乃至若佛滅後

に惡世の中に於て、能く此經を説かん、是則爲難し等云。日蓮が強義經文には普合せり。法華經の流通たる涅槃經に、末代濁世に謗法の者は十方の地の如し、正法の者は爪上の土の如しと説れて候は、何んがし候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よくよく思惟あるべし。賢王の世には道理かつべし。愚主の世に非道先をすべし。聖人の世に、法華經の實義顯るべし等と心うべし。此法門は迹門と爾前と相對して、爾前の強きやうに覺ゆ。若爾前強ならば、舍利弗等の諸の二乗は、永不成佛の者なるべし。何んが歎かせ給らん。二には教主釋尊は住劫第九の滅、人壽百歳の時、師子頰王には孫、淨飯王には嫡子、童子悉達太子、一切義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、始め寂滅道場にして實報華王の儀式を示現して、十玄六相、法界圓融、頓極微妙の大法を説き給ひ。十方の諸佛も顯現し一切の菩薩も雲集せり。土といひ、機といひ、諸佛といひ、初めといひ、何事につけてか大法を秘し給ふべき。されば經文には顯現自在力爲説圓滿經等云。一部六十卷は一字一點もなく圓滿經なり。譬へば如意寶珠は、一珠も無量珠も共に同じ。一珠も萬寶を盡くして雨し、萬珠も萬寶を盡すが如し。華嚴經は一字も萬字も

但同事なるべし。心佛及衆生の文は、華嚴宗の肝心なるのみならず、法相、三論、眞言、天台の肝要とこそ申し候へ。此等程いみじき御經に何事をか隠すべきなれども二乗阿提不成佛と説かれしは珠の疵と見ゆる上、三處まで始成正覺となのらせ給て、久遠實成の壽量品を説き隠させ給き。珠の破れたると、月に雲のかゝれると、日の蝕したるが如し。不思議なりし事也。阿含、方等、般若、大日經等は、佛説なればいみじき事なれども、華嚴經に對すればいかにいなし。彼經に秘せんこと、此等の經々に説かるべからず。されば諸阿含經に云、初成道等云。大集經に云、如來成道始十六年等云。淨名經に云、始坐佛樹力降魔等云。大日經に云、我昔坐道場等云。般若仁王經に云、二十九年等云。此等は言ふにたらず、只耳目を驚かす事は、無量義經に華嚴經の唯心法界、方等般若經の海印三昧、混同無二等の大法をかきあげて。或は未顯眞實、或は歷劫修行等下す程の御經に、我先に道場菩提樹の下に端坐すること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たりと。初成道の華嚴經も始成の文に同せられし、不思議と打思ふ所に、此は法華經の序分なれば、正宗の事をいはずもあるべし。法華經の正宗、略開三、廣開三の御時、唯佛與佛乃能究盡諸法實相等。世

尊法久後等、正直捨方便等。多寶佛迹門八品を指て、皆是眞實と證明せられしに、何事をか隠すべきなれども、久遠壽量をば秘させ給て、我始め道場に坐し樹を觀じて又經行す等云。最第一の大不思議也。されば彌勒菩薩、涌出品に、四十餘年の未見今見の大菩薩を、佛爾して乃之を教化して初て道心を發さしむ等と、説かせ給しを疑て云、如來太子たりし時、釋の宮を出でて迦耶城を去ること遠からず、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得給へり。是より已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此少時に於て大に佛事を作し給へる等云。教主釋尊此等の疑を晴さんが爲に、壽量品を説かんとして、爾前迹門の所聞を擧げて云、一切世間の天人及び阿脩羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂り等云。正しく此疑を答て云、然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗劫なり等云。華嚴乃至般若大日經等は、二乗作佛を隠すのみならず、久遠實成を説き隠させ給へり。此等の經々に二の失あり。一には行布を存する故に、仍ほ未だ權を開せず、迹門の一念三千を隠せり。二には始成を言ふ故に、曾て未だ迹を發せず、本門久遠を隠せり。

此等の二の大法は、一代の綱骨、一切經の心髓也。迹門方便品は、一念三千、二乗作佛を説て、爾前二種の失一を脱たり。然りと雖も未だ發迹顯本せざれば實の一念三千も顯はれず、二乗作佛も定まらず。水中の月を見るが如し。根なし草の波上に浮ぶるに似たり。本門にいたりて始成正覺を破ぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打破て、本門の十界の因果を説き顯はす。此即本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し。佛界も無始の九界に備て。眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし。かうて願れば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等、般若、金光明、阿彌陀經、大日經等の權佛等は、此壽量の佛の天月、しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の學者等、近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず。水中の月に實月の想をなし。或は入て取んとおもひ。或は繩をつけて羈とどめんとす。天台云、天月を識らず、但池月を觀す等云。日蓮案じて云、二乗作佛すら猶爾前づよにおぼゆ。久遠實成は又なるべくもなき爾前づりなり。其故は爾前法華相對するに、猶爾前強き上爾前のみならず迹門十四品も、一向に爾前に同す。本門十四品も涌出壽量の二品を除ては、皆始

成を存せり。雙林最後の大般涅槃經四十卷其外の法華前後の諸大經に、一字一句もなく、法身の無始無終は説けども、應身報身の顯本は説かれず。何んが廣博の爾前、本迹、涅槃等の諸大乘經をば捨て、但涌出壽量の二品には付くべき。されば法相宗と申す宗は、西天の佛滅後九百年に、無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、彌勒菩薩に對面して、一代聖教の不審をひらき。晝は阿輸舍國にして、法相の法門を弘め給ふ。彼の御弟子は世親護法難陀、戒賢等の大論師也。戒日大王頭を傾け、五天幢を倒して此に歸依す。尸那國の玄奘三藏、月氏に到りて十七年、印度百三十餘の國々を見き、て、諸宗をばふりすて此宗を漢土に渡して、太宗皇帝と申す賢王に授け給ひ。肪尙光基を弟子として、大慈恩寺、並に三百六十餘箇國に弘め給ひ。日本國には人王三十七代孝徳天皇の御宇に、道慈、道昭等習い渡して、山階寺にあがめ給へり。三國第一の宗なるべし。此宗の云始め華嚴經より終り法華涅槃經に至るまで、無性有情と決定性の二乗は、永く佛になるべからず。佛語に二言なし。一度永不成佛と定め給ぬる上は、日月は地に落ち給とも、大地は反覆すとも、永く改變有べからず。されば法華經、涅槃經の中にも、爾前の經々に嫌

し、無性有情、決定性を、正くつい指して成佛すとは説かれず。まつ眼を閉ぢて案せよ。法華經、涅槃經に決定性、無性有情正く佛に成るならば、無著、世親程の大論師、玄奘、慈恩程の三藏人師、之を見ざるべしや。此を載せざるべしや。此を信じて傳へざるべしや。彌勒菩薩に問ひたてまつらざるべしや。汝は法華經の文に依るやうなれども、天台、妙樂、傳教の僻見を信受して、其見を以て經文をみる故に、爾前に法華經は水火なりと見る也。華嚴宗と眞言宗は、法相三論には似るべくもなき超過の宗也。二乗作佛、久遠實成は法華經に限らず。華嚴經、大日經に分明也。華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀、眞言宗の善無畏、金剛智、不空等は、天台、傳教には似るべくもなき高位の人也。其上善無畏等は、大日如來より系みだれざる相承あり。此等の權化の人、いかでか誤りあるべき。隨て華嚴經には、或は釋迦佛道を成じ已て、不可思議劫を経るを見る等云。大日經には我は一切の本初なり等云。何ぞ但久遠實成毒量品に限らん。譬へば井底の蝦が大海を見ず、山左が洛中を知らざるが如し。汝但毒量の一品を見て、華嚴、大日經等の諸經を知らざるか。其上月氏、尸那、新羅、百濟等にも。一同に二乗作佛、久遠實成は法華經に限ると云か。されば八箇年の經は、四十

餘年の經々には相違せりと云とも、先判後判の中には後判につくべしと云とも、猶爾前づりにこそおぼうれ。又但在世計りならばさもあるべきに、滅後に居せる論師人師、多是爾前づりにこそ候へ。かく法華經は信じ難き上、世も漸く末になれば、聖賢は漸く隠れ、迷者は漸く多し。世間の淺き事すら猶あやまり易し。何に況や出世の深法、悞りなかるべしや。犢子、方廣が聰敏なりし、猶ほ大小乘經にあやまてり。無垢摩沓が利根なりし、權實二教を辨へず、正法一千年の内は、在世も近く、月氏の内なりし。既に此の如し。況や支那日本等は、國を隔て、音もかはれり。人の根も鈍なり、壽命も日淺し、貪瞋癡も倍増せり。佛世を去て年久し。佛教皆あやまれり。誰の智解が直かるべき。佛涅槃經に記して云、末法には正法の者は爪上の土、謗法の者は十方の土とみへぬ。法滅盡經に云、謗法の者は、恒河沙。正法の者は一二の小石と記しをき給ふ。千年、五百年に一人なんども、正法の者あり難からん。世間の罪に依て惡道に墮る者は爪上の土。佛法に依て惡道に墮る者は十方の土。俗よりも僧、女より尼、多く惡道に墮べし。此に日蓮案じて云、世すでに末代に入て二百餘年、邊土に生をうけ、其上下賤、其上貧道の身也。輪回六趣の間には、人天の大王と生て、萬民

をなびかす事、大風の小木の枝を吹が如くせし時も佛にならず。大小乗經の外凡内凡の大菩薩と修しあがり、一劫二劫無量劫を経て菩薩の行を立て、既に不退に入ぬべかりし時も、強盛の惡縁に落されて佛にもならず。しらす大通結縁の第三類の在世を漏たるか。久遠五百の、退轉して今に来るか。法華經を行せし程に、世間の惡縁、王難、外道の難、小乘經の難などは忍し程に、權大乘、實大乘經を極めたるやうなる、道練、善導、法然等が如くなる、惡魔の身に入りたる者。法華經をつよく譽めあげ、機を強に下し、理深解微と立て、未有一人得者千中無一等と賺し、者に無量生が間、恒河沙の度賺されて、權經に墮ちぬ。權經より小乘經に墮ちぬ。外道、外典に墮ちぬ。結句は惡道に墮けりと深く此をしれり。日本國に此を知れる者は但日蓮一人なり。此を一言も申し出すならば、父母、兄弟、師匠、國主の王難必來るべし。いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに。法華經、涅槃經等に此二邊を合せ見るに。云ずば今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮べし。云ならば三障四魔、必就ひ起るべしと知ぬ。二邊の中には云べし、王難等出來の時は、退轉すべくは一度に思ひ止むべしと且く休ひし程に。寶塔品の、六難九易此なり。我等程の小

力の者、須彌山はなぐとも。我等程の無通の者、乾草を負て劫火には焼けずとも。我等程の無智の者、恒沙の經々をば讀みおぼうとも。法華經は一句一偈も末代に持たしと説かるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心を起して退轉せしと願しぬ。既に二十餘年が間、此法門を申に、日々、月々、年々に難かさなる。少々の難は數しらす、大事の難四度なり、二度はしばらくおく、王難すでに二度に及ぶ。今度は既に我身命に及ぶ。其上弟子といひ、檀那といひ、僅の聽聞の俗人などと來て重科に行はる。謀反なんどの者の如し。法華經の第四に云、而も此經は、如來の現在すら猶怨嫉多し。況や滅度の後をや等云。第二に云、經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん等云。第五に云、一切世間怨多くして信じ難し等云。又云、諸の無智の人の、惡口罵詈する有らん等。又云、國王大臣婆羅門居士に向つて、誹謗して我惡を説て、是邪見の人なりと謂はん。又云、數々擯出せられん等云。又云、杖木瓦石もて之を打擲せん等云。涅槃經に云、爾時に多く無量の外道有て、和合して共に摩訶陀の王、阿闍世の所に往く。今は唯一の大惡人有り、瞿曇沙門なり。一切世間の惡人、利養の爲の故に、其所に往集して眷屬と爲て、能く善を修せず。呪術力の故に迎

業及舍利弗、目犍連を調伏す等云。天台云、何に況や未來をや。理化し難きに在る也。等云。妙樂云、障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞を喜ばざる者を嫉と名く等云。南山北七の十師、漢土無量の學者、天台を怨敵とす。得一云、咄哉、智公、汝は是誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を誘する等云。東春に云、問ふ在世の時許多の怨嫉あり。佛滅度の後此經を説く時、何が故ぞ亦留難多き耶。答て云、俗に良薬口に苦と言ふが如く。此經は五乘の異執を廢して、一極の立宗を立つ。故に凡を斥け、聖を呵し。大を排ひ小を破り。天魔を銘して毒蟲と爲し。外道を説て惡鬼と爲し。執小を貶して貧賤と爲し。菩薩を挫して新學と爲す。故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆へ、二乘は驚怪し、菩薩は怯行す。此の如きの徒、悉く留難を爲す。多怨嫉の言、豈唐哉等云。顯戒論に云、僧統奏して曰、西夏に鬼辦婆羅門あり。東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。此乃物類冥召して、世間を誑惑す等云。論じて曰、昔齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。實なる哉法華の何況也等云。秀句に云、代を語れば、則像の終り末の初め。地を尋ぬれば、則唐の東、翔の西、人を原ぬれば、則五濁の生、闍諍の時なり。經に云、猶多怨嫉况滅度後。此言良に以ある

也等云。夫小兒に灸治を加ふれば、必母を怨む。重病の者に良薬を與うれば、定て口に苦しと憂ふ。在世猶然り、乃至像末邊土をや。山に山をかさね、波に波をたゝみ、難に難を加へ、非に非をますべし。像法の中には天台一人、法華經一切經を讀めり。南北此を怨みしかども、陳隋二代の聖主、眼前に是非を明めしかば、敵遂に盡きぬ。像法の末に傳教一人、法華經一切經を佛説の如く讀み給へり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我と明め給しかば又事なし。今末法の始め二百餘年也。況滅度後の兆に、闍諍の序となるべき故に、非理を前として濁世の險に召し合せられずして、流罪乃至壽にも及ばんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は、天台傳教には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事は、畏れをも懷ぬべし。定て天の御計ひにもあづかるべしと存すれども、一分の險もなし。いよいよ重科に沈む。還て此事を計りみれば、我身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此國を捨て、去り給へるか。かたぐ疑はし。而るに法華經の第五の卷、勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此國に生れずば、殆世尊は大妄語の人。八十萬億那由他の菩薩は、提婆が虚誑罪にも墮ぬべし。經に云、有諸無智人惡口罵

誓等、加刀杖瓦石等云。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加らるゝ者ある。日蓮なくば此一偈の未來記は妄語となりぬ。惡世中比丘邪智心詔曲又云、與白衣說法爲世所恭敬如六通羅漢。此等の經文は今の世の念佛者、禪宗、律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人。常在天衆中乃至向國王大臣婆羅門居士等。今の世の僧等、日蓮を譏奏して流罪せずば此經文むなし。又云、數々見擯出等云。日蓮法華經の故に度々流されずば、數々の二字いかながせん。此二字は天台傳教も未だ讀み給はず。況や餘人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふ故に、但日蓮一人これをよめり。例せば世尊が付法藏經に記して云、我滅後一百年に阿育大王と云王あるべし。摩耶經に云、我滅後六百年に龍樹菩薩と云人、南天竺に出づべし。大悲經に云、我滅後六十年に末田地と云者、地を龍宮に築くべし。此等皆佛記の如くなりき。しからずば誰か佛教を信受すべき。而るに佛恐怖惡世、然後末世、末法滅時、後五百歲などと、正妙の二本に正しく時を定め給ふ。當世法華の三類の強敵なくば、誰か佛説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語を助けん。南三北七、七大寺等、猶像法の法華經の敵

の内、何に況や當世の禪、律、念佛者等は脱べしや。經文に我身普合せり。御勘氣を蒙れば愈々悦をますべし。例せば小乗の菩薩の未斷惑なるが、願兼於業と申し、造りたくなき罪なれども、父母等の地獄に墮て大苦を受くるを見て、形の如く其業を造つて、願つて地獄に墮ちて苦に同じ、苦に代れるを悦びとす。此も此の如し。當時の責は堪へくもなければ、未來の惡道を脱すらんと思へば悦ぶ也。但し世間の疑といひ、自心の疑と申し、いかでか天扶け給はざるらん。諸天等の守護神は佛前の御誓言あり。法華經の行者には發になりとも、法華經の行者と號して、早に佛前に御誓言をとげんとこそおぼすべきに、其義なきは我身法華經の行者にあらざるか。此疑ひは此書の肝心、一期の大事なれば處々にこれを書く上、疑ひを強くして答をかまうべし。季札と云し者は、心の約束を違へじと、王の重寶たる劍を徐君が墓にかく。王壽と云し人は、河の水を飲で金の鷺目を水に入れ。公胤と云し人は、腹をさいて主君の肝を入れる。此等は賢人也。恩を報するなるべし。況や舍利弗迦葉等の大聖は、二百五十戒、三千の威儀、一つもかけず。見思を斷じ、三界を離れたる聖人也。梵帝諸天の導師、一切衆生の眼目也。而るに四十餘年が間、永不成佛と嫌す

てはてられてありしが、法華經の不死の良藥をなめて、焦種の生、破石の合、枯木の華果などせるが如く、佛になるべしと許されて未だ八相を唱へず、いかでか此經の重恩をば報せざらん。若報せずば彼々の賢人にも劣りて不知恩の畜生なるべし。毛寶が龜は、襖の恩を忘れず。昆明池の大魚は、命の恩を報せんと明珠を夜中に捧げたり。畜生すら猶恩を報ず。何に況や大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は淨飯王の孫也。人中に家高き上、證果の身となつて成佛を抑へられたりしに、八年の靈山の席にて山海慧、蹈七寶華など如來の號を授けられ給ふ。若法華經在さずば何に家高く大聖なりとも、誰か恭敬し奉るべき。夏の桀、殷の紂と申すは萬乘の主、士民の歸依なり。然れども政あしくして世を滅ぼせしかば、今にわるきもの、手本には桀紂、桀紂とこそ申せ。下賤の者癩病の者も桀紂の如しといはれぬれば、罵れたりと腹だつなり。千二百無量の聲聞は、法華經在さずば誰か名をもさくべき、其音をも習ふべき。一千の聲聞、一切經を結集せりとも見る人よもあらじ。まして此等の人々を繪像木像にあらはして本尊と仰ぐべしや。此偏に法華經の御力によつて、一切の羅漢歸依せられさせ給ふなるべし。諸の聲聞法華を離れさせ給ふ

ば、魚の水を離れ、猿の木を離れ、小兒の乳を離れ、民の王を離れたるが如し。いかでか法華經の行者をすて給へき。諸の聲聞は、爾前の經々にては肉眼の上に天眼、慧眼を得、法華經にして法眼、佛眼備はれり。十方世界すら猶照見し給らん。何に況や此娑婆世界の中、法華經の行者を知見せられざるべしや。設日蓮惡人にて一言二言、一年二年、一劫二劫、乃至百千萬億劫、此等の聲聞を惡口罵詈し奉り、刀杖を加まいらする色なりとも、法華經をだにも信仰したる行者ならば、すて給へからず。譬へば幼稚の父母を罵る、父母これをすつるや。梟鳥が母を食ふ、母是をすてず。破鏡父を害す、父是に従ふ。畜生すら猶是の如し。大聖法華經の行者を捨べしや。されば四大聲聞の領解の文に云、我等今者眞に是聲聞なり。佛道の聲を以て一切をして聞かしむべし。我等今者眞に阿羅漢なり。諸の世間天人魔梵に於て、普く其中に於て應に供養を受くべし。世尊は大恩まします。希有の事を以て憐愍教化して我等を利益し給ふ。無量億劫にも誰か能報する者あらん。手足をもて供給し、頭頂をもて禮敬し、一切をもて供養すとも、皆報すること能はじ。若は以て頂戴し、兩肩に荷負して、恆沙劫に於て心を盡して恭敬し、又美膳、無量の寶衣、及び諸の臥具種

種の湯藥を以てし、牛頭栴檀及び諸の珍寶以て塔廟を起て、寶衣を地に布き、斯の如き等の事以て供養すること、恆沙劫に於てすとも亦報すること能はじ等云諸の聲聞等は前四味の經々に幾許その呵嘖を蒙り、人天大會の中に於て恥辱がましき事其數を知らず、然れば迦葉尊者の涕泣の音は三千を響かし、須菩提尊者は亡然として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食を吐き、富樓那は畫瓶に糞を入ると嫌はる。世尊鹿野苑にしては阿含經を讚歎し、二百五十戒を師とせよなどと嚴勸にはめさせ給て、今又いつのまに我所説をば、斯はそしらせ給と、二言相違の失とも申しぬべし。例せば世尊提婆達多を、汝愚人、人の唾を食ふと罵詈せさせ給しかば、毒箭の胸に入が如く想ひてうらみて云、瞿曇は佛陀にはあらず、我れは斛飯王の嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が一類也。何に悪き事ありとも、内々教訓すべし。此等程の人天大會に、此程の大禍を現に向て申すもの、大人佛陀の中にあるべしや。されば先々は妻のかたき。今は一座のかたき。今日より生々世々に大怨敵となるべしと誓ひしぞかし。此を以て思ふに、今諸の大聲聞は、本外道婆羅門の家より出たり。又諸の外道の長者なりしかば、諸王に歸依せられ、諸檀那に尊まる。或は種姓高貴の人もあり。或は

富福充滿の族もあり。而に彼々も榮官等をうちすて、慢心の幢を倒して、俗服を脱ぎ、瓊色の糞衣を身に纏ひ、白拂弓箭等をうちすて、一鉢を手に握り、貧人乞丐などの如くして、世尊につき奉り。風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海皆外道の弟子檀那なれば、佛すら九横の大難にあひ給ふ。所謂提婆が大石を飛せし。阿闍世王の醉象を放し、阿耆多王の馬麥、婆羅門城の漿、旃遮婆羅門女が鉢を腹に伏せし。何に況や所化の弟子の數難申す計りなし。無量の釋子は波瑠璃王に殺され、千萬の眷屬は醉象にふまれ。華色比丘尼は提婆に害せられ、迦盧提尊者は馬糞に埋まれ。目犍尊者は竹杖に害せらる。其上六師同心して阿闍世、婆斯匿王等に譏奏して云、瞿曇は閻浮第一の大惡人也。彼が到る處は三災七難を前とす。大海の衆流を集め、大山の衆木を集めたるが如し、瞿曇が處には衆惡を集めたり。所謂迦葉、舍利弗、目連、須菩提等也。人身を受けたる者は、忠孝を先とすべし。彼等は瞿曇に賺されて父母の教訓をも用す。家を出で、王法の宣をもそむいて山林にいたる。一國に跡をとらむべき者にはあらず。されば天には日月、衆星、變をなす。地には衆天さかなりなんと訴う。堪へしとも覺へざりし

に、又うち添ふ災と佛陀にもうち副ひ難くてありしなり。人天大會の衆會の砌にて、時々呵嘖の音をきしかば、何にあるべしとも覺へず。只狼狽心のみ也。其上大難の第一なりしは、淨名經の、其汝に施す者は、福田と名けず。汝を供養する者は三惡道に墮す等云。文の心は佛菴羅苑と申す處に在しに、梵天、帝釋、日月、四天、三界諸天、地神、龍神、等無數恒沙の大會の中にして云。須菩提等の比丘等を供養せん天人は、三惡道に墮つべし。此等をうちきく天人、此等の聲聞を供養すべしや。詮する所は佛の御言を用て、諸の二乗を殺害せさせ給ふかと思ひ心あらん人は、佛をも疎ぬべし。されば此等の人々は、佛を供養し奉りし序にこそ、僅の身命をも扶けさせ給しか。されば事の心を案するに、四十餘年の經々のみ説れて、法華八箇年の所説なくて、御入滅ならせ給ひたらましかば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉べき。現身に餓鬼道にこそをはすべけれ。而に四十餘年の經々をば、東春の大日輪、寒氷を消滅するが如く、無量の草露を大風の零落するが如く。一言一時に未顯眞實と打けし。大風の黒雲をまき。大虛に満月の處するが如く。青天に日輪の懸り給が如く。世尊法久後要當說眞實と照させ給て。華光如來、光明如來等と、

舍利弗、迦葉等を、赫々たる日輪、明々たる月輪の如く、風文にしるし、龜鏡に浮べられて候へばこそ、如來滅後の人天の諸檀那等には佛陀の如くは仰がれ給しか。水すまば月影を惜むべからず、風ふかば草木靡かざるべしや。法華經の行者あるならば、此等の聖者は大火の中を過ぎて、大石の中を通りても、訪はせ給べし。迦葉の入定もことにこそよれ。いかにとなりぬるぞ、不審とも申すばかりなし。後五百歳のあたらざるか。廣宣流布の妄語となるべきか。日蓮が法華經の行者ならざるか。法華經を教内と下して、別傳と稱する大妄語の者を守護り給べきか。捨閉閑抛と定て、法華經の門を閉ぢよ、卷をなげすてよと彫り付て、法華堂を失へる者を守護し給べきか。佛前の誓ひはありしかども、濁世の大難のはげしさを見て諸天下り給ざるか。日月天に在す、須彌山今も崩す、海潮も増減す、四季も法の如く違はず、いかになりぬるやらんと、大疑いよくつもり候。又諸大菩薩天人等の如きは、爾前の經々にして記別をうるやうなれども、水中の月を取んとするが如く、影を體と思が如く、いろかたちのみあて實義もなし。又佛の御恩も深くて深からず。世尊初成道の時は、未だ説教もなかりしに、法慧菩薩、功德林菩薩、金剛幢菩薩、金剛藏菩薩

等なんと申せし六十餘の大菩薩。十方の諸佛の國土より、教主釋尊の御前に來り給て、賢首菩薩、解脫月等の菩薩の請に趣いて、十住、十行、十回向、十地等の法門を説き給き。此等の大菩薩の所説の法門は、釋尊に習ひ奉るにあらす。十方世界の諸の梵天等も來て法を説く。又釋尊に習ひ奉らず。總じて華嚴會座の大菩薩。天龍等は、釋尊已前に不思議解脫に住せる大菩薩也。釋尊の過去因位の御弟子にや有らん。十方世界の先佛の御弟子にや有らん。一代教主始成正覺の佛の弟子にはあらす。阿含、方等、般若の時、四教を佛の説き給し時こそ、漸く御弟子は出來して候へ。此も又佛の自説なれども正説にはあらす。ゆへ何となれば。方等、般若の別圓二教は、華嚴經の別圓二教の義趣を出でず。彼の別圓二教は、教主釋尊の別圓二教にはあらす。法慧等の別圓二教也。此等の大菩薩は人目には佛の御弟子かとは見ゆれども、佛の御師ともいひぬべし。世尊彼の菩薩の所説を聽聞して智發して後、重て方等般若の別圓を説けり。色もかはらぬ華嚴經の別圓二教也。されば此等の大菩薩は、釋尊の師也。華嚴經に此等の菩薩を數へて、善知識と説かれしは是也。善知識と申は、一向師にもあらす。一向弟子にもあらすある事也。藏通二教は又別圓の枝流也。別

圓二教を知る人、必藏通二教を知るべし。人の師と申すは、弟子の知らぬ事を教へたるが師にては候也。例せば佛より前の一切の人天外道は、二天三仙の弟子也。九十五種まで流派ありしかども、三仙の見を出す。教主釋尊も彼に習ひ傳て、外道の弟子にて在せしが。苦行樂行十二年の時、苦空、無常、無我の理を悟り出てこそ、外道の弟子の名をば離させ給て、無師智とは名のらせ給しか。又人天も大師とは仰まいらせしか。されば前四味の間は、教主釋尊、法慧菩薩等の御弟子也。例せば文殊は釋尊九代の御師と申が如し。つねは諸經に不説一字と説せ給も是也。佛御年七十二の年、摩竭提國靈鷲山と申す山にして、無量義經を説せ給ひしに、四十餘年の經々を擧て、枝葉をば其中におさめて、四十餘年未顯眞實と打消し給は此也。此時こそ諸大菩薩、諸天人等は、周章て實義を請せんとは申せしか。無量義經にて實義とをばしき事一言ありしかども、未だ實なし。譬へば月の出んとして其體東山にかくれて、光り西山に及べども、諸人月體を見ざるが如し。法華經方便品の略開三顯一時、佛略して一念三千、心中の本懷を宣べ給ふ。始めの事なれば、時鳥の音を寢惚たる者の、一音きゝたるがやうに、月の山の半を出たれども、薄雲の覆へるが如く幽

なりしを、舍利弗等驚て諸天龍神大菩薩等をもよをして、諸天龍神等其數恒沙の如し。佛を求むる諸の菩薩大數八萬あり。又諸の萬億國の轉輪聖王の至れる、合掌して敬心を以て、具足の道を聞んと欲す等とは請せし也。文の心は四味三教四十餘年の間、未だきかざる法門うけ給はらんと請せし也。此文に欲聞具足道と申は、大經に云、薩とは、具足の義に名く等云。無依無得大乘四論玄義記に云、沙とは譯して六と云。胡法六を以て具足の義と爲す也等云。吉藏の疏に云、妙とは翻じて具足と爲す等云。天台の玄義の八に云、薩とは梵語此に妙と翻する也等云。付法藏の第十三眞言華嚴諸宗の元祖、本地は法雲自在王如來、迹に龍猛菩薩、初地の大聖の大智度論千卷の肝心に云、薩とは六也等云。妙法蓮華經と申は漢語也。月支には薩達磨分陀利伽蘇多羅と申。善無畏三藏の法華經の肝心眞言に云、曇跋三曼陀沒跋南、阿阿暗惡、薩縛勃陀、枳攬委乞芻毗耶、譏譏三沙、縛交羅乞又爾、薩哩達磨、浮陀哩迦、蘇駄覽、惹入、呼、鑊、發、羅、乞、又、給、呼、婆、訶、此眞言は南天竺の鐵塔中の法華經の肝心の眞言也。此眞言の中に、薩哩達磨と申は正法也。薩と申は正也。正は妙也。妙は正也。正法華、妙法華是也。又妙法蓮華經の上に、南無の

二字ををけり。南無妙法蓮華經これ也。妙とは、具足、六とは六度萬行、諸の菩薩の六度萬行を具足するやうをさかんとをもふ。具とは、十界互具。足と申は一界に十界あれば、當位に餘界あり、満足の義也。此經一部八卷二十八品、六萬九千三百八十四字、一一に皆妙の一字を備て、三十二相、八十種好の佛陀也。十界に皆、己界の佛界を顯す。妙樂云、尙佛果を具す、餘果も亦然り等云。佛此を答て云、衆生をして佛知見を開かしめんと欲す等云。衆生と申は舍利弗、衆生と申は一闍提、衆生と申は九法界、衆生無邊誓願度此に満足す。我本誓願を立つ、一切の衆をして我如く等として異なること無しめんと欲す。我昔の願せし所の如き、今者已に満足しぬ等云。諸大菩薩諸天等、此法門をさひて領解して云、我等昔より來、數世尊の説を聞き奉れども、未だ曾て是の如き深妙の上法を聞かず等云。傳教大師云、我等從昔來數聞世尊説と云は、昔法華經の前、華嚴等の大法を説くを聞けども也。未曾聞如是深妙之上法と謂は、未だ法華經の唯一佛乘の教を聞かず等云。華嚴、方等、般若、深密、大日等の恆河沙の諸大乘經は未だ一代の肝心たる一念三千の大綱骨髄たる、二乗作佛、久遠實成等を未だ聞かずと領解せり。

開目鈔下

又今よりこそ諸大菩薩も、梵帝、日月、四天等も、教主釋尊の御弟子にては候へ。されば寶塔品には此等の大菩薩を、佛我御弟子等とをばす故に。諫曉して云、諸の大衆に告ぐ、我滅度の後、誰か能此經を護持し、讀誦する。今佛前に於て自ら誓言を説けとは、したゝかに仰せ下せしが。又諸大菩薩も、譬ば大風の、小樹の枝を吹が如し等と。吉祥草の大風に隨ひ、河水の大海へ引くが如く、佛には隨ひまいらせか。而とも靈山日淺くして、夢の如く寤ならずありしに、證前の寶塔の上に、起後の寶塔あて、十方の諸佛來集せる。皆我が分身なりとなのらせ給ひ。寶塔は虚空に、釋迦多寶坐を竝べ、日月の青天に竝出せるが如し。人天大會は星を連ね、分身の諸佛は大地の上、寶樹の下、師子の牀に在ます。華嚴經の蓮華藏世界は十方此土の報佛、各々に國々にして、彼界の佛此土に來て分身となのらす。此界の佛彼の界へゆかず。但法慧等の大菩薩のみ互に來會せり。大日經、金剛頂經等の八葉九卷三十七卷

等、大日如來の化身とはみゆれども、其化身、三身圓滿の古佛にあらず。大日經の千佛、阿彌陀經の六方の諸佛、未だ來集の佛にあらず。大集經の來集の佛、又分身ならず。金光、明經の四方の四佛は化身也。總じて一切經の中に、各修各行の三身圓滿の諸佛を集て、我分身とは説れず。これ壽量品の遠序也。始成四十餘年の釋尊が、一劫十劫等以前の諸佛を集めて分身と説かる。さすが平等の意趣にも似すと、夥くをどろかし。又始成の佛ならば、所化十方に充滿すべからざれば、分身の徳は備りたりとも示現して益なし。天台云、分身既に多し、當に知るべし成佛久きことを等云。大會の驚きし意を書れたり。其上に地涌千界の大菩薩、大地より出來せり。釋尊に第一の御弟子とをばしき、普賢、文殊等にもにるべくもなし。華嚴、方等、般若、法華經の寶塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此の菩薩に對當すれば、彌猴の群る中に帝釋の來り給ふが如し。山人に月卿等のまじはるに異らず。補處の彌勒すら猶迷惑せり。何に況や其已下をや。此千世界の大菩薩の中に、四人の大聖在す。所謂上行、無邊行、淨行、安立行なり。此の四人は虚空靈山の諸菩薩等、眼もあはせ、心も及ばず。華嚴經の四菩薩、大日經の四菩薩

金剛頂經の十六大菩薩等も、此の菩薩に對すれば、翳眼の者の日輪を見るが如く、海人が皇帝に向ひ奉るが如し。大公等の四聖の衆中にありしに似たり。商山の四皓が惠帝に仕へしに異ならず。魏々堂々として尊高也。釋迦多寶十方の分身を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉ぬべし。彌勒菩薩心に念言すらく、我は佛の太子の御時より、三十成道、今の靈山まで四十二年が間、此界の菩薩十方世界より來集せし諸大菩薩皆知りたり。又十方の淨穢土に、或は御使ひ、或は我と遊戯して、其國々に大菩薩を見聞せり。此大菩薩の御師などとは何なる佛にてやあるらん。よも此釋迦多寶十方の分身の佛陀には似るべくもなき佛にてこそおはすらめ。雨の猛を見て龍の大なることを知り、華の大なるを見て池の深きことはしんぬべし。此等の大菩薩の來る國、又誰と申す佛に値ひ奉り、何なる大法をか習修し給らんと疑ひし。あまりの不審さに音をも出すべくもなければども、佛力にやありけん。彌勒菩薩疑て云、無量千萬億の大衆の諸の菩薩は昔より未だ曾て見ざる所なり。是の諸の大威徳の精進の菩薩衆は、誰か其爲に法を説て、教化して成就せる。誰に従つてか初て發心し、何れの佛法をか稱揚せる。世尊、我昔より來、未だ曾て是事を見

ず。願ば其所從の國土の名號を説き給へ。我常に諸國に遊べども、未だ曾て是事を見ず。我此衆の中に於て、乃し一人をも識らず。忽然に地より出たり。願ば其因縁を説き給へ等云。天台云、寂場より已降、今座已往十方の大士來會して絶えず限る可らずと雖も、我補處の智力を以て悉く見悉く知る。而れども此衆に於て一人をも識らず。然るに我十方に遊戯して諸佛に親奉し、大衆に快く識知せらるる等云。妙樂云、智人は起を知る、蛇自蛇を識る等云。經釋の心分明也。詮する所は初成道より來、此土十方にて此等の菩薩を見奉らず、聞かずと申すなり。佛此疑を答て云、阿逸多、汝等昔より未だ見ざる所の者は、我是娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得已て、是諸の菩薩を教化し示導して、其心を調伏して道の意を發さしめたり等。又云、我伽耶城菩提樹下に於て、坐して最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を教化して、初て道心を發さしむ。今皆不退に住せり。乃至我久遠より來、是等の衆を教化せり等云。此に彌勒等の大菩薩、大に疑をもふ。華嚴經の時法慧等の無量の大菩薩集る。何なる人々なるらんと思へば、我善知識也と仰られしかば、さもやとうちをもひき。其後の大寶坊白鷲池等の來會の大菩薩

も爾の如し。此大菩薩は彼等には似る可もなき舊りたりげに在す。定で釋尊の御師匠かなんとおぼしきを、令初發道心とて、幼稚の者どもなりしを教化して弟子と成せりなると仰あれば、大なる疑なるべし。日本の聖德太子は人王第三十二代、用明天皇の御子也。御年六歳の時、百濟、高麗、唐土より老人どもの渡りたりしを六歳の太子我弟子也と仰ありしかば、彼老人ども又合掌して我師也等云。不思議なりし事なり。外典に申す。或者道をゆけば路の邊に、年三十計りなる若者が、八十計りなる老人をとらへて打けり。何なる事ぞと問へば、此老翁は我子也、なると申すと語るにも似たり。されば彌勒菩薩等疑て云、世尊如來太子たりし時、釋の宮を出て伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得給へり。是より已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此少時に於て、大に佛事を作し給へる等云。一切の菩薩、始華嚴經より四十餘年會々に疑を設けて、一切衆生の疑網をはらす中に、此疑第一の疑なるべし。無量義經の大莊嚴等の八萬の大士、四十餘年と今との歴劫疾成の疑にも超過せり。觀無量壽經に、韋提希夫人の阿闍世王が提婆に賺されて、父の王を鋼め、母を殺さんとせしが、耆婆月光にを

とされて母を放ちたりし時、佛を請じ奉つて先づ第一の問に曰、我昔何の罪あつて此惡子を生む。世尊復何等の因縁有つて、提婆達多と共に眷屬と爲り給ふ等云。此疑の中に世尊復有何等因縁等の疑は、大なる大事也。輪王は敵と共に生れず。帝釋は鬼ともならず。佛は無量劫の慈悲者なり。何に大怨と共に在す。還て佛には在さざるかと疑ふなるべし。而ども佛答へ給はず。されば觀經を讀誦せん人、法華經の提婆品へ入らずば、徒事なるべし。大涅槃經に迦葉菩薩の三十六の問も、此に及ばず。されば佛此の疑を晴させ給はずは、一代の聖教は泡沫に同じ。一切衆生は疑網にかゝるべし。壽量の一品の大切なるこれなり。其後佛壽量品を説て云、一切世間の天人及阿脩羅は、皆今の釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給へりと謂へり等云。此經文は始め寂滅道場より、終り法華經の安樂行品に至るまでの、一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。然に善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由劫劫なり等云。此文は華嚴經の三處の始成正覺阿含經に云、初成淨名經の始坐佛樹大集經に云、始十六年大日經の我昔坐道場、仁王經の二十九年無量義經の我先道場

法華經の方便品に云、我始坐道場等を一言に大虚妄也と破る文也。此過去常顯る、時諸佛皆釋尊の分身也。爾前迹門の時は、諸佛釋尊に肩を並べて、各修各行の佛也。故に諸佛を本尊とする者、釋尊等を下す。今華嚴の臺上方等、般若、大日、經等の諸佛は、皆釋尊の眷屬也。佛三十成道の御時は、大梵天王、第六天等の、知行の娑婆世界を奪ひ取り給き。今爾前迹門にして十方を淨土と號して、此土を穢土と説かれしを打かへして。此土は本土也。十方の淨土は垂迹の穢土となる。佛は久遠の佛なれば、迹化佗方の大菩薩も、教主釋尊の御弟子也。一切經の中に此壽量品在さずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんが如くしてあるべきを、華嚴、眞言等の權宗の智者とをぼしき、澄觀、嘉祥、慈恩、弘法等の一往權宗の人、且は自の依經を讚歎せん爲に、或は云、華嚴經の教主は報身、法華經は應身と。或は云、法華壽量品の佛は無明の邊城、大日經の佛は明の分位等云、雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讚れば黃石も玉とみへ、諛臣も賢人かとをぼゆ。今濁世の學者等、彼等の讒議に隠されて壽量品の玉を翫ばず。又天台宗の人々も誑されて、金石一同のをもひをなせる人々もあり。佛久成に在さずば、所化の少かるべき

事を辨ふべきなり。月は影を慳ざれども、水なくばうつるべからず。佛衆生を化せんとをぼせども、結縁うすければ八相を現せず。例せば諸の聲聞が初地初住にはのぼれども、爾前にして自調自度なりしかば、未來の八相を期するなるべし。然れば教主釋尊始成ならば、今此世界の梵帝、日月、四天等は、劫初より此土を領すれども、四十餘年の佛弟子也。靈山八年の法華結縁の衆、今まいの主君にをもひつかず。久住の者に隔らるゝが如し。今久遠實成あらはれぬれば、東方の樂師如來の日光、月光、西方阿彌陀如來の觀音、勢至、乃至十方世界の諸佛の御弟子、大日金剛頂等の兩部の大日如來の御弟子の諸大菩薩、猶教主釋尊の御弟子也。諸佛釋迦如來の分身たる上は、諸佛の所化は申すに及ばず。何に況や此土の劫初より以來の、日月、衆星等、教主釋尊の御弟子にあらずや。而るを天台宗より外の諸宗は本尊にまごへり。俱舍、成實、律宗は、三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天竺の太子が迷惑して、我身は民の子とをもふが如し。華嚴宗、眞言宗、三論宗、法相宗等の四宗は、大乘の宗也。法相三論は勝應身に似たる佛を本尊とす。天王の太子、我父は侍とをもふが如し。華嚴宗、眞言宗は、釋尊を下て盧舍那大日等を本尊と定む。天子たる父を下

て、種姓もなき者の法王の如くなるにつけり。淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有縁の佛と思ひて、教主を捨てたり。禪宗は下賤の者、一分の徳有て父母を下が如く、佛をさげ、經を下す。此皆本尊に迷へり。例せば三皇已前に父を知らず、人皆禽獸に同せしが如し。壽量品を知らざる諸宗の學者は畜に同じ。不知恩の者也。故に妙樂云、一代教の中未だ曾て遠を顯さず、父母の壽知らずんばある可らず。若父の壽の遠きを知らざれば、復父統の邦に迷ふ。徒に才能と謂とも、全く人の子に非ず等云。妙樂大師は唐の末天寶年中の者也。三論、華嚴、法相、眞言等の諸宗。竝に依經を深く見廣く勘へて、壽量品の佛を知らざる者は、父統の邦に迷へる才能ある畜生とかける也。徒謂才能とは華嚴宗の法藏、澄觀乃至眞言宗の善無畏三藏等は、才能の大師なれども、子の父を知らざるが如し。傳教大師は日本顯密の元祖、秀句に云、佗宗所依の經は一分佛母の義ありと雖も、然れども唯愛のみ有て、嚴の義を缺く。天台法華宗は嚴愛の義を具す。一切の賢聖學無學、及び菩薩心を發せる者の父也等云。眞言華嚴等の經々には、種熟脱の三義名字すら猶なし。何に況や、其義をや。華嚴、眞言經等の一生初地の即身成佛等は、經は權經にして過去をかくせり。種をしらざる脱

なれば、超高が位にのほり、道鏡が王位に居せんとせしが如し。宗々互に權を爭ふ。予此をあらそはず、但經に任すべし。法華經の種に依て天親菩薩は種子無上を立てたり、天台の一念三千これなり、華嚴經乃至諸大乘經、大日經等の諸尊の種子、皆一念三千也。天台智者大師一人此法門を得給へり。華嚴宗の澄觀此義を盗んで、華嚴經の心如工畫師の文の神とす。眞言大日經等には二乗作佛、久遠實成、一念三千の法門これ無し。善無畏三藏の震旦に来て後、天台の止觀を見て智發し、大日經の心實相、我一切本初の文の神に、天台の一念三千を盗み入れて、眞言宗の肝心として、其上に印と眞言とをかざり、法華經と大日經との勝劣を判する時、理同事勝の釋を作れり。兩界の漫茶羅の二乗作佛、十界互具は、一定大日經にありや。第一の誑惑也。故に傳教大師云、新來の眞言家は則ち筆受の相承を泯し、舊到の華嚴家は則ち影響の軌模を隠す等云。俘囚の島などに渡て、ほのくといふ歌は我れ詠みたりなど申すは、蝦夷體の者はさこそと思ふべし。漢土日本の學者又是の如し。良婿和尚云、眞言、禪門、華嚴、三論乃至若法華等を望めば、是接引門等云。善無畏三藏の閻魔の責にあづからせ給しは此邪見による。後に心をひるがへし、法華經

に歸伏してこそ、此責をば脱させ給しか。其後善無畏、不空等、法華經を兩界の中央におきて、大王の如くし。胎藏の大日經、金剛の金剛頂經をば、左右の臣下の如くせし是也。日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて、法華經を第八に置しかども。事相の時には實慧、眞雅、圓澄、光定等の人人に傳へ給ひし時、兩界の中央に上の如く置れたり。例せば三論の嘉祥は、法華玄十卷に、法華經を第四時、會二破二と定めども、天台に歸伏して七年つかへ、廢講散衆して身を肉橋となせり。法相の慈恩は法苑林七卷十二卷に、一乘方便、四乘眞實等の妄言多し。然れども玄贊の第四には、故亦兩存等と、我宗を不定になせり。言は兩方なれども、心は天台に歸伏せり。華嚴の澄觀は華嚴の疏を造て、華嚴、法華相對して、法華を方便と書けるに似たれども、彼宗之を以て實と爲す。此宗の立義理通せざることを無し等と書けるは、悔還にあらずや。弘法も又此の如し。龜鏡なければ我面を見ず、敵なければ我非を知らず。眞言等の諸宗の學者等、我非をしらざりし程に、傳教大師に値ひ奉つて、自宗の失を知るなるべし。されば諸經の諸佛、菩薩、人天等は、彼々の經々にして佛にならせ給やうなれども、實には法華經にして正覺なり給へり。釋迦諸佛の衆生無邊

の總願は、皆此經に於て満足す。今者已満足の文これなり。予事の山を推し計るに、華嚴、觀經、大日經等を讀み修行する人をば、其經々の佛菩薩諸天等守護し給らん、疑ひある可らず。但し大日經、觀經等を讀む行者等、法華經の行者に敵對をなさば、彼の行者をすて、法華經の行者を守護すべし。例せば孝子慈父の王敵となれば、父を捨て、王に參る孝の至り也。佛法も亦此の如し。法華經の諸佛菩薩十羅刹、日蓮を守護し給ふ上、淨土宗の六方の諸佛、二十五の菩薩、眞言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護し給へし。例せば七宗の守護神が、傳教大師を守り給しが如しとおもふ。日蓮案じて云、法華經の二處三會の座に在し、日月等の諸天は、法華經の行者出來せば、磁石の鐵を吸ふが如く、月の水に遷るが如く、須臾に來て行者に代り、佛前の御誓をはたさせ給へしとこそおぼへ候に、今まで日蓮を訪ひ給はぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか。されば重て經文を勘へて我身に於て、身の失をしるべし。疑て云、當世の念佛宗、禪宗等をば、何なる智眼をもつて法華經の敵人、一切衆生の惡知識とはしるべきや。答て云、私の言を出すべからず。經釋の明鏡を出して、謗法の醜面をうかべ、其失を見せしめん。生盲は力及ばず。法華經

の第四寶塔品に云、爾時に多寶佛、寶塔の中に於て半座を分ち、釋迦牟尼佛に與ふ。爾時に大衆、二如來の七寶の塔の中の師子座上に在して、結伽趺座し給を見奉る。大音聲を以て普く四衆に告げ言く、誰か能此娑婆國土に於て、廣く妙法華經を説かんと、今正しく是時なり。如來久からずして、當に涅槃に入るべし。佛此妙法華經を以て附屬して在ること有しめんと欲す等云、第一の勅宣也。又云、爾時に世尊重て此義を宣べんと欲して、偈を説て言く、聖主世尊久く滅度し給ふと雖も、寶塔の中に在して尙法の爲に來り給へり。諸人云何を勤めて法に爲さらん。又我分身の無量の諸佛恆沙等の如く來れる、法を聽かんと欲す。各妙なる士及び弟子衆、天人龍神諸の供養の事を捨て、法をして久く住せしめんが故に、此に來至し給へり。譬へば大風の小樹の枝を吹くが如し。此方便を以て、法をして久しく住せしむ。諸の大衆に告ぐ、我滅度の後、誰か能此經を護持し讀誦せん。今佛前に於て自ら誓言を説け。第二の風詔也。多寶如來及び我身、集むる所の化佛、當に此意を知るべし。諸の善男子、各諦に思惟せよ。此は爲難き事なり。宜く大願を發すべし。諸餘の經典、數恆沙の如し、此等を説くと雖も、未だ爲難しとするに足らず。若須彌を接て北方の無

數の佛土に擲げ置んも、亦未だ爲難しとせず。若佛滅後惡世の中に於て能此經を説かんと。是則爲難し。假使劫燒に乾たる草を擔ひ負ふて、中に入れて燒けざらんも、亦未だ爲難しとせず。我滅度の後に、若此經を持て一人の爲にも説かん。是則爲難し。諸の善男子我滅後に於て、誰か能此經を護持し讀誦せん。今佛前に於て、自誓言を説け等云、第三の諫勅也。第四第五の二箇の諫曉提婆品にあり、下に書くべし。此經文の心は眼前也。青天に大日輪の懸が如く、白面に照のあるに似たり。而ども生盲の者と、邪眼の者と、一眼の者と、各謂自師の者、邊執家の者は見がたし。萬難をすてて道心あらん者に記止めて見せん。西王母が園の桃、輪王出世の優曇華よりもあひがたく。沛公が項羽と八年漢士を争ひし。賴朝と宗盛が七年秋津島に戦ひし。脩羅と帝釋と、金翅鳥と龍王と、阿耨池に諍へるも此にはすぐ可らずとしるべし。日本國に此法顯るゝこと二度也。傳教大師と、日蓮と也と知れ。無限の者は疑ふべし。力及ぶ可らず。此經文は日本、漢土、月氏、龍宮、天上、十方世界の一切經の勝劣を、釋迦多寶十方の佛、來集して定め給ふなるべし。問て云、華嚴經、方等經、般若經、深密經、楞伽經、大日經、涅槃經等は九易の内か、六難の内か。答て云、華嚴宗の杜順、智

儼、法藏、澄觀等の三藏大師讀で云、華嚴經と法華經と六難の内、名は二經なれども所説乃至理これ同じ。四門觀別見真諦同の如し。法相の玄奘三藏、慈恩大師等讀で云、深密經と法華經とは、同く唯識の法門にして、第三時の教、六難の内也。三論の吉藏等讀で云、般若經と法華經とは、名異體同二經一法也。善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等讀で云、大日經と法華經とは理同じ、全く六難の内、日本の弘法讀で云、大日經は六難九易の内にあらず。大日經は釋迦所説の一切經の外、法身大日如來の所説也。又或人云、華嚴經は報身如來の所説、六難九易の内にはあらず。此四宗の元祖等かやうに讀みければ、其流をくむ數千の學徒等も、又此見をいでず。日蓮歎いて云、上の諸人の義を左右なく非なりといは、當世の諸人面を向べからず。非に非を重ね、結句は國主に譏奏して命に及べし。但し我等が慈父、雙林最後の御遺言に云、法に依て人に依らざれ等云。不依人等とは、初依、二依、三依、第四依、普賢文殊等の等覺の菩薩が法門を説き給ふとも、經を手に握らざらんをば用ゆべからず。了義經に依て不了義經に依らざれと定めて、經の中にも了義、不了義經を糺明して、信受すべきこそ候ひぬれ。龍樹菩薩の十住毘婆沙論に云、脩多羅

論に依らずして、脩多羅白論に依れ等云。天台大師云、脩多羅と合ふ者は録して之を用よ。文無く、義無きは、信受すべからず等云。傳教大師云、佛説に依憑して口傳を信すること莫れ等云。圓珍、智證大師云、文に依て傳ふ可し等云。上に擧る所の諸師の釋、皆一分經論に依て勝劣を辨ふやうなれども、皆自宗を堅く信受し、先師の謬議を糾さざる故に、曲會私情の勝劣也。莊嚴已義の法門也。佛滅後の頼子、方廣後漢已後の外典は、佛法外の外道の見よりも、三皇五帝の儒書よりも、邪見強盛なり。邪法巧也。華嚴、法相、真言等の入師。天台宗の正義を嫉ゆへに、實經の文を會して、權義に順せしむること強盛也。然れども道心あらん人、偏黨を捨て、自他宗を諍はず、人を蔑る事なかね。法華經に云、已今當等云。妙樂云、縦ひ經有て諸經の王と云ふも、已今當説最爲第一と云はず等云。又云、已今當の妙、茲に於て固く迷ふ。謗法の罪苦、長劫に流る等云。此經釋に驚て一切經竝に入師の疏釋を見るに、狐疑の氷解けぬ。今真言の愚者等、印、真言のあるを恃みて、真言宗は法華經に勝れたりと思ひ、慈覺大師の真言勝れたりと仰せられぬれば、なんと思へるは云ふに甲斐なき事也。密嚴經に云、十地華嚴等と、大樹と、神通勝鬘及び餘經と、皆此經より出たり。是の

如きの密嚴經は一切經の中に勝れたり等云。大雲經に云、是經は則、是諸經の轉輪聖王なり。何を以の故に、是經典の中に衆生の實性、佛性、常住の法藏を宣説する故也等云。六波羅蜜經に云、所謂過去無量の諸佛所説の正法及び我今説く所の所謂八萬四千の諸の妙法蓋なり。攝して五分と爲す。一には素咀纒、二には毗奈耶、三には阿毗達磨、四には般若波羅蜜、五には陀羅尼門と也。此五種の藏を以て有情を教化す。若彼有情、契經、調伏、對法、般若を受持すること能はず。或は復有情諸の惡業、四重、八重、五無間罪、方等經を謗する一闍提等の種々の重罪を造るに、銷滅して速疾に解脫し、頓に涅槃を悟ることを得せしむ。而も彼が爲に諸の陀羅尼藏を説く。此五の法藏、譬ば乳、酪、生蘇、熟蘇及び妙なる醍醐の如し。總持門とは譬ば醍醐の如し。醍醐の味は乳、酪、蘇の中に微妙第一にして、能諸の病を除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ。總持門とは契經等の中に最も第一と爲す、能く重罪を除くと等云。解深密經に云、爾時に勝義生菩薩、復佛に白して言く、世尊初め一時に於て、波羅遮斯仙人、墮處施鹿林の中に在て、唯聲聞乘を發趣する者の爲に、四諦の相を以て正法輪を轉じ給ひき。是甚奇にして、甚爲希有にして、一切世間の諸の天人等

先より能く法の如く轉ずる者有ることなしと雖も、而も彼時に於て轉じ給ふ所の法輪は、有上なり、有容なり、是未了義なり、是諸の諍論安息の處所也。世尊昔第二時の中に唯發趣して大乘を修する者の爲、一切の法は皆無自性也。無生無滅也。本來寂靜也。自性涅槃なるに依る。隱密の相を以て、正法輪を轉じ給ひき。更に甚奇にして、甚此希有なりと雖も、而も彼時に於て轉じ給ふ所の法輪亦是有上也。容受する所有り。猶未了義ならず。是諸の諍論安息の處所也。世尊今第三時の中に於て、普く一切乘を發趣する者の爲に、一切の法は皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃にして無自性の性なるに依り、顯了の相を以て、正法輪を轉じ給ふ。第一甚奇にして、最も爲希有也。今に世尊轉じ給ふ所の法輪、無上無容にして是眞の了義也。諸の諍論安息の處所に非ず等云。大般若經に云、聽聞する所の世出世の法に隨つて、皆能く方便して般若甚深の理趣に會入し、諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に會入し、一事として法性を出る者を見ず等云。大日經第一に云、秘密主大乘行あり、無緣乘の心を發す、法に我性無し、何を以ての故に。彼往昔是の如く修行せし者の如きは、蓋の阿賴耶を觀察して、自性幻の如しと知る等云。又云

秘密主彼是の如く無我を捨て、心主自在にして自心の本不生を覺す等云。又云所謂空性は根境を離れ、無相にして境界なく、諸の戲論に越へて虚空に等同也。乃至極無自性等云。又云大日尊秘密主に告げて言く、秘密主云何なるか菩提、謂く實の如く自心を知る等云。華嚴經に云、一切世界の諸の群生、聲聞、乘を求めんと欲すること有ること妙し。緣覺を求むる者轉復少し、大乘を求むる者甚希有也。大乘を求むる者猶爲易く、能是法を信する爲甚難し。況や能く受持し、正憶念し、説の如く修行し、眞實に解せんをや。若三千大千世界を以て頂戴すること一劫身動かざらんも彼の所作、未だ爲難からず。是法を信する者は甚難し。大千塵數の衆生の類に、一劫諸の樂具を供養するとも、彼の功德未だ是勝れず。是法を信する者爲殊勝也。若手を以て十佛刹を持し、虚空中に於て住すること一劫なるも、彼の所作未だ爲難からず。是法を信する者爲甚難し。十佛刹塵の衆生の類に、一劫諸の樂具を供養せんも、彼の功德未だ爲勝れりと爲す。是法を信する者爲殊勝也。十佛刹塵の諸の如來を一劫恭敬して供養せん。若能く此品を受持せん者の功德、彼よりも最勝と爲す等云。涅槃經に云、是諸の大乘、方等經典、復無量の功德を成就すと雖

も、是經に比せんと欲するに喩を爲を得ざること、百倍、千倍、百千萬倍、乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所也。善男子、譬は牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生蘇を出し、生蘇より熟蘇を出し、熟蘇より醍醐を出す。醍醐は最上なり。若服することある者は、衆病皆除き、所有の諸藥も悉く其中に入るが如し。善男子、佛も亦是の如し。佛より十二部經を出し、十二部經より脩多羅を出し、脩多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃を出し、大涅槃より法華經を出し、法華經の已今當六難九易に相對すれば、月と言は佛性に喩ふ等云。此等の經文を、法華經の已今當六難九易に相對すれば、月に星を並べ、九山に須彌を合せたるに似たり。然れども華嚴宗の澄觀、法相、三論、眞言等の慈恩、嘉祥、弘法等の佛眼の如くなる人、猶此文に惑へり。何に況や盲眼の如くなる當世の學者等、勝劣を辨ふべしや。黑白の如く明に、須彌芥子の如くなる勝劣、なほ惑へり。況や虚空の如くなる理に迷はざるべしや。教の淺深をしらざれば、理の淺深を辨ふ者なし。卷をへだて文前後すれば、教門の色辨へ難ければ、文を出して愚者を扶けんとおもふ。王に小王、大王、一切に少分、全分、五乳に全喩、分喩を辨ふべし。六波羅蜜經は有情の成佛あつて、無性の成佛なし。何に況や久遠寶成

をあかさす。猶涅槃經の五味に及ばず。何に況や法華經の迹門、本門に對すべしや。而るに日本の弘法大師、此經文に惑ひ給ひて、法華經を第四の熱蘇味に入れ給へり。第五に總持門の醍醐味すら涅槃經に及ばず。何にし給けるやらん。而るを震旦人師爭盜醍醐と、天台等を盗人と書き給へり。惜哉、古賢不背醍醐等と、自歎せられたり。此等はさて措く。我一門の者の爲に記す、他人は信せざれば逆縁なるべし。一涕をなめて大海の潮をしり。一華を見て春を推せよ。萬里を渡りて宋に入らずとも、三箇年を経て靈山に到らずとも、龍樹の如く龍宮に入らずとも、無著菩薩の如く彌勒菩薩に値はずとも、二所三會に値はずとも、一代の勝劣は之を知れるなるべし。蛇は七日が内の洪水を知る、龍の眷屬なる故。鳥は年中の吉凶を知れり、過去に陰陽師なりしゆへ。鳥は飛ぶ徳人に過ぐれたり。日蓮は諸經の勝劣を知ること、華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の弘法にすぐれたり。天台傳教の跡を偲ぶ故也。彼人々は天台傳教に歸せさせ給はずば、謗法の失脱れさせ給ふべしや。當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經に奉つり、名をば後代に留むべし。大海の主となれば、諸の河神皆從ふ。須彌山の王に、諸の山神從はざるべし。

や。法華經の六難九易を辨ふれば、一切經を讀まざるに從ふべし。寶塔品の三箇の敷宣の上に、提婆品に二箇の諫曉あり。提婆達多は一闍提也、天王如來と記せらる。涅槃經四十卷の現證は、此品にあり。善星、阿闍世等の無量の五逆謗法の者の一をあげ、頭をあげ、萬ををさめ、杖をしたがふ。一切の五逆、七逆謗法、闍提、天王如來にあらはれ了んぬ。毒藥變じて甘露となる、衆味に勝れたり。龍女が或佛此一人にあらはらず、一切の女人の成佛をあらはす。法華已前の諸の小乘經には、女人の成佛を許さず。諸の大乗經には成佛往生を許すやうなれども、或は改轉の成佛にして一念三千の成佛にあらざれば、有名無實の成佛往生なり。舉一例諸と申て、龍女が成佛は、末代の女人の成佛往生の道をふみあけたるなるべし。儒家の孝養は今生に限る。未來の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無實也。外道は過未を知れども、父母を扶る道なし。佛道こそ父母の後世を扶れば聖賢の名はあるべけれ。然れども法華經已前等の大小乗の經宗は、自身の得道猶かなひがたし。何に況や父母をや。但文のみありて義なし。今法華經の時こそ女人成佛の時、慈母の成佛も顯れ。達多の惡人成佛の時、慈父の成佛も顯るれ。此經は內典の孝經也。二箇の諫め了

んぬ。已上五箇の鳳詔に驚きて、勸持品の弘經あり。明鏡の經文を出して當世の禪律、念佛者、並びに諸檀那の謗法をしらしめん。日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸刎られぬ。此は魂魄佐土の國にいたりて、返年の二月雪中に書して有縁の弟子へ贈れば、をそろしくて怕からず。見ん人何にをぢぬらむ。是は釋迦多寶十方の諸佛の、未來日本國當世をうつし給ふ明鏡也。記念とも見るべし。勸持品に云、唯願くば慮ひし給ふ爲す。佛滅度の後、恐怖惡世の中に於て、我等當に廣く説くべし。諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん。我等當に忍ぶべし。惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲得たりとおもひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に納衣にして空閑に在つて、自眞の道を行すと謂ふて、人間を輕賤する者あらん。利養に貪著するが故に、白衣の爲に法を説て、世に恭敬せらるゝことを爲ること、六通の羅漢の如くならん。是人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に假て、好で我等の過を出さん。常に大衆の中に在て、我等を毀んと欲するが故に、國王、大臣、婆羅門、居士及び餘の比丘衆に向て、誹謗して我惡を説きて、是邪見の人、外道の論議を説くと謂はん。濁劫惡世の中には多く

諸の恐怖あらん。惡鬼其身に入て、我を罵詈毀辱せん。濁世の惡比丘は、佛の方便隨宜所説の法を知らず、惡口して鬪鬪し、數々擯出せらん等云。記の八に云、文に三、初に一行は通じて邪人を明す、即俗衆也。次に一行は道門増上慢の者を明す。三に七行は僧聖増上慢の者を明す。此三の中に初は忍ぶべし。次のは前に過ぎたり。第三最も甚し。後々の者は轉た識り難きを以ての故に等云。東春に智度法師云、初に有諸より下の五行は、第一に一偈は三業の惡を忍ぶ、是外惡の人なり。次に惡世の下の一偈は、是上慢出家の人なり。第三に或有阿練若より下の三偈は、即是出家の處に一切の惡人を攝す等云。又云、常在大衆より下の兩行は、公處に向て法を毀り人を謗す等云。涅槃經の九に云、善男子一闍提あり、羅漢の像を作して空處に住し方等大乘經典を誹謗せん。諸の凡夫人、見已つて皆眞の阿羅漢、是大菩薩なりと謂はん等云。又云、爾時に是經閑浮提に於て、當に廣く流布すべし。是時當に諸の惡比丘あつて、是經を抄畧し、分つて多分となし、能正法の色香美味を滅すべし。是の諸の惡人復是の如き經典を讀誦すと雖も、如來深密の要義を滅除して、世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す。前を抄して後に著け、後を抄して前に著け、前

後を中に著け、中を前後に著く。當に知るべし、是の如きの諸の惡比丘は、是魔の伴
 侶なり等云。六卷の般泥洹經に云、阿羅漢に似たる一闍提あつて、而も惡業を行す。
 一闍提に似たる阿羅漢あつて、而も慈心を作さん。羅漢に似たる一闍提ありとは、
 是諸の衆生方等を誹謗せるなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、聲聞を毀訾し、廣
 く方等を説くなり。衆生に語つて言く、我汝等と俱に是菩薩なり。所以は何ん一切
 皆如來の性ある故に。然も彼の衆生一闍提なりと謂はん等云。涅槃經に云、我涅槃の
 後乃至正法滅して後、像法の中に於て、當に比丘あるべし。持律に似像して少に經
 を讀誦し、飲食を貪嗜し、其身を長養す。袈裟を服すと雖も、猶獵師の細視徐行する
 が如く。貓の鼠を伺ふ如し。常に是言を唱ん。我羅漢を得たりと。外には賢善を現
 し、内には貪嫉を懷かん。瘧法を受たる婆羅門等の如し。實には沙門にあらずして、
 沙門の像を現じ。邪見熾盛にして、正法を誹謗せん等云。夫鷲峰雙林の日月、毗濕東
 春の明鏡に、當世の諸宗竝に國中の禪律、念佛者が醜面を浮べたるに、一分もく
 もりなし。妙法華經に云、於佛滅度後恐怖惡世中、安樂行品に云、於後惡世。又云、於末
 世中。又云、於後末世法欲滅時、分別功德品に云、惡世末法時。藥王品に云、後五百歲等

云。正法華經の勸說品に云、然後末世。又云、然後來末世等。添品法華經に云等。天台
 の云、像法の中の南三北七は法華經の怨敵也。傳教の云、像法の末、南都六宗の學者
 は、法華經の怨敵なり等云。彼等の時は未だ分明ならず。此は教主釋尊多寶佛、寶塔
 の中に日月の竝ぶが如く、十方分身の諸佛、樹下に星を列ねたりし中にして、正法
 一千年、像法一千年、二千年過ぎて、末法の始に、法華經の怨敵、三類あるべしと、八
 十萬億那由他の諸菩薩の定め給し、虛妄となるべしや。當世は如來滅後二千二百餘
 年也。大地は指ば外るとも、春は花は咲すとも、三類の敵人必日本國にあるべし。
 さるにては誰々の人々か三類の内なるらん。又誰人か法華經の行者なりと指され
 たるらん、覺束なし。彼の三類の怨敵に、我等入りてやあるらん。又法華經の行者の
 内にてやあるらん、覺束なし。周の第四昭王之御宇二十四年甲寅四月八日の夜中
 に、天に五色の光氣南北に互て晝の如し。大地六種に震動し、雨ふらずして江河井
 池の水まさり。一切の草木に花さき葉なりたりけり。不思議なりし事なり。昭王大
 に驚き、大史蘇由占て云、西方に聖人生れたり。昭王問て云、此國いかん。答て云
 事なし。一千年の後に彼聖言此國に渡りて、衆生を利すべし。彼の僅の外典の一毫末

斷見思の者然ども一千年の事をしる。はたして佛教一千一十五年と申せし、後漢の第二明帝の永平十年丁卯の年、佛法漢土に渡る。此は似るべくもなき、釋迦多寶十方分身の佛の御前の諸菩薩の未來記也。當世日本國に、三類の法華經の敵人なかるべしや。されば佛付法藏經等に記して云、我滅後に正法一千年が間、我正法を弘むべき人二十四人、次第に相續すべし。迦葉阿難等はさてをきぬ。一百年の脇比丘。六百年の馬鳴。七百年の龍樹菩薩等、一分も違はず既に出給ひぬ。此事何かんがむなしかるべき。此事相違せば一經皆相違すべし。所謂舍利弗が未來の華光如來。迦葉の光明。如來も皆妄語となるべし。爾前返て一定となつて、永不成佛の諸聲聞なり。犬野干をば供養すとも、阿難等をば供養すべからずとなん。いかんがせん。いかんがせん。第一の有諸無智人と云ふは、經文の第二の惡世中比丘と、第三の納衣の比丘の大檀那等と見へたり。隨て妙樂大師は俗衆等云。東春に云、公處に向ふ等云。第二の法華經の怨敵は經に云、惡世中の比丘は邪智にして心諂曲に、未得ざるを爲得たりと謂、我慢の心充滿せん等云。涅槃經に云、是時に當に諸の惡比丘あるべし。乃至是諸の惡人、復是の如き經典を讀誦すと雖も、如來深密の要義を滅除せん

等云。止觀に云、若信無きは高く聖境に推して己が智分に非とす。若智無きに増上慢を起し、己れ佛に均しと謂ふ等云。道綽禪師が云、二に理深解微なるに由る等云。法然云、諸行は機に非ず時を失ふ等云。記の十に云、恐くは人謬り解せん者、初心の功德の大なることを識らずして功を上位に推て此初心を蔑にせん。故に今彼に行淺く功深きことを示して、以て經力を顯はす等云。傳教大師云、正像稍過ぎ已て、末法太だ近きにあり。法華一乘の機、今正しく是其時なり。何を以て知ることを得る、安樂行品に云、末世法滅の時也等云。慧心の云、日本一州圓機純一なり等云。道綽と、傳教と、法然と、慧心と、何れ此を信すべしや。彼は一切經に證文なし。此は正しく法華經によれり。其上日本國一同に叡山の大師は受戒の師也。何ぞ天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげすつるや。法然智者ならば何ぞ此釋を選擇に載せて、和會せざる人の理を隠せる者也。第二の惡世中比丘と指るは、法然等の無戒邪見の者也。涅槃經に云、我等悉く邪見の人と名く等云。妙樂云、自三教を指て皆邪見と名く等云。止觀に云、大經に云、此よりの前は我等皆邪見の人と名くる也。邪豈惡に非ずや等云。弘決に云、邪は即是惡なり。是故に當に知るべし、唯圓を善と爲す。復二

意あり。一には順を以て善と爲し、背を以て惡と爲す。相待の意也。著を以て惡と爲し、達を以て善と爲す。相待、絶待俱に須く惡を離るべし。圓に著する尙惡なり。況や復餘をや等云。外道の善惡は、小乘經に對すれば皆惡道。小乘の善道乃至四味三教は、法華經に對すれば皆邪惡。但法華のみ正善也。爾前の圓は相對妙。絶對妙に對すれば猶惡也。前三教に攝すれば、猶惡道也。爾前の如く彼の經の極理を行する、猶惡道也。況や觀經等の猶華嚴般若經等に及ざる小法を本として、法華經を觀經に取入れて、還て念佛に對して闍拋閉捨せるは、法然並に所化の弟子等檀那等は、誹謗正法の者にあらずや。釋迦多寶十方の諸佛は、法をして久く住せしめんが故に、此に來至し給へり。法然並に日本國の念佛者等は、法華經は末法に念佛より前に滅盡すべしと。豈三聖の怨敵にあらずや。第二は法華經に云、或は阿練若あり納衣にして空閑に在て、乃至白衣の與に法を説て世に恭敬せらるゝを爲ること、六通の羅漢の如くならん等云。六卷の般泥洹經に云、羅漢に似たる一闍提有て、而も惡業を行じ、一闍提に似たる阿羅漢あつて、而も慈心を作さん。羅漢に似たる一闍提ありとは、是諸の衆生の方等を誹謗するなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、聲聞を毀訾して廣

く方等を説き、衆生に語て言く、我汝等と俱に是菩薩なり。所以は何ん、一切皆如來の性有るが故に。然も彼の衆生は一闍提と謂はん等云。涅槃經に云、我涅槃の後、像法の中に於て當に比丘あるべし。持律に似像して少に經典を讀誦し、飲食を貪嗜して其身を長養せん。袈裟を服すと雖も猶獵師の細視徐行するが如く、貓の鼠を伺ふが如し。常に是言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現はし、内には貪嫉を懷く。瘡法を受たる婆羅門等の如く、實には沙門に非して沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん等云。妙樂の云、第三最も甚し。後々の者轉た識り難きを以ての故に等云。東春に云、第三に或有阿練若より下の三偈は、卽是出家の處に、一切の惡人を攝す等云。東春に卽是出家處攝一切惡人等とは、當世日本國には何れの處ぞや。叡山か、園城か、東寺か、南都か、建仁寺か、壽福寺か、建長寺か、よくくたづぬべし。延曆寺の出家の頭に甲冑をよろうをさすべきか。園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帶せるか。彼等は經文に納衣在空閑と指にはにす。爲世所恭敬如六通羅漢と人をもはず。又轉難識故と云べしや。華洛には聖一等、鎌倉には良觀等に似たり。人を怨むことなかれ、眼あらば經文に我身をあわせよ。止觀第一云、止觀の明靜な

ることは前代未だ聞かず等云。弘の一に云、漢の明帝夜夢しより、陳朝に泊ふまで厠
 て禪門に豫り、衣鉢傳授する者等云。補注に云、衣鉢傳授とは、達磨を指す等云。止の
 五に云、又一種の禪人乃至盲跛の師徒、二俱に墮落す等云。止の七に云、九の意世間
 の文字の法師と共ならず。事相の禪師と共ならず。一種の禪師は唯觀心の一意のみ
 あり。或は淺く、或は偽る。餘の九は全く此無し。虚言に非ず。後賢眼あらむ者は當
 に證知すべき也。弘の七に云、文字法師とは内に觀解無くして唯法相を構ふ。事相の
 禪師とは境智を閑はず、鼻膈に心を止む。乃至根本有漏定等なり。一師唯有觀心一
 意等とは。此は且く與へて論を爲す。奪へば則 觀解俱に闕く。世間の禪人偏に理
 觀を尙ぶ。既に教を諳んせず、觀を以て經を消し。八邪八風を數へて、丈六の佛と爲
 し。五陰三毒を合して、名けて八邪となし。六入を用ひて、六通となし。四大を以て、
 四諦と爲す。此の如く經を解するは偽の中の偽なり。何を淺く論ず可んや等云。止
 觀の七に云、昔鄴洛の禪師、名河海に播き、住すれば則ち四方雲の如くに仰ぎ。去れ
 ば則ち阡陌群を成し。隱々蘇々亦何の利益かある。臨終に皆悔ゆ等云。弘の七に云、
 鄴洛の禪師とは、鄴は相州に在り、即ち齊魏の都する所なり。大に佛法を興す、禪祖

の一其地を王化す。時人の意を護て其名を出さず。洛は即ち洛陽なり等云。六卷の
 般泥洹經に云、究竟の處を見ずとは、彼の一闍提の輩の究竟の惡業を見ざるなり等
 云。妙樂云、第三最も甚し。轉識り難きが故に等。無眼の者、一眼の者、邪見の者は、
 末法の始の三類を見べからず。一分の佛眼を得るもの此をしるべし。向國王大臣
 婆羅門居士等云。東春に云、公處に向ひ法を毀り人を誘す等云。夫昔像法の末には、
 護命、修圓等、奏狀をさへげて傳教大師を譏奏す。今末法の始には、良觀、念阿等、偽
 書を注して將軍家にさへぐ。豈三類の怨敵にあらずや。當世の念佛者等、天台法華
 宗の檀那の國王、大臣、婆羅門居士等に向て云、法華經は理深、我等は解微。法は至
 て深く。機は至て淺し等と申しうとむるは、高推聖境、非己智分の者にあらずや。
 禪宗の云、法華經は月をさす指、禪宗は月也。月を得て指なにかせん。禪は佛の心、
 法華經は佛の言也。佛法華經等の一切經を説かせ給て後、最後に一ふさの華をもつ
 て迦葉一人にさづく。其しるしに佛の御袈裟を迦葉に付屬し、乃至付法藏の二十
 八、六祖までに傳ふ等云。此等の大安語國中を誑醉せしめて年久し。又天台眞言の
 高僧等、名は其家に得たれども我宗にくらし。貪欲は深く、公家武家を恐れて、此義

を證伏し、讚歎す。昔の多寶分身の諸佛は、法華經の合法久住を證明す。今天台宗の碩徳は、理深解微を證伏せり。かるがゆへに日本國に但法華經の名のみあつて、得道の人一人もなし。誰をか法華經の行者とせん。寺塔を焼て流罪せらるゝ僧侶は數を知らず。公家武家に諛ふて憎るゝ高僧此多し。此等を法華經の行者といふべきか。佛語空からざれば三類の怨敵既に國中に充滿せん。金言の破るべきかの故に、法華經の行者なし。如何せん、如何せん。抑も誰やの人か衆俗に惡口罵詈せらるゝ。誰の僧か刀杖を加へらるゝ。誰の僧をか法華經の故に公家武家に奏する。誰の僧か數を見擯出と度々流さるゝ。日蓮より外に日本國に取出さんとするに人なし。日蓮は法華經の行者にあらず。天これをすて給ゆへに。誰をか當世の法華經の行者として、佛語を實語とせん。佛と提婆とは、身と影との如し。生々に離れず。聖徳太子と守屋とは、蓮華の花葉同時なるが如し。法華經の行者あらば、必ず三類の怨敵あるべし。三類は既にあり、法華經の行者は誰なるらむ。求めて師とすべし。一眼の龜の浮木に値なるべし。有人云、當世の三類はほゞ有に似たり。但し法華經の行者なし。汝を法華經の行者といはんとすれば、大なる相違あり。此經に云天の諸の童子

以て給使を爲さん。刀杖も加へず、毒も害すること能はじ。又云、若人惡罵すれば口則ち閉塞す等。又云、現世安穩にして後善處に生れん等。又頭破れて七分と作ること、阿梨樹の枝の如くならん。又云、亦現世に於て其福報を得ん等。又云、若復是經典を受持する者を見て、其過惡を出せば、若は實にもせよ、若は不實にもせよ、此人現世に白癩の病を得ん等。答て云、汝が疑ひ大に吉し、序に不審を晴さむ。不輕品に云、惡口罵詈等。又云、或は杖木瓦石を以て、之を打擲す等。涅槃經に云、若殺若害等。法華經に云、而も此經は如來の現在すら猶怨嫉多し等。佛は小指を提婆に傷られ、九横の大難に値ひ給ふ。此れ法華經の行者にあらずや。不輕菩薩は一乘の行者といはれまじきか。目連は竹杖に殺さる、法華經記筈の後也。付法藏の第十四の提婆菩薩、第二十五の師子尊者の二人は、人に殺れぬ。此等は法華經の行者にはあらざるか。竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面にやいて、江南に移つさる。此等は一乘の持者にあらざるか。北野の天神、白居易は遠流せらる。賢人にあらざるか。事の心を案するに、前生に法華經誹謗の罪なきもの、今生に法華經を行す。此を世間の失によせ、或は罪なきを仇すれば忽に現罰あるか。脩羅が帝釋を射

る。金翅鳥の阿耨池に入る等。必ず返て一時に損するが如し。天台云、今我疾苦は皆過去に由る。今生の修福は報將來にあり等云。心地觀經に云、過去の因を知らむと欲せば、其現在の果を見よ。未來の果を知らむと欲せば、其現在の因を見よ等云。不輕品に云、其罪畢已等云。不輕菩薩は過去に法華經を謗し給ふ罪身にある故に、瓦石を蒙るとみへたり。又順次生に必ず地獄に墮べき者は、重罪を造るとも現罰なし。一闍提人は是也。涅槃經に云、迦葉菩薩、佛に白して言く、世尊佛の所説の如く、大涅槃の光一切衆生の毛孔に入る等云。又云、迦葉菩薩、佛に白して言く、世尊何んぞ未だ菩提心を發さざる者、菩提の因を得ん等云。佛此問を答て云、佛迦葉に告はく、若此大涅槃經を聞くこと有て、我菩提心を發すことを用るじと云て、正法を誹謗せん。是人即時に夜夢の中に於て、維利の像を見て心中怖畏す。羅刹語て言く、咄善男子汝今若菩提心を發さずんば、當に汝が命を斷つべし。是人惶怖し寤め已て即ち菩提の心を發す。當に知るべし、是人は大菩薩なりと等云。甚の大惡人ならざる者が、正法を誹謗すれば、即時に夢みてひるがへる心生ず。又云、枯木石山等。又云、焦種甘雨に遇ふと雖も等。又云、明珠淤泥等。又云、人の手に創あるに、毒藥を捉るが如し等。

又云、大雨は空に住せず等云。此等の多くの譬あり。詮する所、上品の一闍提人になりぬれば、順次生に必ず無間地獄に墮つべき故に、現罰なし。例せば夏の桀、殷の紂の世には天變なし。重科有て必ず世ほろぶべき故か。又守護神此國をすつる故に現罰なきか。謗法の世をば守護神すて、去り、諸天守るべからず。かるが故に正法を行する者に驗なし。還て大難に値べし。金光明經に云、善業を修する者は日々に衰滅す等云。惡國惡時これなり。具には立正安國論に考へたるが如し。詮する所は天もすて給へ、諸難にもあへ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責を堪へざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、惡知識に値ふゆゑなり。善に付け、惡につけ、法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立ん。日本國の位をゆづらむ。法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば、用じとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ。我日本の眼目とならむ。我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず。疑て云、いかにして汝が流罪死罪等を過去の宿習としらむ。答て云、銅鏡は色形を顯す。秦王驗偽

の鏡は、現在の罪を顯す。佛法の鏡は過去の業因を現す。般泥洹經に云、善男子、過去に會て無量の諸罪、種々の惡業を作る、是諸の罪報は、或は輕易せられ、或は形狀醜陋、衣服足らず、飲食糲、財を求むるに利あらず、貧賤の家、邪見の家に生れ、或は王難に遭ひ、及び餘の種々の人間の苦報あらむ。現世に輕く受くるも、斯れ護法の功德力に由るが故なり云。此經文日蓮が身に宛も符契の如し。狐疑の氷とけぬ。千萬の難も由なし、一々の句を我身にあわせん。或被輕易等云。法華經に云、輕賤憎嫉等云。二十餘年が間輕慢せらる。或は形狀醜陋。又云、衣服不足は予が身なり。飲食糲は予が身也。求財不利は予が身也。生貧賤家は予が身也。或遭王難等、此經文疑ふべしや。法華經に云、數々擯出せられむ。此經文に云、種々等云。斯由護法功德力故等とは、摩訶止觀の第五に云、散善微弱なるは動せしむること能はず、今止觀を修して健病虧ざれば生死の輪を動す等云。又云、三障四魔紛然として競ひ起る等云。我無始よりこのかた、惡王と生れて法華經の行者の衣食田鳥等を奪ひとりせしこと數しらす。當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒すが如し。又法華經の行者の頭を刎ごと其數をしらす。此等の重罪果せるもあり、未だ果さざるもあるらん。果すも

餘殘未だつきず。生死を離るゝ時は、必ず此重罪を消し果て、出離すべし。功德は淺輕也。此等の罪は深重也。權經を行せしには、此重罪未だをこらす。鐵を熱に甚鍛はざればさす隠れて見えす。度々せむればさす顯る。麻子をしぼるに強くせめざれば、油少きが如し。今日逆強盛に國土の謗法を責れば、此大難の來るは過去の重罪の今生の護法に招き出せるなるべし。鐵は火に値はざれば黒し、火と合ひぬれば赤し。木をもつて急流をかけば、波山の如し。睡れる師子に手をつくれれば、大に吼ゆ。涅槃經に云、譬は貧女の如し、居家救護の者あること無く、加ふるに復病苦飢渴に逼められて、遊行乞す、佗の客舎に止まり一子を寄生す。是の客舎の主、驅逐して去らしむ。其産して未だ久からざるに是の兒を搦抱して佗國に至らんと欲し、其中路に於て惡風雨に遇ふて寒苦並び至り、多く蚊虻蜂螫毒蟲の啖食ふ所となる。恆河に逕由し兒を抱き渡る。其水漂疾なれども、而も放ち捨てず。是に於て母子遂に共に俱に没しぬ。是の如き女人慈念の功德、命終の後梵天に生ず。文殊師利、若善男子あつて正法を護せんと欲せば、彼の貧女の恆河に在て、子を愛念するが爲に、身命を捨つるが如くせよ。善男子、護法の菩薩も亦是の如くなるべし。寧ろ身命を捨

てよ。是の如きの人解脱を求めずと雖も、解脱自ら至ること、彼の貧女の梵天を求めざれども、梵天自ら至るが如し等云。此經文は章安大師、三障をもつて釋し給へり。其れを見るべし。貧人とは法財のなき也。女人とは一分の慈ある者也。客舎とは穢土也。一子とは法華經の信心了因の子也。舍主驅逐とは、流罪せらる。其產未久とは未だ信じて久しからず。惡風とは流罪の救宣也。蚊虻等とは有者無智人惡口罵詈等也。母子共沒とは、終に法華經の信心をやぶらずして頭を刎らる也。梵天とは佛界に生るゝをいふ也。引業と申すは、佛界までかはらず。日本漢士の萬國の諸人を殺すとも、五逆謗法なければ、無間地獄には墮ちず、餘の惡道にして多歳を經べし。色天に生ること萬戒を持てども、萬善を修すれども、散善にては生れず。又梵天王となること、有漏の引業の上に慈悲を加へて生ずべし。今此貧女が子を念ふ故に梵天に生るゝ、常の性相には相違せり。章安の二はあれども、證する所は子を念ふ慈念より外の事なし。念を一境にするは定に似たり。專子を思ふ又慈悲にも似たり。かるがゆへに佗事なれども天に生るゝか、又佛になる道は華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も、實には叶ふべしとも見へず。但天

台の一念三千こそ佛になるべき道とみゆれ。此一念三千も我等一分の慧解もなし。而れども一代經々の中には、此經計り一念三千の玉をいだけり。餘經の理は玉に似たる黃石なり。砂をしぼるに油なく、石女に子のなきが如し。諸經は智者猶佛にならず、此經は愚人も佛因を種べし。不求解脱解脱自至等と云。我竝に我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に佛界に至るべし。天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事をなげかさざれと、我弟子に朝夕教へしかども、疑を起して皆すてけん。拙者のならひは約束せし事をまことの時は忘るゝなるべし。妻子を不便とおもふ故、現身に別れん事をなげくらん。多生曠劫に親みし妻子には心と離れしか、佛道の爲に離れしか、何時も同じ別れなるべし。我法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返て導けかし。疑て云念佛者と禪宗等を無間と申すは諍ふ心あり。脩羅道にや墮つべかるらむ。又法華經の安樂行品に云、樂て人及び經典の過を説かざれ。亦諸餘の法師を輕慢せざれ等云。汝此經文に相違する故に、天に捨てられたるか。答て云、止觀に云、夫佛に兩説あり。一には攝、二には折。安樂行に不稱長短と云如きは攝の義。大經に刀杖を執持し、乃至首を斬ると云、是折の義。與奪道を殊にすと雖

も俱に利益せしむ等云。弘決に云。夫佛に兩説あり等とは、大經に刀杖を執持すとは、第三に云。正法を護する者は五戒を受けず、威儀を修せず。乃至下の文。仙豫國王等の文。又新醫禁じて云。若更に爲すことあれば當に其首を斷つべし。是の如き等の文竝に是破法の人を折伏するなり。一切の經論此二を出でず等云。文句に云。問。大經には國王に親付し、弓を持し箭を帶し、惡人を摧伏せよと明して、此經は豪勢を遠離し謙下慈善せよと。剛柔頌に乖けり。云何ぞ異ならざらん。答。大經には偏に折伏を論ずれども、一子地に住す、何ぞ曾て攝受なからん。此經には偏に攝受を明せども頭破七分と云。折伏なきに非ず、各一端を擧て時に適ふのみ等云。涅槃經の疏に云。出家在家法を護らんに、其元心の所爲を取り、事を棄て理を存して、匡に大經を弘む。故に護持正法と言ふは小節に拘らず、故に不修威儀と言ふなり。昔の時は平にして法弘まる。戒を持すべし、杖を持す勿れ。今の時は峻にして法廢る。杖を持すべし。戒を持す勿れ。今昔俱に峻なれば、俱に杖を持すべし。今昔俱に平なれば、俱に戒を持すべし。取捨宜きを得て一向にすべからず等云。汝が不審をば世間の學者多分道理とをもふ。いかに諫曉すれども、日蓮が弟子等も此をおもひすてず。一

開提人の如くなる故に、先天台妙樂等の釋を出して、彼が邪難を防ぐ。夫攝受折伏と申す法門は水火の如し。火は水を厭ふ、水は火を惡む。攝受の者は折伏をわらふ。折伏の者は攝受をかなしむ。無智惡人の國土に充滿の時は、攝受を前とす、安樂行品の如し。邪智謗法の者の多き時は、折伏を前とす、常不輕品の如し。譬へば暑き時に寒水を用ひ、寒き時に火を好むが如し。草木は日輪の眷屬、寒月に苦を得。諸水は月輪の所從、熱時に本性を失ふ。末法に攝受、折伏あるべし。所謂惡國破法の兩國あるべき故也。日本國の當世は惡國か破法の國かを知るべし。問て云。攝受の時折伏を行ずると、折伏の時攝受を行ずると、利益あるべしや。答て云。涅槃經に云。迦葉菩薩佛に白して言く。如來の法身は金剛不壞にして、而も未だ所因を知ること能はず云何。佛言く。迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。迦葉、我護持正法の因縁にて、今是の金剛身、常住不壞を成就することを得たり。善男子、正法を護持する者は五戒を受けず。威儀を修せず。刀劍、箭を持すべし。是の如く種々に法を説くも、然もなを師子吼を作すこと能はず。非法の惡人を降伏すること能はず。是の如き比丘は、自利し及び衆生を利すること能はず。當

に知るべし、是の輩は懈怠懶惰なり。能く戒を持ち、淨行を守護すと雖も、當に知るべし、是人は能く爲す所なからむ。乃至時に破戒の者あつて是語を聞き已て、咸共に瞋恚して是法師を害せん。是説法の者、設ひ復命終すとも、なを持戒自利利化と名く等云。章安の云、取捨宜きを得て一向にすべからず等。天台云、時に適ふ而已等云。譬へば秋の終りに種子を下し、田島を耕さんに稻米を得ること難し。建仁年中に法然、大日の二人出来して、念佛宗禪宗を興行す。法然云、法華經は末法に入ては、未有一人得者千中無一等云。大日云、教外別傳等云。此兩義國土に充滿せり。天台眞言の學者等、念佛禪の檀那を諛い、怖る事、犬の主に尾をふり、鼠の猫を怕るゝが如し。國王將軍に宮仕ひ、破佛法の因縁、破國の因縁を能く説き能く語る也。天台眞言の學者等、今生には餓鬼道に墮ち、後生には阿鼻を招くべし。設ひ山林にまじわつて一念三千の觀を凝すとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機を知らず攝折の二門を辨へずば、いかでか生死を離るべき。問て云、念佛者、禪宗等を責めて、彼等にあだまれたるいかなる利益かあるや。答て云、涅槃經に云、若善比丘法を壞る者を見て置て呵責し、駢遣し、舉處せずんば、當に知るべし、是人は佛法の中の怨なり。若能く駢遣し、呵責し、舉處せば、是我弟子、眞の聲聞也等云。章安云、佛法を壞亂するは、佛法の中の怨なり。慈なくして詐り親むは、是彼が怨なり。能く糾治せんは、是護法の聲聞、眞の我弟子なり。彼が爲に惡を除くは即ち是彼が親なり。能く呵責する者は是我弟子、駢遣せざらん者は佛法の中の怨なり等云。夫法華經の寶塔品を拜見するに、釋迦、多寶、十方分身の諸佛の來集はなに心を。令法久住故來至此等云。三佛の未來に法華經を弘めて、未來の一切の佛子に興んとおぼしめす御心中を推するに、父母の一子の大苦に値を見るよりも強盛にこそ見へたるを、法然いたわしともおもはで、末法には法華經の門を堅く閉て人を入れじとせき。狂兒をたぼらかして寶をすてさするやうに、法華經を抛させける心こそ無慚に見へ候へ。我父母を人の殺すに、父母に告げざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すを制せざるべしや。惡人寺塔に火を放たんに制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禪と念佛者とを見て制せざる者は是の如し。無慈詐親是彼怨等云。日蓮は日本國の諸人に親しき父母也。一切天台宗の人は彼等が大怨敵也。爲彼除惡即是彼親等云。無道心の物生死を離るゝ事はなき也。教主釋尊の一切の外道に大惡人と罵

親等云。無道心の物生死を離るゝ事はなき也。教主釋尊の一切の外道に大惡人と罵

言せられさせ給ひ。天台大師の南北並に得一に三寸の舌をもて五尺の身を断つといはれ、傳教大師の南京の諸人に最澄未だ唐都を見ず等いはれさせ給ひし、皆法華經の故なれば恥ならず。愚人に譽られたるは第一の恥也。日蓮が御勘氣を蒙れば天台眞言の法師等悦しくやをもふらん。かつは無慚也。かつは奇怪也。夫釋尊は娑婆に入り。羅什は秦に入り。傳教は支那に入り。提婆、師子は身をすつ。樂王は臂を焼く。上宮は手の皮を剝く。釋迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台の云、適時而已等云。佛法は時に依るべし。日蓮が流罪は、今生の小苦なれば、なげかしからず。後生には大樂をうくべければ、大に悦ばし。大に悦ばし。

文永九年二月

日蓮在御判

如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔

摩訶止觀第五に云、夫一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三千種の世間を具すれば、百法界に即ち三千種の世間を具す。此三千一念の心に在り。若心無んば已なん。介爾も心有れば即ち三千を具す。乃至所以に稱して、不可思議境と爲す。意此に在り等云。問て曰、玄義に一念三千の名目を明すか。答へて曰、妙樂云、明さず。問て曰、文句に一念三千の名目を明すか。答へて曰、妙樂云、明さず。問て曰、並に未だ一念三千と云はす妙樂云、明さず。問て曰、その妙樂の釋如何。答へて曰、並に未だ一念三千と云はす等云。問て曰、止觀一二三四等に一念三千の名目を明すか。答へて曰、之れ無し。問て曰、其の證如何。答へて曰、妙樂云、故に止觀の正しく觀法を明すに至つて、並に三千を以て指南となす等云。疑て云、玄義の第二に云、又一法界に九法界を具すれば、百法界に千如是等云。文句第一に云、一入に十法界を具すれば、一界又十界なり。十界各十如是あれば、即ち是一千等云。觀音玄に云、十法界交互なれば即ち百

法界あり。千種の性相、冥伏して心に在り。現前せずといへども、宛然として具足す等云。問て曰、止觀前の四に一念三千の名目を明すか。答へて曰、妙樂云、明さず。問て曰、其釋如何。答ふ弘決第五に云、若正觀に望めば、全く未だ行を論せず。亦廿五法に歴て、事に約して解を生ず。方に能く正修の方便とするに堪たり。是故に前の六をば皆解に屬す等云。又云、故に止觀の正しく觀法を明すに至つて、並に三千を以て指南となす。乃ちこれ終窮究竟の極説なり。故に序の中に説己心中所行法門と云ふ。良に以あるなり。請ふ尋ね讀む者、心に異縁なければ等云。夫智者の弘法三十年廿九年の間は、玄文等の諸義を説て、五時八教、百界千如を明し、前五百餘年の間の諸非を責め、並に天竺の論師未だ述べざるを顯す。章安大師云、天竺の大論は其類にあらず。震旦の人師何ぞ、勞しく語るに及ばむ。これ誇耀にあらず法相の然らしむる耳等云。はかない哉、天台の末學等、華嚴眞言の元祖の盜人に、一念三千の重寶を盗みとられて、還て彼等が門家となりぬ。章安大師兼て此事を知て歎いて言く、斯言若し墜なば將來は悲しむべし云。問て曰、百界千如と、一念三千と、差別如何。答へて曰、百界千如は有情界に限り、一念三千は情非情に互る。不審し云、非

情に十如是互るならば、草木に心あつて、有情の如く成佛をなすべきや如何。答へて曰、此事難信難解なり。天台の難信難解に二あり。一には教門の難信難解、二には觀門の難信難解なり。その教門の難信難解とは、一佛の所説に於て爾前の諸經には二乘闡提未來に永く成佛せず。教主釋尊始めて正覺を成じ、法華經迹本二門に來至し給ひ、かの二説を壞る。一佛二言水火なり、誰人か之を信せむ。此は教門の難信難解なり。觀門の難信難解とは、百界千如一念三千は、非情の上の色心の二法十如是これなり。爾りといへども木畫の二像に於ては、外典内典共に之を許して本尊となす。其義に於ては天台一家より出たり。草木の上に色心の因果を置すんば、木畫の像を本尊に恃み奉ること無益なり。疑ふて云、草木國土の上の十如是の因果の二法は何れの文に出たるか。答へて曰、止觀第五に云、國土世間も亦十種の法を具す、所以に惡國土、相性體力等と云。釋籤第六に云、相は唯色にあり、性は唯心に在り。體力作縁は義色心を兼ね、因果は唯心、報は唯色に在り等云。金錫論に云、乃ちこれ一草一木一礫一塵、各一佛性各一因果あり。縁了を具足す等云。問て曰、出處既に之を聞く、觀心の心如何。答へて曰、觀心とは、わが己心を觀じて十法界を見る、これを觀心

と云ふなり。譬へば他人の六根を見るといへども、未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向ふの時、始めて自具の六根を見るが如し。設ひ諸經の中に、處々に六道並に四聖を載すといへども、法華經並に天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば、自具の十界、百界千如、一念三千を知らざるなり。問て曰、法華經は何れの文ぞ、天台の釋は如何。答へて曰、法華經第一方便品に云、衆生をして佛知見を開かしめむと欲す等云。これは九界所具の佛界なり。壽量品に云、是の如く我成佛してより已來、甚だ大に久遠なり、壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。諸の善男子、我本菩薩の道を行じて、成せし所の壽命、今なほ未だ盡さず。復上の數に倍せり等云。此經文は佛界所具の九界なり。經に云、提婆達多乃至天王如來等云。地獄界所具の佛界なり。經に云、一名藍婆乃至汝等但能護持法華名者福不可量等云。これ餓鬼界所具の十界なり。經に云、龍女乃至成等正覺等云。これ畜生界所具の十界なり。經に云、波雅阿脩羅王乃至聞一偈一句得阿耨多羅三藐三菩提等云。脩羅界所具の十界なり。經に云、若人爲佛故乃至皆已成佛道等云。これ人界所具の十界なり。經に云、大梵天王乃至我等亦如是必當得作佛等云。これ天界所具の十界なり。

り。經に云、舍利弗乃至華光如來等云。これ聲聞界所具の十界なり。經に云、其求緣覺者比丘比丘尼乃至合掌以敬心欲聞具足道等云。これ即ち緣覺界所具の十界なり。經に云、地涌千界乃至眞淨大法等云。これ即ち菩薩界所具の十界なり。經に云、或說己身或說他身等云。即ち佛界所具の十界なり。問て曰、自他面の六根共に之を見る、彼此の十界に於ては未だ之を見ず、如何か之を信せむ。答へて曰、法華經法師品に云、難信難解。寶塔品に云、六難九易等云。天台大師云、二門悉く昔と反すれば難信難解なり。章安大師云、佛これを將て大事となす、何ぞ解しやすきことを得べむや等云。傳教大師云、この法華經は最もこれ難信難解なり。隨自意の故に等云。それ世の正機は過去の宿習厚き上、教主釋尊、多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界文殊彌勒等、之を扶けて諫曉せしむるに、猶信せざる者これあり。五千席を去り、人天移さる。況んや正像をや。いかに泥んや末法の初をや。汝之を信せば正法にあらじ。問て曰、經文並に天台章安等の解釋は疑網なし。但し火を以て水と云ひ、墨を以て白しと云ふ、設ひ佛説たりといへども信を取り難し。今數他面を見るに、但人界に限つて餘界を見ず、自面も亦復是の如し、如何んが信心を立むや。答ふ、數他面を

見るに或時は喜び、或時は瞋り、或時は平かに、或時は貪り現じ、或時は疑現じ、或時は諛曲なり、瞋るは地獄、貪るは餓鬼、疑は畜生、諛曲なるは脩羅、喜ぶは天、平かなるは人なり、他面の色法に於ては、六道共にこれ有り。四聖は冥伏して現はれずとも、委細に之を尋ねば之のあるべし。問て曰、六道に於て分明ならずといへども、粗之を聞くに之を備ふるに似たり。四聖は全く見へず如何。答へて曰、前には人界の六道之を疑ふ、然りといへども、強て之を言ふて相似の言を出せしなり。四聖も又爾るべきか。試みに道理を添加して萬が一之を宣べむ。所以に世間の無常眼前にあり、豈人界に二乘界なからむや。無願の悪人も猶妻子を慈愛す、菩薩界の一分なり。但佛界ばかり現じがたし。九界を具するを以て強て之を信じ、疑惑せしむること勿れ。法華經の文に人界を説て云、衆生に佛知見を開かしめむと欲す。涅槃經に云、大乘を學する者は、肉眼ありといへども名けて佛眼となす等云。末代の凡夫出生して法華經を信するは、人界に佛界を具足する故なり。問て曰、十界互具の佛語分明なり。然りと雖ども我等が劣心に佛法界を具すること、信を取り難き者也。今時之を信せざれば必ず一闍提とならむ。願くば大慈悲を起して之を信せしめ、阿耨の苦みを

救護したまへ。答へて曰、汝既に唯一大事因縁の經文を見聞して之を信せざれば、釋尊より已下四依の菩薩、並に末代理即の我等、如何が汝が不信を救護せむや。然りといへども、試みに之を言はば、佛に値ひ奉りて覺らざる者の、阿難等の邊にして得道する者これ有ればなり。夫機に二あり。一には佛を見たてまつり、法華にして得道するあり。二には佛を見たてまつらざれども、法華にて得道するなり。其上佛前の漢土の道士、月支の外道、儒教、四韋陀等を以て縁となして、正見に入る者これあり。又利根の菩薩凡夫等の、華嚴、方等、般若等の諸大乘經を聞きし縁を以て、大通久遠の下種を顯示する者多々なり。例せば獨覺の飛花落葉の如し、教外の得道是なり。過去の下種結縁なき者の、權小に執著する者は、設ひ法華經に値ひ奉るとも、小權の見を出でず。自見を以て正義とするが故に、還つて法華經を以て或は小乘經に同じ、或は華嚴大日經等に同じ、或は之を下す。此等の諸師は儒家外道の賢聖より劣れる者なり。此等は且く之を置く。十界互具之を立るは、石中の火、木中の花、信じ難けれども縁に値ふて出生すれば之を信す。人界所具の佛界は、水中の火、火中の水、最も甚だ信じ難し。然りといへども、龍火は水より出で、龍水は火より

生ず。心を得られざれども現證あれば之を用ゆ。既に人界の八界之を信ず、佛界何ぞ之を用ひざらむ。堯舜等の聖人の如きは、萬民に於て偏頗なし。人界の佛界の一分なり。不輕菩薩は所見の人に於て佛身を見る。悉達太子は人界より佛身を成ず。此等の現證を以て之を信すべきなり。問て曰、教主釋尊は三惑已斷の佛なり。又十方世界の國主、一切の菩薩、二乘人天等の主君なり。行の時は梵天左に在り、帝釋右に侍べり、四衆八部後に從ひ、金剛前に導びき、八萬法藏を演説して一切衆生を得脱せしむ。是の如き佛陀、何を以て我等凡夫の己心に住せしめむや。又迹門爾前の意を以て之を論ずれば、教主釋尊は始成。正覺の佛なり。過去の因行を尋ね求むれば、或は能施太子、或は儒童菩薩、或は尸毘王、或は薩多王子、或は三祇百劫、或は動喻塵劫、或は無量阿僧祇劫、或は初發心時、或は三千塵點等の間、七萬五千六千七千等の佛を供養し、劫を積み行滿じて、今の教主釋尊と成り給ふ。是の如きの因位の諸行は、皆我等が己心所具の菩薩界の功德か。果位を以て之を論ずれば、教主釋尊は始成正覺の佛、四十餘年の間四教の色身を示現し、爾前迹門涅槃經等を演説して一切衆生を利益し給ふ。所謂華嚴の時十方臺上の盧舍那、阿含經の三十四心斷結、成道の佛

方等般若の千佛等。大日金剛頂等の千二百餘尊。並に迹門寶塔品の四土色身。涅槃經の或は丈六と見る、或は小身大身と現る、或は盧舍那と見る、或は身虛空に同じと見る、四種の身乃至八十御入滅、舍利を留めて正像末を利益したまふ。本門を以て之を疑は、教主釋尊は五百塵點已前の佛なり。因位も又是の如し。それより已來十方世界に分身し、一代聖教を演説して、塵數の衆生を教化したまふ。本門の所化を以て迹門の所化に比較すれば、一滯と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を、迹門の十方世界の文殊觀音等に對向すれば、猿猴を以て帝釋に比するに尙及ばず。其外十方世界の斷惑證果の二乘、並に梵天、帝釋、日月、四天、四輪王、乃至無間大城の大火炎等、此等は皆我一念の十界か己心の三千か。佛説たりといへども之を信ず可らず。此を以て之を思ふに、爾前の諸經は實事也。實語也。華嚴經に云、究竟して虛妄を離れ、染なきこと虚空の如しと。仁王經に云、源を窮め性を盡して妙智存せり。金剛般若經に云、清淨の善のみあり。馬鳴菩薩の起信論に云、如來藏の中に清淨の功德のみあり。天親菩薩の唯識論に云、謂らく餘の有漏と劣無漏と種とをば、金剛喻定が現在前する時、極圓妙純淨の本識を引く。彼の依に非ざるが故に、皆永く

喜捨す等云。爾前の經々と法華經と之を校量するに、彼の經々は無數なり。時説既に長し、一佛二言彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法藏第十一の佛記に之れあり。天親菩薩は千部の論師、四依の居士なり。天台大師は邊鄙の小僧にして一論をも宣べず、誰か之を信せむ。其上多を捨て、小に付けども、法華經の文分明ならば少く恃怙あらむと、法華經の文に何れの所にか十界互具、百界千如、一念三千の分明なる證文これ有りや。隨つて經文を開拓するに斷諸法中惡等云。天親菩薩の法華論にも、堅慧菩薩の法性論にも、十界互具これなく。漢土南北の諸大人師、日本七寺の末師の中にも此義なし。但天台一人の僻見なり。傳教一人の謬傳なり。故に清涼國師の云、天台の謬なり。慧苑法師の云、然るに天台は小乘を呼で三藏教となし、其名謬濫するを以て等云。了洪の云、天台獨り未だ華嚴の意を盡さず等云。得一の云、唯哉智公。汝はこれ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を以て覆面舌の所説の教時を謗す等云。弘法大師の云、震旦の人師等、諍ふて醍醐を盗んで、各自宗に名く等云。夫一念三千の法門は、一代の權實に名目を削り、四依の諸論師其義を載せず。漢土日域の人師も之を用ひず。如何が之を信せむ。答へて、曰、此難最も甚し最も甚し。但

し諸經と法華との相違は、經文より事起つて分明なり。未顯と已顯と、證明と否相と、二乗の成不と、始成と久成と等之を顯はす。諸論師の事「章」天台大師云、天親龍樹内監冷然たり。外には時の宜きに適ひ、各權に據る所あり。而るに人師偏へに解し、學者苟も執し、遂に矢石を興し、各一邊を保して大に聖道に乗る等云。章安大師云、天竺の大論すら尙其類にあらず、震旦の人師何を勞はしく語るに及ばむ。此誇耀にあらず、法相の然らしむる耳等云。天親龍樹馬鳴堅慧等は内監冷然なり。然りとはいへども、時未だ至らざるが故に之を宣ざるか。人師に於ては、天台以前は或は珠を含み、或は一向に之を知らず。已後の人師或は初に之を破して、後に歸伏する人あり、或は一向用ひざる者もこれ有り。但し斷諸法中惡の經文を會すべきなり。彼は法華經に爾前の經文を載するなり。往て之を見よ。經文分明に十界互具之を説く所謂欲令衆生開佛知見等云。天台この經文を承けて云、若衆生に佛の知見なくむば何ぞ開を論する所あらむ。當に知るべし、佛の知見衆生に蘊在することをと云。章安大師の云、衆生に若佛の知見なくむば何ぞ開悟する所あらむ。若貧女に藏なくむば、何ぞ示す所あらむ等云。但し會しがたき所は、上の教主釋尊等の大難也。此

事を佛遮會して云、已今當說、最爲難信難解と、次下の六難九易是也。天台大師の云、二門、悉く昔と反すれば信難、解難、鋒に當るの難事なり。章安大師の云、佛これを將て大事となす、何ぞ解し易きことを得べけむや。傳教大師の云、此法華經は最もこれ難信難解なり、隨自意の故に等云。夫佛滅後に至つてより一千八百餘年、三國に經歷して但三人のみあつて、始めて此正法を覺知せり。所謂月支の釋尊、震旦の智者大師、日域の傳教、この三人は内典の聖人なり。問て曰、龍樹天親等は如何。答へて曰、此等の聖人は知て之を言はざるの仁なり。或は迹門の一分之を宣べて、本門と觀心とを云はず。或は機あつて時なきか、或は機と時と共にこれなきか。天台傳教已後は之を知る者多々なり。二聖の智を用ゆるが故なり。所謂三論の嘉祥、南三北七の百餘人、華嚴宗の法藏、清涼等、法相宗の玄奘、三藏、慈恩大師等、眞言宗の善無畏、三藏、金剛智三藏、不空三藏等、律宗の道宣等、初には反逆を存し、後には一向に歸伏せしなり。但し初の大難を遮せば、無量義經に云、譬へば國王と夫人と新に王子を生せむ、若は一日若は二日若は七日に至り、若は一月若は二月若は七月に至り、若は一歳若は二歳若は七歳に至り、復國事を領理すること能はずといへ

ども、已に臣民に崇敬せられて諸の大王の子以て伴侶とせむ。王及び夫人愛心偏に重くして常に共に語らむ。所以は何ん、稚小なるを以ての故にと云はむが如く。善男子、是の持經者も亦復是の如し。諸佛の國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生ず。若菩薩この經を聞くことを得て、若は一句若は一偈、若は一轉若は二轉、若は十若は百、若は千若は萬、若は億萬恒河沙無量無數轉せば、復眞理の極を體すること能はずといへども、乃至已に一切の四衆八部に宗仰せられて、諸の大菩薩を以て眷屬となし、乃至常に諸佛に護念せられて、慈愛偏に覆はれむ。新學なるを以ての故なり等云。普賢經に云、此大乘經典は諸佛の寶藏、十方三世の諸佛の眼目なり。乃至三世の諸の如來を出生する種なり。乃至汝大乘を行じて佛種を斷せざれ等云。又云、此方等經は是諸佛の眼なり。諸佛これに因て五眼を具することを得。佛の三種の身は方等より生ず。是大法印にして涅槃海に印す。此の如きの海中能く三種の佛の清淨身を生ず。此三種の身は人天の福田なり等云。それ以みれば、釋迦如來の一代顯密大小二教、華嚴眞言等の諸宗の依經、往て之を勘ふるに、或は十方臺葉毘盧遮那佛、大集雲集の諸佛如來、般若染淨の千佛示現、大日金剛頂等の千

二百尊但其近因近果を演説して、其遠因果を顯さず。速疾頓成は之を説けども、三五の遠化を亡失し、化道の始終跡を削りて見へず。華嚴經、大日經等は、一往之を見るに、別圓四藏等に似れども、再往之を勘ふれば、藏通二教に同じて、未だ別圓にも及ばず。本有の三因これなし、何を以てか佛の種子を定めむ。而に新譯の譯者等、漢土に來入するの日、天台の一念三千の法門を見聞して、或は自の所持の經々に添加し、或は天竺より受持するの由之を稱す。天台の學者等、或は自宗に同するを悦び、或は遠きを貴んで近きを蔑にし、或は舊を捨て、新を取り、魔心思心出來す。然といへども詮する所は、一念三千の佛種にあらざれば、有情の成佛、木畫二像の本尊は有名無實なり。問て曰、上の大難未だ其會通を聞かず如何。答へて曰、無量義經に云、未だ六波羅蜜を修行することを得ずといへども、六波羅蜜自然に在前す等云。法華經に云、具足の道を聞かむと欲す等云。涅槃經に云、薩とは具足に名く等云。龍樹菩薩の云、薩とは六なり等云。無依無得大乘四論玄義記に云、沙とは譯して六と云ふ。胡法には六を以て具足の義となす。吉藏の疏に云、沙とは翻じて具足となす。天台大師の云、薩とは梵語なり、此には妙と翻す等云。私に會通を加へば、本文を讀

すが如し、爾りといへども、文の心は、釋尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す。我等此五字を受持すれば、自然に彼因果の功徳を譲り與へ給ふ。四大聲聞の領解に云、無上寶珠不求自得云。我等が己心の聲聞界也。我が如く等くして異なることなし、我が昔の所願の如き今已に満足しぬ、一切衆生を化して皆佛道に入らしむ。妙覺の釋尊は我等が血肉也。因果の功徳は骨髓にあらずや。寶塔品に云、其能く此經法を護ることあらむ者は、則これ我及び多寶を供養するなり。乃至亦復諸の來り給へる化佛の諸の世界を莊嚴し光飾し給ふ者を供養するなり等云。釋迦多寶十方の諸佛は我が佛界也。其跡を紹繼して其功徳を受得す。須臾聞之即得究竟阿耨多羅三藐三菩提とは是也。壽量品に云、然我實成佛已來、無量無邊、百千萬億那由他劫等云。我等が己心の釋尊は、五百塵點乃至所願の三身にして無始の古佛也。經に云、我本行菩薩道、所成壽命、今猶未盡、復倍上數等云。我等が己心の菩薩界也。地涌千界の菩薩は己心の釋尊の眷屬なり。例せば太公周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷屬、武内の大匠は神功皇后の棟梁、仁德王子の臣下なるが如し。上行、无遊行、淨行、安立行等は我等が己心の菩薩也。妙樂大師の云、當に知るべし身土一

念の三千なり故に成道の時この本理に稱ふて、一身一念法界に遍し等。夫始め寂滅道場華藏世界より、沙羅林に終るまで五十餘年の間、華藏密嚴三變四見等の三土四土は、皆成劫の上無常の土に變化する所の、方便、實報、寂光、安養、淨瑠璃、密嚴等なり。能變の教主涅槃に入りたまへば、所變の諸佛隨つて滅盡す、土も又以て是の如し。今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出たる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず、未來にも生せず、所化以て同體なり。これ即ち己心の三千具足、三種の世間也。迹門十四品に未だ之を説かず。法華經の内に於いて時機未熟の故なるか、此本門の肝心の南無妙法蓮華經の五字に於ては、佛猶文殊藥王等にも之を付屬したまはず。何に況や其已下をや。但地涌千界を召して八品を説て之を付屬したまふ。其本尊の爲體本時の娑婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釋迦牟尼佛多寶佛。釋尊の脇士上行等の四菩薩。文殊彌勒等の四菩薩は眷屬として未座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、萬民の大地に處して雲閣月卿を見るが如し。十方の諸佛は大地の上に處したまふ。迹佛迹土を表するが故なり。是の如き本尊は、在世五十餘年に之なし、八年の間にも但八品に限る。正像二千年の間は、

小乘の釋尊は迦葉阿難を脇士となし。權大乘並に涅槃法華經の迹門等の釋尊は、文殊普賢等を以て脇士となす。此等の佛をば正像に造り畫けども、未だ壽量品の佛ましまさず。末法に來入して始めて此佛像出現せしむべきか。問ふ正像二千餘年の間は、四依の菩薩並に人師等、餘佛小乘、權大乘、爾前迹門の釋尊等の寺塔を建立すれども、本門壽量品の本尊並に四大菩薩をば、三國の王臣俱に未だ之を崇重せざる山之を申す。此事粗これを聞くといへども、前代未聞の故に耳目を驚動し心意を迷惑す。請ふ重ねて之を説け、委細に之を聞かむ。答へて曰、法華經一部八卷二十八品、進んでは前四味退いては涅槃經等の一代諸經、總じて之を括るに但一經なり。始め寂滅道場より終り般若經に至るまでは序分なり。無量義經、法華經、普賢經の十卷は正宗なり。涅槃經等は流通分なり。正宗の十卷の中に於て亦序正流通あり。無量義經並に序品は序分なり。方便品より分別功德品十九行の偈に至るまでの十五品半は正宗分なり。分別功德品の現在の四信より、普賢經に至るまでの十一品半と一卷は流通分なり。又法華經等の十卷に於ても二經あり、各序正流通を具す。無量義經と序品は序分なり。方便品より人記品に至るまでの八品は正宗分なり。

り。法師品より安樂行品に至るまでの五品は流通分なり。其教主を論ずれば始成正覺の佛、本無今有の百界千如を説て、已今當に超過せる、隨自意難信難解の正法なり。過去の結縁を尋ぬれば、大通十六の時、佛果の下種を下し、進では華嚴經等の前四味を以て助縁となして、大通の種子を覺知せしむ。此は佛の本意にあらず、但毒發等の一分なり。二乘凡夫等は前四味を縁となし、漸々に法華に來至して種子を顯し、開顯を遂るの機これなり。又在世に於て始めて八品を聞く人天等、或は一句一偈等を聞て下種となし、或は熟し或は脱し、或は普賢涅槃等に至り、或は正像末等に、小權等を以て縁となして法華に入る。例せば在世の前四味の者の如し。又本門十四品の一經に序正流通あり。涌出品の半を序分となし、壽量品と前後の二半これを正宗となす。其餘は流通分なり。其教主を論ずれば、始成正覺の釋尊にあらず。所説の法門も亦天地の如し。十界久遠の上に國土世間既に顯る。一念三千殆ど竹膜を隔てたり。又迹門並に前四味、無量義經涅槃經等の三説は、悉く隨他意の易信易解、本門は三説の外の難信難解隨自意なり。又本門に於ても序正流通あり。過去大通佛の法華經より乃至現在の華嚴經、乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十餘年の

諸經、十方三世諸佛の微塵の經々は皆壽量の序分なり。一品二半よりの外は、小乘教、邪教、未得道教、覆相教と名く。其機を論ずれば、德薄垢重、幼稚貧窮孤露にして禽獸に同じ。爾前迹門の圓教すら尙佛因にあらず。何に況んや。大日經等の諸小乘經をや。何に況んや華嚴眞言等の七宗等の論師人師の宗をや。與えて之を論ずれば前三教を出でず、奪つて之を云へば藏通に同ず。設ひ法は甚深と稱すとも未だ種熟脱を論せず、還つて灰斷に同じ、化の終始なしとは是也。譬へば王女たりといへども畜種を懷妊すれば、其子尙旃陀羅に劣れるが如し。此等は且く之を聞く。迹門十四品の正宗の八品は、一往之を見るに、二乘を以て正となし、菩薩凡夫を以て傍となす。再往之を勘ふれば、凡夫正像末を以て正となす。正像末の三時の中にも、末法の始を以て正が中の正となす。問て曰、其證如何。答へて曰、法師品に云、而も此經は如來の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや。寶塔品に云、法をして久住せしむ。乃至來れる所の化佛、當に此意を知るべし等。勸持安樂等之を見るべし。迹門是の如し。本門を以て之を論ずれば、一向に末法の初を以て正機となす。所謂一往之を見る時は、久種を以て下種となし、大通前四味迹門を熟となして、本門に至つ

て等妙に登らしむるを脱となす。再往之を見れば迹門には似ず、本門は序正流通共に末法の始を以て詮となす。在世の本門と、末法の初は一同に純圓なり。但し彼は脱此は種なり彼は一品二半此は但題目の五字なり。問て曰、其證文如何答へて曰、涌出品に云、爾時に他方の國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の、八恒河沙の數に過ぎたる大衆の中に於て、起立し合掌し禮を作して、佛に白して言く、世尊、若我等に佛の滅後に於て、此娑婆世界に在て勤加精進して、此經典を護持し讀誦し、書寫し供養せむことを聽し給はば、當に此土に於て廣く之を説き上るべし。爾時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告はく、止ね、善男子、汝等が此經を護持せむことを須むじ等云、法師より已下の五品の經文前後水火也。寶塔品の末に云、大音聲を以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此娑婆國土に於て、廣く妙法華經を説むものなる等云、設ひ教主一佛たりといへども之を將勸したまはば、藥王等の大菩薩、梵帝日月四天等は重んずべきの處に、多寶佛十方の諸佛客佛となつて之を諫曉したまふ。諸の菩薩等は此慇懃の付屬を聞て、我不愛身命の誓言を立つ、此等は偏に佛意に叶はんが爲なり。而に須臾の間に佛語相違して、過八恒沙の此土の弘經を誓止したまふ。進退惟谷

まる、凡智に及ばず。天台智者大師、前三後三の六釋を作つて之を會したまへり。所詮述化他方の大菩薩等に、我内證の壽量品を以て授與すべからず。末法の初は謗法の國にして惡機なる故に、之を止めて地涌千界の大菩薩を召して、壽量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て、閻浮の衆生に授與せしめ給ふ也。又述化の大衆は釋尊の初發心の弟子等にあらざるが故也。天台大師の云、是我弟子なり、應に我法を弘むべし。妙樂の云、子父の法を弘む世界の益あり。輔正記に云、法これ久成の法なるを以ての故に、久成の人に付す等云。又彌勒菩薩疑請して云、經に云、我等は復佛の隨宜の所説、佛所出の言未だ曾て虛妄ならずと信じ、佛の所知は皆悉く通達すといへども、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て若是語を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さむ。唯願世尊、願くば爲に解説して、我等が疑を除きたまへ。及び未來世の諸の善男子、此事を聞き已つて亦疑を生ぜじ等云。文の意は、壽量の法門は滅後の爲に之を請するなり。壽量品に云、或は本心を失へる、或は失はざる者あり。乃至心を失はざる者は、此良藥の色香俱に好を見て、即便之を服するに、病盡く除り瘡ぬ等云。久遠下種、大通結緣、乃至前四味迹門等の一切の

菩薩、二乘人天等の、本門に於て得道する是なり。經に云、餘の心を失へる者は、其父の來れるを見て、亦歡喜し問訊して、病を治せむことを求索といへども、然も其樂を與ふるに、而も肯て服せず。所以は何ん、毒氣深く入て本心を失へるが故に、此好色香ある樂に於て美ならずと謂へり。及至我今當に方便を設け、此藥を服せしむべし。乃至是好き良藥を今留めて此に在く、汝取て服すべし、差じと憂ふることを勿れ。是教を作し已つて復佗國に至つて、使を遣はして還つて告ぐ等云、分別功德品に云、惡世末法の時等云、問て曰、此經文の遣使還告は如何。答へて曰、四依なり。四依に四類あり。小乘の四依は、多分は正法の前の五百年に出現す。大乘の四依は、多分は正法の後五百年に出現す。三に迹門の四依は、多分は像法一千年、少分は末法の初なり。四に本門の四依は、地涌千界にして末法の始に必ず出現すべし。今の遣使還告は地涌なり。是好良藥とは、壽量品の肝要たる妙體宗用教の南無妙法蓮華經是なり。此良藥をば佛猶迹化に授與したまはず。何に況んや他方をや。神力品に云、爾時に千世界、微塵等の菩薩摩訶薩の、地より涌出せる者、皆佛前に於て一心に合掌し、尊顔を瞻仰して、佛に白しく言さく、世尊、我等佛の滅後、世尊分身所在の國

土、滅度の處に於て、當に廣く之を説くべし等云。天台の云、但下方の發誓のみを見たり等云。道宣云、付囑とは、此經をば、唯下方涌出の菩薩に付す。何が故ぞ爾る、法これ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す等云。夫文殊師利菩薩は、東方金色世界の不動佛の弟子。觀音は西方無量壽佛の弟子。藥王菩薩は、日月淨徳佛の弟子。普賢菩薩は、寶威佛の弟子なり。一往釋尊の行化を扶けむ爲に娑婆世界に來入す。又爾前迹門の菩薩也。本法所持の人にあらざれば、末法の弘法に足らざる者か。經に云、爾時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じたまふ。廣長舌を出して上梵世に至らしめ。乃至十方世界衆の寶樹の下の師子座の上の諸佛も、亦復是の如く、廣長舌を出したまふ等云。夫顯密二道一切の大小乘經の中に、釋迦諸佛並び坐し、舌相梵天に至る文これなし。阿彌陀經の廣長舌相、三千を覆ふは有名無實なり。般若經の舌相三千光を放ち般若を説きしも、全く證明にあらす。此は皆兼帶の故に久遠を覆相する故なり。是の如くの十神力を現じて、地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云、經に云、爾時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまはく、諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり。若我この神力を以て、無量無邊百千萬億

阿僧祇劫に於て、曠累の爲の故に此經の功德を説くとも、猶盡すこと能はじ。要を以て之を言はば、如來の一切の所有の法。如來の一切の自在の神力。如來の一切の秘要の藏。如來の一切の甚深の事。皆此經に於て宣示顯説す等云。天台云、爾時佛告上行より下は、第三結要付屬なり云。傳教云、又神力品に云、以要言之如來一切所有之法、乃至宣示顯説等明に知んぬ。果分の一切の所有の法。果分の一切の自在の神力。果分の一切の秘要の藏。果分の一切の甚深の事。皆法華に於て宣示顯説する也等云。此十神力は妙法蓮華經の五字を以て、上行、安立行、淨行、無遊行等の四大菩薩に授與したまふなり。前の五神力は、在世の爲後の五神力は滅後の爲なり。爾りといへども、再往之を論ずれば、一向に滅後の爲なり。故に次下の文に云、佛滅度の後に能く是經を持たむを以ての故に、諸佛皆歡喜して無量の神力を現したまふ等云。次下の囑累品に云、爾時に釋迦牟尼佛、法座より起て大神力を現したまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で、乃至今以て汝等に付屬す等云。地涌の菩薩を以て頭となして、迹化他方乃至梵釋四天等に此經を囑累したまふ。十方より來る諸の分身の佛、各本土に還りたまふ。乃至多寶佛の塔、還つて故の如く

したまふべし等云。藥王品已下乃至涅槃經等に、地涌の菩薩去り了つて、迹化の衆、他方の菩薩等の爲に、重ねて之を付屬したまふ。摺拾遺囑是なり。疑つて曰、正像二千年の間に、地涌千界閻浮提に出現して、此經を流通するか。答へて曰、爾らず。能いて曰、法華經並に本門は、佛の滅後を以て本となして、先地涌千界に之を授與す。何ぞ正像に出現して此經を弘通せざるや。答へて曰、宣べず。重ねて問て曰、如何。答ふ之を宣べず。又重ねて問ふ如何。答へて曰、之を宣ふれば一切世間の諸人咸皆王佛の末法の如く、又我弟子の中にも粗之を説かば、皆誹謗をなすべし。默止せんのみ。求めて云、説かずんば汝慳貪に墮せむ。答へて曰、進退惟れ谷れり。試みに粗之を説かむ。法師品に云、況んや滅度の後をや。壽量品に云、今留めて此に在く。分別功德品に云、惡世末法の時。藥王品に云、後の五百歲閻浮提に於て廣宣流布せむ。涅槃經に云、譬へば七子あり、父母平等ならざるに非ざれども、然も病者に於て心則ち偏に重きが如し等云。已前の明鏡を以て佛意を推知するに、佛の出世は靈山八年の諸人の爲にあらす、正像末の人の爲なり。又正像二千年の人の爲にあらす、末法の始め予が如き者の爲なり。然於病者と云ふは、滅後の法華經誹謗の者を

指すなり。今留在此とは、於此好色香樂而謂不美の者を指すなり。地涌千界正像に出でざるは、正法一千年の間は、小乗權大乘なり。機と時と共に之なく、四依の居士、小權を以て縁となして在世の下種之を脱せしむ。謗多くして熟益を破るべきが故に、之を説かず。例せば在世の前四味の機根の如し。像法の中の末に、觀音、藥王、南岳、天台等と示現し出現して、迹門を以て面となし、本門を以て裏となして、百界千如、一念三千其義を盡せり。但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經の七字、並に本門の本尊、未だ廣く之を行せず。所詮圓機あつて圓時なき故なり。今末法の初め小を以て大を打ち、權を以て實を破し、東西共に之を失し、天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せず。諸天其國を棄て、之を守護せず。此時地涌の菩薩、始めて世に出現し、但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ。因謗障惡必因得益とは是なり。我弟子之を惟へ、地涌千界は教主釋尊の初發心の弟子なり。寂滅道場にも來らず、雙林最後にも訪はず。不孝の失これあり。迹門の十四品にも來らず、本門の六品には座を立つ、但八品の間に來還せり。是の如き高貴の大菩薩、三佛に約束して之を受持す。末法の初めに出でたまはざるべきか。當に知るべし、此四菩薩折伏を現

する時は、賢王と成つて愚王を誡責し。攝受を行する時は、僧と成つて正法を引持す。問て曰、佛の記文は云何。答へて曰、後の五百歲、閻浮提に於て廣宣流布せむと。天台大師記して云、後の五百歲遠く妙道に沾はむ。妙樂記して云、末法の初め冥利無きにあらず。傳教大師の云、正像稍過ぎ已つて、末法太だ近きにより等云。末法太有近の釋は、我が時は正時にあらずと云ふ意なり。傳教大師、日本にして末法の始めを記して云、代を語れば像の終り末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西人を原れば則ち五濁の生、閻浮の時なり。經に云、猶多怨嫉泥滅度後と、此言良に以あるなり。此釋に閻浮の時と云。今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指すなり。此時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇士となり。一閻浮提第一の本尊を此國に立つべし。月支震旦未だ此本尊まします。日本國の上宮、四天王寺を建立す。未だ時來らず、阿彌陀他方を以て本尊となす。聖武天皇、東大寺を建立す。華嚴經の教主なり。未だ法華經の實義を顯さず。傳教大師、粗法華經の實義を顯示す。然りといへども、時未だ來らざるの故に、東方の鵝王を建立して、本門の四菩薩を顯さず。所詮地涌千界のため

未だ出現せず、末法にも又出で來りたまはず。大安語の大士なり。三佛の未來記も亦泡沫に同じ。此を以て之を惟ふに、正像になき大地震大彗星等を出來す。此等は金翅鳥、脩羅、龍神等の動變にあらず。偏に四大菩薩を出現せしむべき先兆なるか。天台の云、雨の猛きを見て龍の大なるを知り、花の盛んなるを見て池の深きを知る等云。妙樂云、智人は起を知り、蛇は自から蛇を識る等云。天晴ぬれば地明かなり。法華を識る者は世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起し、妙法五字の袋の内に此珠を裏みて、末代幼稚の頸に懸さしめたまふ。四大菩薩の此人を守護したまはむこと、太公周公の成王を攝扶し、四皓が惠帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

文永十年卯月二十五日

日蓮註之

顯佛未來記

法華經の第七に云、我滅度の後々の五百歳の中に、閻浮提に廣宣流布して、斷絶せしむること無けむ等云。予一たびは歎いて云、佛滅後既に二千二百二十餘年を隔つ、何なる罪業に依て佛の在世に生れず、正法の四依、像法の中の天台傳教等にも値はざるやと。亦一たびは喜んで云、何なる幸あつて後五百歳に生れて、此眞文を拜見することぞ。在世も無益なり。前四味の人は未だ法華經を聞かず。正像も又由なし、南三北七並びに華嚴眞言等の學者は、法華經を信せず。天台大師の云、後の五百歳遠く妙道に沾ほはむ等云。廣宣流布の時を指すか傳教大師の云、正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り等云。末法の始を願樂するの言なり。時代を以て果報を論ずれば、龍樹天親に超過し、天台傳教にも勝るゝなり。問て云、後五百歳は汝一人に限らじ、何ぞ殊に之を喜悅せしむるや。答へて云、法華經の第四に云、如來の現在にすら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや。天台大師云、何に況んや未來をや、理化し

難きに在り。妙樂大師云、理在難化とは、此理を明すことは、意衆生の化し難きを知らしむるに在り。智度法師の云、俗に良薬口に苦しと言ふが如く、此經は五乘の異執を廢して、一極の玄宗を立つ。故に凡を斥ぞけ聖を呵し、大を排し小を破る。乃至此の如きの徒、悉く留難をなす等云。傳教大師の云、代を語れば則ち像の終り末の始め、地を尋ねれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪靜の時なり。經に云、猶多怨嫉況滅度後と。此言良に以あるなり等云。此傳教大師の筆跡は其時に當るに似たれども、意は當時を指すなり。正像稍過已、末法太有近の釋は心あるかな。經に云、惡魔々民諸天龍夜叉鳩槃荼等、其便を得むと云。言ふ所の等とは此經に又云、若は夜叉、若は羅刹、若は餓鬼、若は富單那、若は吉遮、若は毗陀羅、若は犍駄、若は烏摩勒伽、若は阿跋摩羅、若は夜叉吉遮、若は人吉遮等云。此文の如きは、先生に四味三教乃至外道人天等の法を持得して、今生に惡魔諸天諸人等の身を受けたる者が、圓實の行者を見開して留難を至すべき由を説くなり。疑ふて云、正像の二時を末法に相對するに、時と機と共に正像は殊に勝るなり。何ぞ其時機を捨て、偏へに當時を指すや。答へて曰、佛意測りがたし。予未だ之を得ざれども、

試みに一義を案じ、小乘經を以て之を勘ふるに、正法千年は教行證の三具さに之を備ふ。像法千年には教行のみ有て證なし。末法には教のみ有て行證なし等云。法華經を以て之を探るに、正法千年に三事を具するは、在世に於て法華經に結縁する者が、其後正法に生れて小乘の教行を以て縁となして、小乘の證を得るなり。像法に於ては在世の結縁微薄の故に、小乘に於て證することなく、此人權大乘を以て縁となして十方の淨土に生ず。末法に於ては大小の益共に之なし。小乘には教のみ有て行證なし。大乘には教行のみ有て冥顯の證之なし。其上正像の時所立の權小の二宗、漸々末法に入つて執心強盛にして、小を以て大を打ち、權を以て實を破り、國土に大體謗法の者充滿するなり。佛教に依て惡道に墮する者、大地の微塵よりも多く、正法を行じて佛道を得る者は、爪上の土よりも少なり。此時に當つて、諸天善神其國を捨離し、但邪天邪鬼等あつて、王臣比丘比丘尼等の身心に入住し、法華經の行者を罵詈毀辱せしむべき時なり。爾りといへども、佛の滅後に於て四味三教等の邪執を捨て、實大乘の法華經に歸せば、諸天善神並びに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せむ。此人は守護の力を得て、本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て、閻浮提

に廣宣流布せしめむか。例せば威音王佛の像法の時、不輕菩薩、我深敬等の二十四字を以て彼土に廣宣流布し、一國の杖木等の大難を招きしが如し。彼二十四字と此五字と其語殊なりといへども其意これ同じ。彼像法の未と此末法の初めと全く同じ。彼不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。疑ふて云、何を以て之を知る、汝を末法の初の法華經の行者なりと爲すと云を。答へて云、法華經に云、泥んや滅度の後をや。又云く諸の無智の人あつて、惡口罵詈訾し及び刀杖を加ふる者あり。又云、云、數々擯出せられむ。又云、一切世間怨多くして信じ難し。又云、杖木瓦石もて之を打擲す。又云、惡魔々民、諸天龍夜叉、鳩槃荼等其便を得む等云。此明鏡に付て佛語を信せしめ爲に、日本國中の王臣四衆の面目に引向へたるに、予より外には一人も之なし。時を論すれば末法の初め一定なり。然る間若し日蓮なくんば佛語虛妄とならむ。難じて云、汝は大慢の法師にして、大天に過ぎ、四禪比丘にも超へたり如何。答へて云、汝日蓮を蔑如するの重罪、又提婆達多に過ぎ、無垢論師にも超へたり。我言は大慢に似たれども佛記を扶け、如來の實語を顯はさむがためなり。然りといへども、日本國中に日蓮を除き去ては、誰人を取り出して法華經の行者と

せむ。汝日蓮を謗らむとして佛記を虛妄にす。豈大惡人にあらずや。疑ふて云、如來の未來記汝に相當るとして、但し五天竺並びに漢土等にも、法華經の行者之あるか如何。答へて云、四天下の中に全く二つの日なし、四海の内豈兩主あらむや。疑ふて云、何を以て汝之を知る。答へて云、月は西より出で、東を照し、日は東より出で、西を照す。佛法も又以て是の如し。正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く。妙樂大師の云、豈中國に法を失つて、之を四維に求むるにあらずや等云。天竺に佛法なき證文なり。漢土に於て高宗皇帝の時、北狄東京を領して今に一百五十餘年、佛法王法共に盡き了んぬ。漢土の大藏の中に小乘經は一向之なく、大乘經は多分之を失す。日本より寂照等少々之を渡す。然りといへども傳持の人なければ、猶木石の衣鉢を帶持せるが如し。故に遵式の云、始め西より傳ふ、猶月の生ずるが如し。今復東より返る、猶日昇るが如し等云。此等の釋の如くんば天竺漢土に於て佛法を失せること勿論なり。問て云、月氏漢土に於て佛法なきは之を知れり、東西北の三州に佛法なきことは何を以て之を知る。答へて云、法華經の第八に云、如來の滅後に於て、閻浮提の内に廣く流布せしめて斷絶せざらしめむ等云。内の字は三

州を嫌ふ文なり。問て曰、佛記既に此の如し、汝が未來記如何。答へて曰、佛記に順じて之を考ふるに、既に後五百歳の始めに相當れり。佛法必ず東土の日本より出づべきなり。其前相必ず正像に超過せる天變地天之あるか、所謂佛生の時、轉法輪の時、入涅槃の時、祥瑞凶瑞共に前後に絶たる大瑞なり。佛はこれ聖人の本なり。經の文を見るに、佛の御誕生の時は、五色の光氣四方に遍なくして、夜も晝の如し。佛御入滅の時には、十二の白虹南北に互り、大日輪光なくして闇夜の如くなりし。其後正像二千年の間、内外の聖人生滅あれども、此大瑞には如かず。而るに去ぬる正嘉年中より今年に至るまで、或は大地震、或は大天變、宛も佛の生滅の時の如し。當に知るべし、佛の如き聖人生れたまはむか。滅したまはむか。大虛に互りて大慧星出づ、誰の王臣を以て之に對せむ。大地を傾動して三たび振裂す、何れの聖賢を以て之を課せむ。當に知るべし、通途世間吉凶の大瑞にはあらざるべし。惟れ偏へに此大法興廢の大瑞なり。天台云、雨の猛きを見て龍の大なるを知り、華の盛なるを見て池の深きを知る等云。妙樂の云、知人は起を知り、蛇は自から蛇を識る等云。日蓮此道理を存じて既に二十一年なり。日來の災、月來の難、此兩三年の間の

事既に死罪に及ばむとす。今年今月萬が一も身命を脱れがたきなり。世の人疑あらば委細の事は弟子に之を問へ。幸なる哉、一生の内に無始の謗法を消滅せむことよ。悦ばしい哉、未だ見聞せざる教主釋尊に侍へ奉らむことよ。願くば我を損する國主等をば、最初に之を導かむ。我を扶くる弟子等をば、釋尊に之を申さむ。我を生める父母等には、未だ死せざる已前に、此大善を進めむ。但し今夢の如く寶塔品の心を得たり。此經に云、若し須彌を接つて、佗方無數の佛土に擲げ置むも、亦未だこれ難からず。乃至若し佛の滅後に、惡世の中に於て、能く此經を説かむ。是則ちこれ難し等云。傳教大師の云、淺きは易く、深きは難しと釋迦の所判なり。淺きを去て深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釋迦に信順し、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す等云。安州の日蓮は、恐くは三師に相承し、法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加へて三國四師と號く。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

文永十年後五月十一日

桑門 日蓮 記之

當體義鈔

問ふ妙法蓮華經とは其體何物ぞや。答ふ十界の依正即ち妙法蓮華の當體なり。問ふ若爾れば、我等が如き一切衆生も妙法の全體なりと云はるべきか。答ふ勿論なり。經に云、所謂諸法乃至本末究竟等云。妙樂大師の云、實相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土云。天台の云、十如十界三千の諸法は、今經の正體なるのみ云。南岳大師の云、云何なるを名けて妙法蓮華經となすや。答ふ妙法は衆生妙なるが故に、法とは即ちこれ衆生法なるが故に云。又天台釋して云、衆生法妙と云。問ふ一切衆生の當體即ち妙法の全體ならば、地獄乃至九界の業因果果も皆これ妙法の體なるか。答ふ法性の妙理には染淨の二法あり。染法は熏じて迷となり。淨法は熏じて悟と成る。悟は即ち佛界なり。迷は即ち衆生なり。この迷悟の二法、二なりといへども然も法性眞如の一理なり。譬へば水精の玉の日輪に向へば火を取り、月輪に向へば水を取る、玉の體一なれども、縁に隨つて其功同じからざるが

如し。眞如の妙理も亦復かくの如し。一妙眞如の理なりといへども、惡縁に遇へば迷となり、善縁に遇へば悟となる。悟は即ち法性なり、迷は即ち無明なり。譬へば人夢に種々の善惡の業を見、夢覺めて後に之を思へば、我一心に見る所の夢なるが如し。一心は法性眞如の一理なり。夢の善惡は迷悟の無明法性なり。是の如く意得れば惡迷の無明を捨て、善悟の法性を本と爲すべきなり。大圓覺修多羅了義經に云、一切諸の衆生の無始の幻無明は、皆諸の如來の圓覺の心より建立す云。天台大師の止觀に云、無明癡惑本是法性なり。癡迷を以ての故に法性變じて無明となる云。妙樂大師の釋に云、理性體なし全く無明に依る、無明體なし全く法性に依る云。無明は所斷の迷、法性は所證の理なり、何ぞ體一なりと云ふやと云へる不審をば、此等の文義を以て意得べきなり。大論九十五の夢の譬、天台一家の玉の譬、誠に面白く思ふなり。正しく無明法性其體一なりと云ふ證據は、法華經に云、是法は法位に住して世間の相常住なり云。大論に云、明と無明と異なく別なし。是の如く知るをば是を中道と名く云。但眞如の妙理に染淨の二法ありと云ふ事、證文これ多しといへども、華嚴經に云、心佛及衆生、是三無差別の文と、法華經の諸法實相の文と

には過ぐべからざるなり。南岳大師の云、心體に染淨の二法を具足して、而も異相なく一味平等なり云。又明鏡の譬、眞實に一二なり。委くは大乘止觀の釋の如し。又能き釋には、籤の六に云、三千理に在れば同じく無明と名け、三千果成すれば咸く常樂と稱し、三千改むること無れば無明即明、三千並に常なれば俱體俱用なり。此釋分明なり。問ふ一切衆生、皆悉く妙法蓮華經の當體ならば、我等が如き愚癡開鈍の凡夫も、即ち妙法の當體なるか。答ふ當世の諸人これ多しといへども二人を出でず、謂ゆる權教の人、實教の人なり。而も權教方便の念佛等を信する人は、妙法蓮華の當體と云はるべからず。實教の法華經を信する人は、即ち當體の蓮華、眞如の妙體是なり。涅槃經に云、一切衆生、大乘を信するが故に大乘の衆生と名く。南岳大師の四安樂行に云、大強精進經に云、衆生と如來と同共一法身にして、清淨妙無比なるを妙法華經と稱す。又云、法華經を修行するは、此一心一學に衆果普ねく備はる。一時に具足して次第に入るにあらず、亦蓮華の一華に衆果を一時に具足するが如し。是を一乘の衆生の義と名く。又云、二乘聲聞及び鈍根の菩薩は、方便道の中の次第修學なり。利根の菩薩は、正直に方便を捨て、次第行を修せず、若し法華三

味を證すれば、衆果悉く具足す、是を一乘の衆生と名く。南岳の釋の意は、次第行の三字をば、當世の學者は別教なりと料簡す。然るに此釋の意は、法華の因果具足の道に對して、方便道を次第行と云ふ。故に爾前の圓、爾前の諸大乘經、並びに頓漸大小の諸經なり。證據は無量義經に云、次に方等十二部經、摩訶般若華嚴海空を説て、菩薩の歷劫修行を宣説す。大強精進經の同共の二字に習ひ相傳するなり。法華經に同共して信する者は妙經の體なり、不同共の念佛者等は、既に佛性法身如來に背くが故に、妙經の體にあらず。利根の菩薩は正直に方便を捨て、次第行を修せず。若し法華經を證する時は、衆果悉く具足す。是を一乘の衆生と名くるなり。此等の文の意を案するに、三乘、五乘、七方便、九法界、四味、三教、一切の凡聖等をば、大乘の衆生妙法蓮華の當體とは名くべからず。設ひ佛なりといへども、權教の佛には佛界の名言を付くべからず。權教の三身は未だ無常を免れざるが故に。何に況んや其餘の界々の名言をや。故に正像二千年の國王大臣よりも、末法の非人は尊貴なりと釋するは此意なり。所詮妙法蓮華の當體とは、法華經を信する日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身これなり。南岳釋して云、一切衆生法身の藏を具足して、佛

と一にして異なることなし。是故に法華に云、父母所生清淨常眼耳鼻舌身意亦復如是。又云、問て云、佛何れの經の中に、眼等の諸根を説て名けて如來とするや。答へて云、大強精進經の中に、衆生と如來と同じく共に一法身にして、清淨妙無比なるを妙法蓮華經と稱す。文佗經に有りといへども下文顯はれ已れば、通じて引用することを得るなり。正直に方便を捨て、但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱業苦の三道、法身般若解脱の三徳と轉じて、三觀三諦即一心に顯はれ、其所住の處は常寂光土なり。能居所居身土色心、俱體俱用無作三身、本門壽量の當體蓮華の佛とは、日蓮が弟子檀那等の中の事なり。是即ち法華の當體、自在神力の顯はす所の功能なり。敢て之を疑ふべからず、之を疑ふべからず。問ふ天台大師妙法蓮華の當體、譬論の二義を釋したまへり。爾れば其當體譬論の蓮華の様は如何。答ふ譬論の蓮華とは、施開廢の三釋、委しく之を見るべし。當體蓮華の釋は玄義の第七に云、蓮華は譬へにあらす當體に名を得。類せば劫初に萬物名なし、聖人理を觀じて準則して名を作るが如し。又云、今蓮華の稱は是論を假るにあらず。乃ち是法華の法門なり。法華の法門は清淨にして因果微妙なれば、此法門を名けて蓮華となす、即ち是法華三昧の當體の名にして譬論にあらず。又云、問ふ蓮華定て是法華三昧の蓮華なりや、定て是華草の蓮華なりや。答ふ定て是法蓮華なり。法蓮華解し難し、故に草花を論と爲す。利根は名に即して理を解し、譬論を假らず。但法華の解をなす。中下は未だ悟らず。譬を須めて乃ち知る、易解の蓮華を以て難解の蓮華に論ふ。故に三周の説法あつて上中下根に返ふ。上根に約すれば是法の名、中下に約すれば是譬の名なり。三根合論し、雙べて法譬を標す。是の如く解する者は誰と與に諍ふことをせむや云。此釋の意は至理は名なし、聖人理を觀じて萬物に名を付る時、因果俱時不思議の法これあり。之を名けて妙法蓮華となす。此妙法蓮華の法に、十界三千の諸法を具足して闕減なし。之を修行するもの佛因佛果同時に之を得るなり。聖人此法を師として修行覺道したまへば、妙因妙果俱時に感得したまふが故に、妙覺果滿の如來となりたまひしなり。故に傳教大師の云、一心の妙法蓮華とは、因華果莖、俱時に增長する當體の蓮華なり。三周各々當體譬論あり。總じて一經に皆當體譬論あり。別して七譬、三平等、十無上の法門ありて、皆當體蓮華あり。此理を詮する教を名けて妙法蓮華經となす云。妙樂大師の云、須らく七譬を以て各

各蓮華權實の義に對すべし。何んとなれば、蓮華は只これ爲實施權、開權顯實、七譬皆然るなり。又劫初に華草あり、聖人理を見て號けて蓮華と名く。此華草因果俱時なること妙法蓮華に似たり。故に此華草同じく蓮華と名く。水中に生ずる赤蓮華、白蓮華等の蓮華是なり。譬論の蓮華とは此華草の蓮華なり。此華草を以て難解の妙法蓮華を顯はす。天台大師の妙法は解し難し、譬を假りて顯はし易しと釋するは是の意なり。問ふ劫初より已來何人か當體の蓮華を證得せしや。答ふ釋尊五百塵點劫の當初、此妙法の當體蓮華を證得して、世々番々に成道を唱へ、能證所證の本理を顯はしたまへり。今日又中天竺摩訶陀國に出世して此蓮華を顯はさむと欲す、機無く時なし。故に一の法蓮華に於て三の華草を分別し、三乘の權法を施し、擬宜誘引せしこと四十餘年なり。此間は衆生の根性萬差なれば、種々の華草を施し設けて終に妙法蓮華を施したまはず。故に無量義經に云、我先に道場菩提樹下乃至四十餘年未だ眞實を顯はさず。法華經に至つて、四味三教の方便の權教、小乘種々の華草を捨て、唯一の妙法蓮華を説き、三の華草を開して一の妙法蓮華を顯はす時、四味三教の權人に初住の蓮華を授けしより、始めて開近顯遠の蓮華に至つて、二住三住乃至十住等覺妙覺の極果の蓮華を得るなり。問ふ法華經は何れの品、何れの文にか正しく當體譬論の蓮華を説き分けたるか。答ふ若し三周の聲聞に約して之を論せば、方便の一品は皆これ當體蓮華を説けるなり。譬論品、化城喻品には譬論蓮華を説きしなり。但し方便品にも譬論蓮華なきにあらず、餘品にも當體蓮華なきにあらずなり。問ふ若し爾らば正しく當體蓮華を説きし文は何れぞや。答ふ方便品の諸法實相の文是なり。問ふ何を以て此文が當體蓮華なりと云ふ事を知ることを得るや。答ふ天台妙樂今の文を引て、今經の體を釋せし故なり。又傳教大師釋して云、問ふ法華經は何を以て體となすや。答ふ諸法實相を以て體となす。此釋分明なり。當體蓮華とは何れも此文は名又現證は寶塔品の三身これ現證なり。或は涌出の菩薩、龍女の即身成佛是なり。地涌の菩薩を現證となすことは、經文に如蓮華在水と云ふ故なり。菩薩の當體と聞きたり。龍女を證據となすことは、諸靈鷲山、坐千葉蓮華、大如車輪と説きたまふ故なり。又妙音、觀音の三十三、四身なり。是をば解釋には法華三昧の不思議自在の業を證得するにあらざるよりは、安んぞ能く此三十三身を現せむと云。或は世間相常住、此等は皆當世の學者の勘文なり。然りといへども、日蓮は方

當體義妙

の大小の諸菩薩、法華經に來つて佛の蓮華を得ると云ふこと、法華論の文分明なり。故に知んぬ、菩薩處々得入とは方便なり。天台此論の文を釋して云、今論の意を解せば、若し衆生をして淨妙法身を見せしむと言は、これ妙因の開發するを以て蓮華とするなり。若し如來と大衆とに入るに蓮華の上に坐すると言はば、此は妙報の國土を以て蓮華とするなり。又天台が當體譬論合說する様を委細に釋したまふ時、大集經の我今敬禮佛蓮華と云ふ文と、法華論の今の文とを引證して釋して云、若し大集に依れば行法の因果を蓮華となす、菩薩上に處すれば即ち是因の華なり。佛の蓮華を禮すれば即ちこれ果の華なり。若し法華論に依れば、依報の國土を以て蓮華となす。復菩薩蓮華の行を修するに由て、報蓮華の國土を得、當に知るべし、依正因果悉く是蓮華の法なり。何ぞ譬を以て顯はすことを須ひむ。鈍人の法性の蓮華を解せざる爲の故に、世の華を擧て譬となすも、亦何の妨があるべき云。又云、若し蓮華にあらずんば、何に由て遍ねく上來の諸法を譬へむ、法譬並び辨するが故に、妙法蓮華と稱するなり云。次に龍樹菩薩の大論に云、蓮華とは法譬並び擧ぐるなり云。傳教大師が天親龍樹の二論の文を釋して云、論の文但妙法蓮華經と名くるに二種の義あり。唯蓮華に二種の義ありと謂にはあらず。凡そ法喻とは相似するを好しと爲す。若し相似せざれば何を以てか佗を解せしめむ。是故に釋論に法喻並び擧ぐ、一心の妙法蓮華は因果果臺俱時に增長す。此義解しがたし。論を假れば解しやすし。此理教を詮するを名けて妙法蓮華經と爲す云。此等の論文釋義分明なり。文に在て見るべし。包藏せざるが故に合說の義極成せり。凡そ法華經の意は譬論即法體、法體即譬論なり。故に傳教大師釋して云、今經は譬論多しといへども大論は是七論なり。此七論は即法體、法體即譬論なり。故に譬論の外に法體なく、法體の外に譬論なし。但法體とは法性の理體なり。譬論とは即ち妙法の事相の體なり。事相即理體なり。理體即事相なり。故に法譬一體といふ。是を以て論文山家の釋に皆蓮華を釋するには、法譬並び擧ぐ等云。釋の意分明なるが故に重ねて云はず。問ふ、如來の在世に誰か當體の蓮華を證得せるや。答ふ、四味三教の時は三乘、五乘七方便、九法界、帶權の圓の菩薩、並びに教主乃至法華迹門の教主、總じて本門壽量の教主を除くの外は、本門の當體蓮華の名をも聞かず。何に況んや證得せむをや。開三顯一の無上菩提の蓮華、尙四十餘年には之を顯はさず。故に無量義經に、終不得

當體義鈔

成無上菩提として、迹門開三顯一の蓮華は、爾前に之を説かずと云ふなり。何に況んや、開近顯遠、本地難思、境智冥合、本有無作の當體蓮華をや、迹化彌勒等之を知るべきや。問ふ何を以て爾前の圓の菩薩、迹門の圓の菩薩は、本門の當體蓮華を證得せずと云ふ事を知ることを得む。答ふ、爾前の圓の菩薩は、迹門の蓮華を知らず。迹門の圓の菩薩は、本門の蓮華を知らざるなり。天台云、權教の補處は、迹化の衆を知らず。迹化の衆は本化の衆を知らず云。傳教大師云、是直道なりといへども大直道ならず云。或は云、未だ菩提の大直道を知らざる故に云。此意なり。爾前迹門の菩薩は、一分斷惑證理の義分ありといへども、本門に對する時は當分の斷惑にして、跨節の斷惑にあらず。未斷惑と云はるゝなり。されば菩薩處を得入と釋すれども、二乘を嫌ふの時、一往得入の名を與ふるなり。故に爾前迹門の大菩薩が、佛の蓮華を證得する事は本門の時なり。眞實の斷惑は壽量の一品を聞きし時なり。天台大師涌出品の、五十小劫佛神力故、令諸大衆謂如半日の文を釋して云、解者は短に即して長、五十小劫と見る。惑者は長に即して短、半日の如しと謂へり云。妙樂之を受けて釋して云、菩薩已に無明を破す、之を稱して解と爲し。大衆仍ほ賢位に居す、之を名けて

惑と爲す云。釋の意分明なり。爾前迹門の菩薩は惑者なり。地涌の菩薩のみ獨り解者なりと云ことなり。然るに當世天台宗の人の中に、本迹の同意を論する時、異りなしと云て、此文を料簡するに、解者の中に迹化の衆を入たりと云ふは、大なる僻見なり。經の文、釋の義分明なり。何を横計を爲すべけむや。文の如きは地涌の菩薩五十小劫の間、如來を稱揚するを、靈山迹化の衆は半日の如く謂へりと説きたまへるを、天台は解者惑者を出して、迹化の衆は惑者の故に半日と思へり。是即ち僻見なり。地涌の菩薩は解者の故に五十小劫と見る、是即ち正見なりと釋したまへるなり。妙樂之を受けて、無明を破する菩薩は解者なり。未だ無明を破せざる菩薩は惑者なりと釋したまひしこと、文に在て分明なり。迹化の菩薩なりとも、住上の菩薩をば已に無明を破する菩薩なりと云はむ學者は、無得道の諸經を、有得道と習ひし故なり。爾前迹門の當分に妙覺の位ありといへども、本門壽量の眞佛に望むる時は、惑者仍居賢位者と云はるゝなり。權教の三身の未だ無常を免れざる故は、夢中の虛佛なるが故なり。爾前と迹化の衆とは、未だ本門に至らざる時は、未斷惑の者と云はれ、彼に至る時正しく初住にかなふなり。妙樂の釋に云、開迹顯本皆初住に入る

仍居賢位の釋之を思ひ合すべし。爾前迹化の衆をば、惑者未だ無明を破せざる
 佛菩薩なりと云ふこと、眞實なり眞實なり。故に知んぬ、本門壽量の説顯はれて後
 は、靈山一會の衆、皆悉く當體蓮華を證得するなり。二乘開提、定性、女人等も、惡
 人も本佛の蓮華を證得するなり。傳教大師一大事の蓮華を釋して云、法華の肝心一
 大事の因縁は、蓮華の所顯なり。一とは一實行相なり。大とは性廣博なり。事とは
 法性の事なり。一究竟事は圓の理智行圓の身若脫なり。一乘、三乘、定性、不定、內
 道、外道、阿闍、阿顛、皆悉く一切智地に到る。この一大事、佛の知見を開示し悟入
 して、一切成佛す。女人開提、定性二乘等の極惡人、靈山に於て當體蓮華を證得
 するを云ふなり。問ふ末法今時誰人か當體蓮華を證得せるか。答ふ當世の體を見る
 に、大阿鼻地獄の當體を證得する人これ多しといへども、佛の蓮華を證得せる人こ
 れなし。其故は無得道の權教方便を信仰して、法華の當體眞實の蓮華を毀謗するが
 故なり。佛説て云、若し人信せずして此經を毀謗せば、則ち一切世間の佛種を斷せ
 む、乃至其人命終して阿鼻獄に入らむ。天台云、此經は徧ねく六道の佛種を開す、
 若し此經を謗せば、義斷に當れり。日蓮云、此經は是十界の佛種に通ず、若し此經

を謗せば、義これ十界の佛種を斷するに當る、是人無間に於て決定して墮在す、何
 ぞ出づる期を得むや。然るに日蓮が一門は、正直に權教の邪法、邪師の邪義を捨て
 て、正直に正法正師の正義を信するが故に、當體蓮華を證得して、常寂光の當體の
 妙理を顯はすことは、本門壽量の教主の金言を信じて、南無妙法蓮華經と唱ふるが
 故なり。問ふ、南岳天台傳教等の大師、法華經に依て一乘、圓宗の教法を弘通したま
 ふといへども、未だ南無妙法蓮華經と唱へたまはず。如何。若し爾らば此大師等は
 未だ當體蓮華を知らず、又證得せずと云ふべきや。答ふ、南岳大師は觀音の化身、天
 台大師は藥王の化身なり等云。若し爾らば靈山に於て、本門壽量の説を聞きし時は
 之を證得すといへども、在生の時は妙法流布の時にあらず。故に妙法の名を替
 て、止觀と號けて、一念三千一心三觀を修したまひしなり。但し此等の大師等も、南
 無妙法蓮華經と唱ふる事を、自行眞實の内證と思し食れしなり。南岳大師の法華懺
 法に云、南無妙法蓮華經文。天台大師の云、南無平等大慈一乘妙法蓮華經文。又云、稽
 首妙法蓮華經云。又歸命妙法蓮華經云。傳教大師の最後臨終の十生願の記に云、南
 無妙法蓮華經云。問ふ、文證分明なり。何ぞ是の如く弘通したまはざるや。答ふ、此に

於て二意あり。一には時の至らざるが故に。二には付屬にあらざるが故なり。凡そ妙法の五字は、末法流布の大白法なり。地涌千界の居士の付屬なり。この故に南岳天台傳教等は、内に鑑みて末法の導師に之を譲つて、弘通したまはざりし也。

文永十年癸酉

日蓮

在御判

法華取要鈔

夫れ以みれば、月支西天より漢土日本に渡來する所の經論、五千七千餘卷なり。其中の諸經論の勝劣、淺深、難易、先後、自見に任せて之を辨ふことは、其分に及ばず。人に隨ひ宗に依て之を知るは、其義紛紜たり。所謂華嚴宗の云、一切經の中に此經第一と。法相宗の云、一切經の中に深密經第一と。三論宗の云、一切經の中に般若經第一と。眞言宗の云、一切經の中に大日の三部經第一と。禪宗の云、或は云、教内には楞伽經第一と。或は云、首楞嚴經第一と。或は云、教外別傳の宗なりと。淨土宗の云、一切經の中に淨土の三部經、末法に入ては機教相應して第一なりと。俱舍宗、成實宗、律宗の云、四阿含並びに律論は佛說なり。華嚴經、法華經等は佛說にあらず。外道の經なり。或は云、而るに彼々の宗々の元祖等、杜順、智儼、法藏、澄觀、玄奘、慈恩、嘉祥、道明、善無畏、金剛智、不空、道宣、鑒真、曇鸞、道綽、善導、達磨、慧可等なり。此等の三藏大師等は皆聖人なり。賢人なり。智は日月に齊く、徳は四海に彌る。其上

法華取要鈔

五三七

各々に經律論に依り、更互に證據あり。隨つて王臣國を傾け、士民之を仰ぐ。末世の偏學設ひ是非を加ふとも、人信用を至さず。爾りといへども寶山に來り登つて瓦石を採ひ取り、梅檀に歩み入て伊蘭を懷き收ば、恨悔あらむ。故に萬人の謗を捨て、狼りに取捨を加ふ。我門弟委細に之を尋討せよ。夫れ諸宗の大師等、或は舊譯の經論を見て新譯の聖典を見ず。或は新譯の經論を見て、舊譯を捨置き、或は自宗の曲に執著して、己の義に隨ひ。愚見を註し止めて、後代に之を加添し、株杭に驚き騒ぎ、兎獸を尋ね求め。智圓扇に發して仰いで天月を見る。非を捨て、理を取るは智人なり。今末の論師、本の大師の邪義を捨置て、専ら本經本論を引き見るに、五十餘年の諸經の中、法華經第四法師品の中の、已今當の三字最も第一なり。諸の論師、諸の大師、定めて此經文を見けるか。然りといへども或は相似の經文に狂ひ。或は本師の邪會に執じ。或は王臣等の歸依を恐るゝか。所謂金光明經の是諸經之王。密嚴經の一切經中勝。六波羅蜜經の總持第一。大日經の云何菩提。華嚴經の能信是經最為難。般若經の會入法性不見一事。大智度論の般若波羅蜜最第一。涅槃論の今日涅槃理等なり。此等の諸文は、法華經の已今當の三字に相似せる文なり。然りと

いへども或は梵帝四天等の諸經に對當すれば、是諸經之王なり。或は小乘經に相對すれば、諸經中王なり。或は華嚴勝鬘等の經に相對すれば、一切經中勝なり。全く五十餘年の大小權實顯密の諸經に相對して、是諸經之王の大王なるにあらず。所詮所對を見て經々の勝劣を辨ふべきなり。強敵を臥伏するに、始めて大力を知見する是なり。其上諸經の勝劣は釋尊一佛の淺深なり。全く多寶分身の助言を加ふるにあらず。私説を以て公事に混すること勿れ。諸經は或は二乘凡夫に對揚して小乘經を演説し。或は文殊、解脫月、金剛薩埵等の弘傳の菩薩に對向し、全く地涌千界の上行等にはあらず。今法華經と諸經とを相對するに、一代に超過すること廿種あり。其中最要二あり、所謂三五の二法なり。三とは三千塵點劫なり。諸經は或は釋尊の因位を明すこと、或は三祇、或は動輪塵劫、或は無量劫なり。梵王之云、此土には廿九劫より已來知行の主なり。第六天帝釋四天王等も以て是の如し。釋尊と梵王等と始めて知行の先後之を評論す。爾りといへども、一指を擧げて之を降伏してより已來、梵天頭を傾け、魔王掌を合せ、三界の衆生をして釋尊に歸伏せしむる是なり。又諸佛の因位と、釋尊の因位と之を糾明するに、諸佛の因位は、或は三祇、或は五劫等

なり、釋尊の因位は既に三千塵點劫より已來、娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり。此世界の六道の一切衆生は佗土の佗の菩薩に有縁の者一人も之なし。法華經に云、爾時聞法者各在諸佛所等云、天台云、西方は佛別に縁異なり、故に子父の義成せず等云、妙樂云、彌陀釋迦二佛既に殊なる、況んや宿昔の縁、別にして化導同じからざるをや。結縁は生の如く、成熟は養の如し。生養縁異なれば父子成せず等云、當世日本國の一切衆生の、彌陀の來迎を待つは、譬へば牛の子に馬の乳を含め、瓦の鏡に天の月を浮ぶるが如し。又果位を以て之を論ずれば、諸佛如來、或は十劫、百劫、千劫已來の過去の佛なり。教主釋尊は、既に五百塵點劫より已來、妙覺果滿の佛なり。大日如來、阿彌陀如來、樂師如來等の盡十方の諸佛は、我等が本師教主釋尊の所從等なり。天月の萬水に浮ぶ是なり。華嚴經の十方臺上の毗盧遮那、大日經、金剛頂經の兩界の大日如來は、寶塔品の多寶如來の左右の脇士なり。例せば世の王の兩臣の如し。此多寶佛も壽量品の教主釋尊の所從なり。此土の我等衆生は五百塵點劫より已來、教主釋尊の愛子なり。不孝の尖に依て今に覺知せずといへども、佗方の衆生には似るべからず。有縁の佛と結縁の衆生とは、譬へば天月の清水に浮ぶが

如く、無縁の佛と衆生とは、譬へば雷の聲を聞き、盲者の日月に向ふが如し。而るに或人師は、釋尊を下して大日如來を仰崇し、或人師は、世尊は無縁なり、阿彌陀は有縁なりと。或人師の云、小乗の釋尊と、或は華嚴經の釋尊と、或は法華經迹門の釋尊と、此等の諸師並びに檀那等、釋尊を忘れて諸佛を取ることとは、例せば阿闍世太子の頻婆娑羅王を殺し、釋尊に背いて提婆達多に付しが如し。二月十五日は釋尊御入滅の日、乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌なり。善導、法然、永觀等の提婆達多に誑されて阿彌陀佛の日と定め畢んぬ。四月八日は世尊御誕生の日なり。藥師佛に取り畢んぬ。我慈父の忌日を佗佛に替るは孝養の者なるか如何。壽量品に云、我亦爲世父爲治狂子故等云。天台大師の云、本此佛に従つて初めて道心を發す、亦此佛に従うて不退の地に住す。乃至猶百川の海に潮すべきが如く、縁に牽れて應生すること亦復是の如し等云。問て曰、法華經は誰人のために之を説くか。答へて曰、方便品より人記品に至るまでの八品に二意あり。上より下に向つて次第に之を讀めば、第一は菩薩、第二は二乘、第三は凡夫なり。安樂行より勸持、提婆、寶塔、法師と逆次に之を讀めば、滅後の衆生を以て本となす。在世の衆生は傍なり。滅後を以て

之を論ずれば、正法一千年、像法一千年は傍なり、末法を以て正となす。末法の中に
 は日蓮を以て正と爲すなり。問て曰、其證據如何。答へて曰、況滅度後の文是なり
 疑ふて曰、日蓮を正となす正文如何。答へて云、有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者等
 問て云、自讃は如何。答へて曰、喜び身に餘るが故に、堪へ難くして自讃するなり。
 問て曰、本門の心は如何。答へて曰、本門に於て二つの心あり。一には涌出品の略開
 近顯遠は、前四味並びに迹門の諸衆をして脱せしめむが爲なり。二には涌出品の動
 執生疑より一半並びに壽量品分別功德品の半品。已上一品二半を廣開近顯遠と名
 く。一向に滅後の爲なり。問て曰、略開近顯遠の心は如何。答へて云、文殊彌勒等の
 諸大菩薩、梵天、帝釋、日月、衆星、龍王等。初成道の時より般若經に至る已來は、一
 人も釋尊の御弟子にあらず。此等の菩薩天人は初成道の時、佛、未だ說法し給はざ
 る已前に、不思議解脱に住して、我と別圓二教を演説す。釋尊其後に阿含、方等、般若
 を宣説したまふ。然りとはいへども全く此等の諸人の得分にあらず。既に別圓二教を
 知りぬれば、藏通をも又知り。勝は劣を兼ねる是なり。委細に之を論せば、或は釋尊
 の師匠なるか。善知識とは是なり。釋尊に隨ふにあらず。法華經の迹門の八品に來

至して始めて未聞の法を聞いて、此等の人は弟子と成りぬ。舍利弗目連等は鹿苑よ
 り已來、初發心の弟子なり。然るといへども、權法のみを許せり。今法華經に來至し
 て實法を授與し、法華經の本門の略開近顯遠に來至して、華嚴よりの大菩薩、二乘
 大梵天、帝釋、日月、四天龍王等、位妙覺に隣り、又妙覺の位に入るなり。若爾れば今
 我等天に向て之を見れば、生身の妙覺の佛が、本位に居して衆生を利益する是なり。
 問て曰、誰人の爲に廣開近顯遠の壽量品を演説するや。答へて曰、壽量品の一品二
 半は、始めより終りに至るまで、正しく滅後の衆生の爲なり。滅後の中には、末法今
 時の日蓮等が爲なり。疑つて曰、此法門前代に未だ之を聞かず、經文に之ありや。答
 へて曰、予が智、前賢に超へず、設ひ經文を引くといへども、誰人か之を信せむ。十和
 が涕泣、伍子胥の悲傷是なり。然るといへども、略開近顯遠、動執生疑の文に云、然れ
 ども諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て若是語を聞かば、或は信受せずして法を破
 する罪業の因縁を起さむ等云。文の心は、壽量品を説かずば、末代の凡夫、皆惡道
 に墮せむ等なり。壽量品に云、是好き良藥を今留めて此に在く等云。文の心は上は
 過去の事を説に似たる様なれども、此文を以て之を案するに、滅後を以て本と爲

す。先づ先例を引けば分別功德品に云、惡世末法の時等云。神力品に云、佛滅度の後に能く是經を持たむを以ての故に、諸佛皆歡喜して無量の神力を現したまふ等云。藥王品に云、我滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絶せしむることなけむ等云。又云、此經は則ちこれ閻浮提の人の病の良藥なり等云。涅槃經に云、譬へば七子の如し、父母平等ならざるにあらざれども、然も病者に於て心即ち偏へに重し等云。七子の中の第一第二は、一闍提訪法の衆生なり。諸病の中には、法華經を誘するが第一の重病なり。諸藥の中には、南無妙法蓮華經は第一の良藥なり。此一闍浮提は、縱廣七千由善那、八萬の國これあり。正像二千年の間、未だ廣宣流布せず。法華經當世に當つて流布せしめずむば、釋尊は大妄語の佛、多寶佛の證明は泡沫に同じく、十方分身の佛の助舌も芭蕉の如くならむ。疑ふて曰、多寶の證明、十方の助舌、地涌の涌出、此等は誰人の爲ぞや。答へて曰、世間の情に云、在世の爲と。日蓮云、舍利弗目犍等は現在を以て之を論ずれば、智慧第一、神通第一の大聖なり。過去を以て之を論ずれば、金龍陀佛青龍陀佛なり。未來を以て之を論ずれば、華光如來、靈山を以て之を論ずれば、三惑頓盡の大菩薩。木を以て之を論ずれば、内秘外現の古菩薩なり。文殊彌勒等の大菩薩は、過去の古佛、現在の應生なり。梵帝日月四天等は、初成已前の大聖なり。其上前四味四教一言に之を覺りぬ。佛の在世には、一人に於ても無智の者之なし。誰人の疑を晴さむが爲に多寶佛の證明を借り、諸佛舌を出し、地涌菩薩を召さむか。方々以て謂なき事なり。隨つて經文の況滅度後合法久住等云。此等の經文を以て之を案するに、偏へに我等が爲なり。隨つて天台大師當世を指して云、後の五百歲遠く妙道に沾はむ。傳教大師當世を記して云、正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り等云。末法太有近の五字は、我世は法華經流布の世にあらすと云ふ釋なり。問ふて云、如來滅後二千餘年に龍樹、天親、天台、傳教の殘したまへる所の秘法とは何物ぞや。答へて曰、日本門の本尊と、戒壇と、題目の五字となり。問て曰、正像等に何ぞ弘通せざるや。答へて曰、正像に之を弘通せば、小乘、權大乘、迹門の法門、一時に滅盡すべきなり。問て曰、佛法を滅盡するの法、何ぞ之を弘通せんや。答へて曰、末法に於ては大小、權實、顯密、共に教のみ有て得道なし。一闍浮提皆訪法となり畢んぬ。逆縁の爲には、但妙法蓮華經の五字に限るのみ。例せば不輕品の如し。我門弟は順縁、日本國は逆縁なり。疑つて云、何ぞ廣

略を捨て、要を取るや。答へて曰、玄奘三藏は、略を捨て、廣を好み、四十卷の大品經を六百卷となす。羅什三藏は、廣を捨て、略を好み、千卷の大論を百卷と成せり。日蓮は、廣略を捨て、肝要を好む。所謂上行善善所傳の妙法蓮華經の五字なり。九包淵の馬を相するの法は、玄黃を略て、駿逸を取る。史陶林の經を講するに、細料を捨て、元意を取る等云。佛既に寶塔に入つて二佛座を並べ、分身來集し、地涌を召出し、肝要を取つて末代に當て五字を授與せむこと、當世異義あるべからず。疑ふて云、今世に此法を流布せば先相之あるや。答へて曰、法華經に如是相乃至本末究竟等云。天台の云、蜘蛛掛りて喜事來り、鴉鵲鳴て客人來る。小事すら猶以て是の如し。何に況んや大事をや取意。問て曰、若爾れば其相之あるか。答へて曰、去ぬる正嘉年中の大地震、文永の大彗星。其より已後今に種々の大なる天變、地天、此等はこれ先相なり。仁王經の七難二十九難無量の難、金光明經、大集經、守護經、藥師經等の諸經に擧ぐる所の諸難皆之あり。但なき所は二三四五の日の出る大難なり。而るを今年佐渡の國の土民口々に云ふ、今年正月廿三日の申の時に西の方に二つの日出現す、或は云、三つの日出現す等云。二月五日には東方に明星二つ並

び出で、其中間は三寸許り等云。此大難は日本國先代にも未だ之のあらざるか。最勝王經の王法正論品に云、變化の流星墮ち、二つの日俱時に出で、佗方の怨賊來つて國人喪亂に遭ふ等云。首楞嚴經に云、或は二つの日を見はし、或は二つの月を見はす等。藥師經に云、日月薄蝕の難等云。金光明經に云、彗星數出で、兩の日並び現はれ薄蝕恒なし。大集經に云、佛法實に隱沒せば乃至日月明を現せず等。仁王經に云、日月度を失ひ時節返逆し、或は赤日出で黒日出で、二三四五の日出づ。或は日蝕して光なく、或は日輪一重二重三四五重輪現はる等云。此日月等の難、七難、二十九難、無量の諸難の中に第一の大惡難なり。問て曰、此等の大中小の諸難は、何に因て之を起すか。答へて曰、最勝王經に云、非法を行する者を見て當に愛敬をなし、善法を行する人に於て苦楚して治罰す等云。法華經に云、涅槃經に云、金光明經に云、惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨皆時を以て行はれず等云。大集經に云、佛法實に隱沒し乃至是の如き不善業の惡王惡比丘、我正法を毀壞す等。仁王經に云、聖人去る時七難必ず起る等。又云、法にあらす律にあらすして比丘を繫縛すること獄囚の法の如くす。爾時に當て法滅せむこと久しからじ等。又云、諸の

悪比丘多く名利を求め、國王太子王子の前に於て、自から破佛法の因縁、破國の因縁を説かむ。其王別へずして此語を信聽せむ等云。此等の明鏡を齎て當時の日本國を引き向ふるに、天地を浮ぶること宛も符契の如し。眼あらむ我門弟は之を見よ。當に知るべし、此國に惡比丘等あつて、天子王子將軍等に向つて、讒奏を企て聖人を失ふ世なり。問て云、弗舍密多羅王、惠昌天子、守屋等は、月支、真旦、日本の佛法を滅失し、提婆菩薩、師子尊者等を殺害す、其時何ぞ此大難を出さざるや。答へて曰、災難は人に随つて大小あるべし。正像二千年の間の惡王惡比丘等は、或は外道を用ひ、或は道士を語らひ、或は邪神を信ず。佛法を滅失すること大なるに似たれども、其科尚ほ淺きか。今當世の惡王惡比丘の佛法を滅失するは、小を以て大を打ち、權を以て實を失ふ。人心を削つて身を失はず、寺塔を焼き盡さずして自然に之を喪ぼす。其失前代に超過せるなり。我門弟之を見て法華經を信用せよ。目を瞋らして鏡に向へ、天の瞋るは人に失あればなり。二つの口並び出るは、一國に二りの國王を並ぶる相なり。王と王との鬭諍なり。星の日月を犯すは、臣、王を犯す相なり。口と口と競ひ出るは、四天下一同の諍論なり。明星並び出るは、太子と太子との諍論なり。是の如く國土亂れて後、上行等の聖人出現し、本門の三つ（日本傳）の法門之を建立し、一天四海一同に、妙法蓮華經の廣宣流布疑ひなからむ者歟。

文永十一年五月二十四日撰

日蓮在御判

立正観鈔

(法華止観同異決)

當世天台の教法を習學するの輩、多く觀心修行を貴んで、法華本迹二門を捨つと見えたり。今問ふ、抑も觀心修行と言ふは、天台大師の摩訶止観の、説己心中所行法門の、一心三觀、一念三千の觀に依る歟。將又世に流布せる達磨の禪觀に依る歟。若し達磨の禪觀に依ると言はば、教禪とは、未顯眞實安語方便の禪觀なり。法華經妙禪の時には、正直捨方便と捨てらるゝ禪なり。祖師達磨禪とは、教外別傳の天魔禪なり。共にこれ無得道妄語の禪なり。仍て之を用ゆべからず。若し天台の止観の一心三觀に依とならば、止観一部の廢立、天台の本意に背く可ざる也。若し止観修行の觀心に依とならば、法華經に背くべからず。止観一部は、法華經に依て建立す。一心三觀の修行は、妙法の不可得なるを感得せんが爲なり。故に知ぬ、法華經を捨て、但觀を正とするの輩は、大謗法、大邪見、天魔の所爲なることを。其故は、天台の一心三觀とは、法華經に依て、三昧開發するを、己心證得の止観とはいふ故なり。問

ふ、天台大師の止観一部、並に一念三千、一心三觀、己心證得の妙觀は、併ながら法華經に依ると云ふ證據如何。答ふ、予反詰して云、法華經に依らずと見えたる證文如何。人之を出して云、此の止観は、天台智者、己心中所行の法門を説く。或は又故に止観に至つて正しく觀法を明す。故に序の中に、説己心中所行法門と云へり。良に以あるなりと。難じて云、此文は全く法華經に依らずと云ふ文にあらず。既に説己心中所行の法門と云ふが故なり。天台の所行の法門は、法華經なるが故に、此意は法華經に依ると見えたる證文なり。但し他宗に對するの時は、問答大綱を存すべきなり。所謂云ふ可し、若し天台の止観、法華經に依らずと云はば、速かに捨つべきなりと。其故は、天台大師兼て約束して云、修多羅と合せば録して之を用ゐよ。文なく義なきは信受す可らず云。傳教大師の云、佛説に依憑して口傳を信すること莫れと。龍樹の大論に云、修多羅白論に依て修多羅黑論に依らざれと。教主釋尊の云はく、依法不依人と。天台は法華經に依り、龍樹を高祖にしたがら經文に違し、我が言を翻へして外道邪見の法に依て、止観一部を釋すること全く有るべからず。問ふ、正しく止観は法華經に依ると見えたる文これ有りや。答ふ、餘りに多きが故に、少

少之を出さん。止觀に云、漸と不定とは置いて論せず、今經に依て更に圓頓を明さんと。弘決に云、法華經の旨を擡て、不思議、十乘、十境、待絶、滅絶、寂照の行を成すと。止觀大意に云、今家の教門は、龍樹を以て始祖となす、慧文は但内觀を列ぬるのみ。南岳天台に洎で、復法華三昧に因て陀羅尼を發し、義門を開拓するに觀、法周備す。若し法華を釋するには、須らく權實本迹を曉了して、方に行を立つべし。此經獨り妙と稱することを得。方にこれに依て以て觀道を立つべし。五方便及び十乘軌行と言ふは、即ち圓頓止觀全く法華に依る。圓頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみと。文句の記に云、觀と經と合すれば、他の寶を數ふるにあらず。方に知ぬ、止觀一部はこれ法華三昧の筌筈なり。若しこの意を得れば、方に經旨に會ふ云、唐土の大師行滿の釋せる、學天台宗法門大意に云、摩訶止觀一部の大意は、法華三昧の異名を出でず、經に依て觀を修すと。此等の文證分明なり。誰か之を論せん。問ふ、天台四種の釋を作るの時、觀心の釋に至つて、本迹の釋を捨つと見えたり。又法華經は漸機の爲に之を説き、止觀は直達の機の爲に之を説くと如何。答ふ、漸機の爲に説くは劣り、頓機の爲に説くは勝るとならば、今の天台宗の意は、華嚴眞言等の經は

法華經に勝れたりと云ふ可きか。今の天台宗の淺狹は、眞言は事理俱密の教なる故に、法華經に勝れたりと謂へり。故に止觀は法華に勝ると云るも、道理なり、道理なり。次に觀心の釋の時、本迹を捨つと云ふ難は、法華經の何れの文、大師の釋を本として佛の教を捨て、と見えたるや。設ひ天台の釋なりとも、釋尊の金言に背き、法華經に背かば、全く之を用ゆ可からず。依法不依人の故に、龍樹天台傳教元よりの御約束なるが故なり。其上天台の釋の意は、迹の大教起れば、爾前の大教亡し。本の大教興れば、迹の大教亡し。觀心の大教興れば、本の大教亡すと釋するは、本體の本法をば、妙法不思議の一法に取定めての上、修行を立つるの時、今像法の修行は觀心の修行を詮とするに、迹を尋ぬれば迹廣く、本を尋ぬれば本高ふして極む可らず。故に末學機に叶ひ難し。但己心の妙法を觀せよと云ふ釋なり。然りと雖も妙法を捨てよとは釋せざるなり。若し妙法を捨てば何物を己心と爲して觀すべき乎。如意寶珠を捨て、貧窮を取て寶となすべきか。悲い哉、當世天台宗の學者は、念佛眞言禪宗等に同意するが故に、天台の教釋を習ひ失ふて法華經に背き、大謗法の罪を得るなり。若し止觀を法華經に勝ると言はば、種々の過これあり。止觀は天台の道場

所得の己證なり。法華經は釋尊の道場所得の大法なり是。釋尊は妙覺果滿の佛なり。天台は住前未證なれば、名字觀行相似には過ぐ可らず。四十二重の劣なり是。法華經は釋尊乃至諸佛出世の本懷なり。止觀は天台出世の己證なり是。法華經は多寶の證明あり。來集の分身は、廣長舌を大梵天に付く。皆是眞實の大白法也。止觀は天台の説法なり。是の如き等の種々の相違之あれども仍ほ之を略する也。又一の問答に云、所被の機上機なるが故に勝ると云は、實を捨て、權を取れ。天台云、教彌權なれば、位彌高しと釋し給ふが故なり。所被の機下劣なるが故に劣ると言は、權を取て實を捨てよ。天台の釋には教彌實なれば、位彌下と云ふ故なり。然り而して、止觀は上機の爲に之を説き、法華は下機の爲に之を説くと云はば、止觀は法華に劣れる故に機を高く説くと聞えたり。實にさもやあるらむ。天台大師は靈山の聽衆として、如來出世の本懷を宣へ給ふと雖も、時至らざるが故に、妙法の名字を替えて止觀と號す。迹化の衆なるが故に本化の付屬を弘め給はず。正直の妙法を止觀と説きまざらかす故に、有りのまゝの妙法ならざれば、帶權の法に似たり。故に知ぬ、天台弘通の所化の機は、在世帶權の圓機の如し。本化弘通の所化

の機は、法華本門の直機なり。止觀法華は全く體同じと言はむ。尙人師の釋を以て佛説に同する失甚だ重し。何に況んや止觀は法華經に勝ると云ふ邪義を申し出すは、但これ本化の弘經と迹化の弘通と、像法と末法と、迹門の付屬と本門の付屬とを、末法の行者に云ひ顯させむ爲の佛天の御計なり。爰に知ぬ、當世の天台宗の中に此義を云ふ人は、祖師天台の爲には不知恩の人なり。豈その過を免れんや。夫天台大師は、昔靈山に在ては樂王と名け、今漢土に在ては天台と名け、日本國の中に在ては傳教と名く。三世の弘通俱に妙法と名く。是の如く法華經を弘通し給ふ人は、在世の釋尊より外は三國に其名を聞かず。有難くおはします大師を、其末學其教釋を惡く習ふて、失なき天台に失を懸まつる、豈大罪にあらずや。今問ふ天台の本意は何なる法ぞや。碩學等の云、一心三觀是なり。今云、一實圓滿の一心三觀とは、誠に甚深なるに似たれども、尙以て行者修行の方法なり。三觀とは因の義なるが故なり。慈覺大師の釋に云、三觀とは、法體を得せしめんが爲の修觀なり。傳教大師の云、今止觀修行とは、法華の妙果を成せんが爲なり。故に知ぬ、一心三觀とは、果地果徳の法門を成せんが爲の能觀の心なることを。何に況んや、三觀とは、

言説に出したる法なるが故に、如來の果地果徳の妙法に對すれば、可思議の三觀なり。問ふ、一心三觀に勝れたる法とは何なる法ぞや。答ふ、此事誠に一大事の法門なり。唯佛與佛の境界なるが故に、我等が言説に出す可らざるが故に、是を申すべからず。是を以て、經文には、我法は妙にして思ひ難し、言を以て宣ふべからず云。妙覺果滿の佛すら、尙不可説不思議の法と説き給ふ。何に況んや、等覺の菩薩已下乃至凡夫をや。問ふ、名字を聞かすんば、何を以てか勝法ありと知ることを得んや。答ふ、天台已證の法とは是なり。當世の學者は、血脈相承を習ひ失ふが故に、之を知らざるなり。故に相構へ相構へて、秘すべく秘すべき法門なり。然りと雖も、汝の志神妙なれば、其名を出す。一言の法是なり。傳教大師の一心三觀傳於一言と書き給ふ是なり。問ふ、未だ其法體を聞かず如何。答ふ、所詮一とは妙法是なり。問ふ、何を以て妙法は一心三觀に勝れたりと云ふことを知るを得るや。答ふ、妙法は、所詮の功德なり。三觀は行者の觀門なるが故なり。この妙法を、佛説て言はく、道場所得法、我法妙難思、是法非思議、不可以言宣云。天台の云、妙は不可思議、言語道斷、心行所滅なり。法は十界十如因果不二の法なりと。三諦とも云ひ、三觀とも云ひ、三下

とも云ひ、不思議法とも云ふ。天台の已證は、天台の御思慮の及ぶ所の法門なり。この妙法は諸佛の師なり。今の經文の如くならば、久遠實成の妙覺極果の佛の境界にして、爾前迹門の教主諸佛菩薩の境界にあらず。經に唯佛與佛、乃能究竟とは迹門の界如三千の法門をば、迹門の佛が當分究竟の邊を説けるなり。本地難思の境智の妙法をば、迹佛等の思慮に及ばず。何に況んや、菩薩凡夫をや。止觀の二字をば觀名佛知、止名佛見と釋すれども、迹門の佛智佛見にして、妙覺極果の知見には非ざるなり。其故は、止觀は天台已證の界如三千、三諦三觀を正となす。迹門の正意是なり。故に知ぬ迹佛の知見なりと云ふ事を。但止觀に絶待不思議の妙觀を明すと云ふとも、只一念三千の妙觀に、且らく與へて絶待不思議と名くるなり。問ふ、天台大師、眞實に此一言の妙法を證得し給はざるか。答ふ、内證は爾るなり。外用に於ては之を弘通し給はざるなり。所謂内證の邊をば秘して、外用には三觀と號して、一念三千の法門を示現し給ふなり。問ふ、何が故ぞ、知りながら弘通し給はざるや。答ふ、時至らざるが故に、付屬にあらざるが故に、迹化なるが故なり。問ふ、天台此一言の妙法、之を證得し給へる證據之ありや。答ふ、此事天台一家の祕事なり。世に流布せ

る學者之を知らず。灌頂玄旨の血脈とて、天台大師自筆の血脈一紙之あり。天台御入滅の後は石塔の中に之あり。傳教大師御入唐の時、八舌の鑰を以て之を開き、道邃和尚より傳授し給ふ血脈とは是なり。此書に云、一言の妙旨、一教の玄義と。傳教大師の血脈に云、夫一言の妙法とは、兩眼を開いて五塵の境を見る時は、隨緣眞如なるべし。兩眼を閉じて無念に住する時は、不變眞如なるべし。故に此一言を聞くに、萬法茲に達し、一代の修多羅一言に含すと。此兩大師の血脈の如くならば、天台大師の血脈相承の最要の法は、妙法の一言なり。一心三觀とは、所詮妙法を成就せん爲の修行の方法なり。三觀は因の義、妙法は果の義なり。但因の處に果有り、果の處に因あり、因果俱時の妙法を觀するが故に、是の如き功能を得るなり。爰に知ぬ、天台至極の法門は、法華本迹未分の處に、無念の止觀を立て、最祕の大法とすと云へる邪義、大なる僻見なりと云ふ事を、四依弘經の大薩埵は、既に佛經に依て諸論を造る、天台何ぞ佛說に背いて、無念の止觀を立て給はんや。若この止觀、法華經に依らずと云は、天台の止觀、教外別傳の達磨の天魔の邪法に同せん。都て然る可らず。哀れなり、哀れなり。傳教大師の云、國主の制にあらざれば、以て遵行す

ること爲し、法王の教に非れば、以て信受すること無しと。又曰、四依、論を造るに、權あり實あり。三乘、旨を述るに、三あり一あり。所以に天台智者は、三乘の旨に順じて、四教の階を定め、一實の道に依て一佛乘を建つ。六度別あり、戒度何ぞ同じからん。受法同じからず、威儀豈同じからんや。この故に天台の傳法は、深く四依に依り、亦佛經に順がふと。本朝の天台宗の法門は、傳教大師より之を始む。若し天台の止觀、法華經に依らずと言は、日本に於ては傳教の高祖に背き、漢土に於ては天台に背き、兩大師の傳法既に法華經に依る。豈その末學之に違せんや。違するを以て知ぬ、當世の天台家の人々、其名を天台山に借ると雖も、所學の法門は、達磨の僻見と善無畏の妄語とに依ると云ふ事を、天台傳教の解釋の如くんば、己心中の祕法は、但妙法の一言に限るなり。然り而して、當世の天台宗の學者は、天台の石塔の血脈を秘し失ふ故に、天台の血脈相承の祕法を習ひ失ふて、我と一心三觀の血脈とて、我意に任せて書を造り、錦の袋に入れて頸に懸け、箱の底に埋めて高直に賣るが故に、邪義國中に流布して天台の佛法破失せるなり。天台の本意を失ひ、釋尊の妙法を下す。これ偏へに達磨の教訓、善無畏の勸めなり。故に止觀をも知らず。一心

三觀、一心三諦をも知らず。一念三千の觀をも知らず。本迹二門をも知らず。相待絶待の二妙をも知らず。法華の妙觀をも知らず。教相をも知らず。權實をも知らず。四教八教をも知らず。五時五味の施化をも知らず。教機時國相應の義は申すに及ばず。實教にも似ず、權教にも似ざるなり。道理なり、道理なり。天台傳教の所傳に、禪真言より劣れりと習ふ故に、達磨の邪義、真言の妄語と打ち成りて、權教にも似ず、實教にも似ず、二途に攝せざるなり。故に大謗法罪顯はれて、止觀は法華經に勝ると云ふ邪義を申し出して、過なき天台に失を懸けたてまつるが故に、高祖に背く不孝の者、法華經に背く大謗法罪の者と成るなり。夫天台の觀法を尋ねれば、大蘇道場に於て、三昧開發せしより已來、目を開て妙法を思へば、隨緣真如なり。目を閉ちて妙法を思へば不變真如なり。この兩種の真如は、只一言の妙法に在り。我妙法を唱ふる時、萬法茲に達し。一代の修多羅一言に合す。所詮迹門を尋ねれば迹廣く、本門を尋ねれば本高し。如かじ己心の妙法を觀せんにはと思食れしなり。當世の學者この意を得ざるが故に、天台己證の妙法を習ひ失ふて、止觀は法華經に勝り、禪宗は止觀に勝れたりと思ふて、法華經を捨て、止觀に付き、止觀を捨て、禪宗に付く

なり。禪宗の一門云、松に藤懸る、松枯れ藤枯れて後如何。上らずして一打なむと云へる天魔の語を深く信するが故なり。修多羅の教主は、松の如く。其教法は藤の如し。各々に諍論すと雖も、佛も入滅し教法の威徳もなし。爰に知ぬ、修多羅の佛教は、月をさす指なり。禪の一法のみ獨り妙なり。之を觀すれば見性得達するなりと云ふ、大謗法の天魔の所爲を信するが故なり。然り而して、法華經の佛は、壽命無量、常住不滅の佛なり。禪宗は滅度の佛と見るが故に、外道の無の見なり。是法住法位、世間相常住の金言に背く僻見なり。禪は法華經の方便無得道の禪なるを、眞實常住の法と云ふが故に、外道の常見なり。若し與へて之を言はば、佛の方便三藏の分齊なり。若奪て之を言はば、但外道の邪法なり。與は當分の義、奪は法華の義なり。法華の奪の義を以ての故に、禪は天魔外道の法と云ふなり。問ふ、禪を天魔の法と云ふ證據如何。答ふ、前々に申すが如し。

文永十一年甲戌

日 蓮在御判

顯立正意鈔

日蓮去る正嘉元年八月二十三日、大地震を見て、之を勘へ定めて書ける立正安國論に云、樂師經の七難の内、五難忽ちに起りて二難猶殘れり。所以は佗國侵逼の難、自界叛逆の難なり。大集經の三災の内、二災早く顯はれ、一災未だ起らず。所以は兵革の災なり。金光明經の内、種々の災禍一々起ると雖も、佗方の怨賊國內を侵掠する、此災未だ露はれず。此難未だ來らず。仁王經の七難の内、六難今盛にして、一難未だ現せず。所以は四方より賊來つて國を侵すの難なり。加之、國土亂れん時は、先づ鬼神亂れ、鬼神亂るゝが故に萬民亂ると。今この文に就て具に事の情を案するに、百鬼早く亂れ萬民多く亡びぬ。先難これ明かなり、後災何ぞ疑はん。若し殘る所の難、惡法の科に依て並び起り競ひ來らば、其時何んとせんや。帝王は國家を安んじて天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに佗方より賊來つて此國を侵逼し、自界叛逆して此地を掠領せば、豈驚かざらんや。豈騒がざらんや。國を失

ひ家を滅せば、何れの所にか世を通ん等。今日蓮重ねて記して云、大覺世尊記して云はく、苦得外道、七日あつて死すべし。死して後食吐鬼に生れん。苦得外道の言、七日の内には死すべからず。我羅漢を得て餓鬼道に生れじ等。瞻婆城の長者の婦懷妊す。六師外道の云、女子を生まん。佛記して云く、男子を生まん等。佛記して云く、卻後三月あつて、我當に般涅槃すべし等。一切の外道云、これ妄語なり。等。佛の記の如く、二月十五日に般涅槃し給ふのみ。法華經の第二に云、舍利弗、汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎて、乃至當に作佛することを得べし。號をば華光如來と曰はん等。又第三の卷に云、我が此弟子摩訶迦葉、未來世に於て、當に三百萬億に奉觀することを得べし。乃至最後身に於て佛と成ることを得ん。名をば光明如來と曰はん等。又第四の卷に云、又如來滅度の後に、若し人有て妙法華經の乃至一偈一句を聞て、一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授く等。此等の經文は佛未來世の事を記し給ふ。上に擧る所の苦得外道等の三事、普合せずんば、誰か佛語を信せん。設ひ多寶佛證明を加へ、分身の諸佛長舌を梵天に付け給ふとも、信用し難きか。今亦以て是の如し。設ひ日蓮、富樓

那の辯を得て目連の通を現すとも、勘ふる所當らずんば、誰か之を信せん。去る文永五年に、蒙古國の牒狀、我國に渡來する所、賢人あらば之を怪しむべし。設ひ其を信せずとも。去る文永八年九月十二日、御勘氣を蒙りしの時、吐く所の強言、次の年二月十一日に普合せしむ。情あらん者は之を信すべし。何に況んや今年既に彼國災兵の上、二箇國を奪ひ取る。設ひ木石たりと雖ども、設ひ禽獸たりと雖も、感すべく驚くべきに、偏へに只事にあらず。天魔の國に入て醉へるが如く、狂へるが如く、歎くべし、哀れむべし、恐るべし、厭ふべし。又立正安國論に云、若し執心翻へらずして亦曲意猶存せば、早く有爲の郷を辭して必ず無間の獄に墮せん等云。今普合するを以て、未來を案するに、日本國上下萬人、阿鼻大城に墮せん事、大地を的と爲が如し。此等は且く之を置く。日蓮が弟子等又この大難脱れがたきか、彼の不輕輕毀の衆は、現身に信伏隨從の四字を加ふれども、猶先誘の強きに依て、先づ阿鼻大城に墮して、千劫を経歴して大苦惱を受く。今日蓮が弟子等も亦是の如し。或は信じ或は伏し、或は隨ひ或は従ふ。但名のみ之を假て、心中に染みざる信心薄き者は、設ひ千劫をば經すとも、或は一無間、或は二無間、乃至十百無間疑ひなからん者か、是を

免れんと欲せば、各藥王樂法の如く、臂を焼き皮を剥ぎ、雪山國王等の如く、身を投げ心を仕へよ。若し爾らずんば五體を地に投げ、徧身に汗を流せ。若し爾らずんば、珍寶を以て佛前に積め。若し爾らずんば、奴婢となつて持者に奉へよ。若し爾らずんば等云。四悉檀を以て時に適ふのみ。我弟子等の中にも信心薄淡き者は、臨終の時阿鼻獄の相を現すべし。其時我を恨むべからず等云。

文永十一年十二月十五日

日

蓮在御判

撰時鈔上

夫れ佛法を學せん法は、必ず先づ時をならうべし。過去の大通智勝佛は出世し給ひて、十小劫が間一經も説き給はず。經に云、一坐十小劫。又云、佛知時未至受請默然坐等云。今の教主釋尊は四十餘年の程、法華經を説き給はず。經に云、說時未至故と云。老子は母の胎に處して八十年、彌勒菩薩は兜率の内院に籠らせ給ひて五十六億七千萬歳をまち給ふべし。彼の時鳥は春をおくり、鷄鳥は曉をまつ、畜生すら猶かくの如し。何に況や佛法を修行せんに、時を糾ざるべしや。寂滅道場の砌には、十方の諸佛示現し、一切の大菩薩集會し給ふに、梵帝四天は衣をひるがへし、龍神八部は掌を合せ、凡夫大根性の者は耳をそばたて、生身得忍の諸菩薩解股月等、請をなし給ひしかども、世尊は二乗作佛、久遠實成をば名字をかくし、即身成佛、一念三千の肝心其義を宣給はず。此等は偏にこれ機は有りしかども、時の來らざれば述べさせ給はず。經に云、説べき時未だ至らざる故に等云。靈山會上の砌には、閻浮

第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり。一代謗法の提婆達多には天王如來と名を授け。五障の龍女は蛇身をあらためずして佛になる。決定性の成佛は、燠種の花さき果成り。久遠實成は百歳の叟、二十五の子となれるかと疑ふ。一念三千は九界即佛界、佛界即九界と談ず。されば此經の一字は如意寶珠なり。一句は諸佛の種子となる。此等は機の熟不熟はさておきぬ、時の至れるゆへなり。經に云、今正しく是其時なり、決定して大乘を説かん等云。問て云、機にあらざるに大法を授けられば、愚人は定めて誹謗をなして、惡道に墮るならば、豈説く者の罪にあらすや。答て云、人路を作る、路に迷ふ者あり。作る者の罪となるべしや。良醫藥を病人にあたふ、病人嫌ひて服せずして死せば、良醫の失となるか。尋て云、法華經第二に云、無智の人の中に此經を説くこと勿れと云。同第四に云、分布して妄に人に授與すべからず云。同第五に云、此法華經は諸佛如來の祕密の藏なり、諸經の中に於て最も其上に在り、長夜に守護して妄りに宣説せざれ等云。此等の經文は機にあらざれば説かざれといふか。今反詰して云、不輕品に云、而も是の言を作ん、我深く汝等を敬ふ等云。四衆の中に瞋恚を生じ、心不淨なる者あり。惡口罵詈して言く、は無智の比

丘と。又云、衆人或は杖木瓦石を以て之を打擲す等云。勸持品に云、諸の無智の人の悪口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん等云。此等の經文は悪口罵詈乃至打擲すれどもと説かれて候は、説く人の失となりけるか。求めて云、此の兩説は水火なり。如何が心得べき。答て云、天台云、時に適ふのみ。章安云、取捨宜を得て一向にすべからず云。釋の心は、或時は謗じぬべきには暫く説かず。或時は謗すとも強て説くべし、或時は一機は信すべくとも、萬機謗るべくば説くべからず。或時は萬機一同に謗すとも強て説くべし。初成道の時は法慧功德林、金剛幢、金剛藏、文殊、普賢、彌勒、解脫月等の大菩薩、梵、帝、四天等の凡夫大根性の者かすを知らず。鹿野苑の苑には俱鄰等の五人、迦葉等の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、八萬の諸天、方等大會の儀式には、世尊の慈父の淨飯大王、ねんごろに戀せさせ給ひしかば、佛宮に入らせ給ひて觀佛三昧經を説かせ給ひ。慈母の御爲に忉利天に九十日が間籠らせ給ひしには、摩耶經を説かせ給ふ。慈父慈母などにはいかなる秘法か惜ませ給ふべきなれども、法華經をば説かせ給はず。詮する所機にはよらず時いたらざれば如何にも説かせ給はぬにや。問て云、いかなる時にか小乗權經を説き、いかなる時にか法華經を説くべきや。答て云、十信の菩薩より等覺の居士に至るまで、時と機とをば相ひ知りたき事なり。何に況や我等は凡夫なり。いかでか時機を知るべき。求て云、少も知る事あるべからざるか。答て云、佛眼を假て時機を考へよ。佛目を用て國土を照せ。問て云、其心如何。答て云、大集經に、大覺世尊、月藏菩薩に對して未來の時を定め給へり。所謂我滅度の後の五百歳の中には解脫堅固、次の五百年には禪定堅固、次の五百年には讀誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固、次の五百年には我法の中に於て闍諤言訟して白法隠没せん等云。此の五の五百歳、二千五百餘年に、人々の料簡さまさまなり。漢土の道綽禪師が云、正像二千、四箇の五百歳には、小乗と大乘との白法盛んなるべし。末法に入つては彼等の白法皆な消滅して、淨土の法門、念佛の白法を修行せん人計り、生死を離るべし。日本國の法然が料簡して云、今日本國に流布する法華經、華嚴經、竝に大日經、諸小乘經、天台、眞言、律等の諸宗は、大集經の記文の正像二千年の白法なり。末法に入つては彼等の白法は皆滅盡すべし。設ひ行する人ありとも、一人も生死をはなるべからず。十住毘婆娑論と曇鸞法師の難行道、道綽の未有一人得者、善導の千中無一

撰時鈔上

これなり。彼等の白法隱没の次には、淨土三部經、彌陀稱名の一行ばかり、大白法として出現すべし。此を行せん人々は、いかなる惡人惡人なりとも十即十生、百即百生、唯だ淨土の一門のみあつて路に通入すべしとはこれなり。されば後世を願はん人々は、叡山、東寺、園城、七大寺等の日本一州の諸寺諸山の御歸依をとどめて、彼寺山に寄をける田島郡郷をうばい取て念佛堂につけば、決定往生南無阿彌陀佛とす、めければ、我朝一同に其の義になりて今に五十餘年なり。日蓮此等の惡義を難じやぶる事はことふり候ぬ。彼の大集經の白法隱没の時は、第五の五百歲當世なる事は疑ひなし。但し彼の白法隱没の次には、法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の、一閻浮提の内八萬の國あり、其の國々に八萬の王あり、王王ごとに臣下並びに萬民までも、今日本國に彌陀稱名を四衆の口々に唱ふるがごとく、廣宣流布せさせ給ふべきなり。問て云、其證文如何。答て云、法華經の第七に云、我滅度の後後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於いて斷絶せしむるとなけん等云。經文は大集經の白法隱没の次の時を説かせ給ふに、廣宣流布と云、同第六の卷に云、惡世末法の時能く是經を持たん者等云。又第五の卷に云、後の末世の法滅せ

んと欲する時に於て等。又第四の卷に云、而も此經は如來の現在すら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや。又第五の卷に云、一切世間怨多くして信じ難し。又第七の卷に第五の五百歲闍靜堅固の時を説て云、惡魔魔民、諸天龍夜叉、鳩槃荼等、其便を得ん。大集經に云、我法の中に於て闍靜言、認せん等云。法華經の第五に云、惡世中比丘。又云、或有阿蘭若等云。又云、惡鬼入其身等云。文の心は第五の五百歲の時、惡鬼の身に入る大僧等國中に充滿せん。其時に智人一人出現せん。彼の惡鬼の入れる大僧等、時の王臣萬民等を語ひて惡口罵詈杖木瓦礫流罪死罪に行はん時、釋迦多寶十方の諸佛、地涌の大菩薩等に仰せつけ、大菩薩は梵帝日月四天等に申しくだされ、其時天變地天盛なるべし。國主等其の諫を用ゐずば隣國におほせつけて、彼彼の國々の惡王惡比丘等をせめらるるならば、前代未聞の大闍靜、一閻浮提に起るべし。其時日月所照の四天下の一切衆生、或は國をおしむ、或は身をおしむ故に、一切の佛菩薩に祈をかくとも驗なくば、彼の憎みつる一の小僧を信じて、無量の大僧等、八萬の大王等、一切の萬民、皆頭を地につけ、掌を合せて、南無妙法蓮華經と唱ふべし。例せば神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく、娑婆世界に向て大看

聲を發ちて、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と、
 一同に叫びしが如し。問て云、經文は文明に候、天台、妙樂、傳教等の未來記の言は
 ありや。答て曰、汝が不審逆なり。釋を引かん時こそ經論はいかにとは不審せられ
 たれ、經文に分明ならば釋を尋ぬべからず。さて釋の文が經に相違せば、經をすて
 て釋につくべきか如何。彼れ云、道理至極せり。然れども凡夫の習ひ經は遠し釋は
 近し、近き釋分明ならば、いまますこし信心を増すべし。今云、汝が不審ねんころな
 れば少々釋をいだすべし。天台大師云、後の五百歲遠く妙道に沾はん。妙樂大師云、
 末法の初冥利無にあらず。傳教大師云、正像稍過ぎ已て末法。太近にあり。法華一乘
 の機今正しく是其時なり。何を以て知を得る。安樂行品に云、末世法滅の時也。又云、
 代を語れば、則ち像の終り末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を尋ぬれば則ち
 五濁の生、闍諍の時也。經に云、猶多怨嫉況滅度後と此言良に以ある也。夫釋尊
 の出世は住劫第九の滅、人壽百歲の時也。百歲と十歲との中間在世五十年滅後二千
 年と一萬年となり。其中間に法華經の流布の時二度あるべし。所謂在世の八年、滅
 後には末法の始め五百年なり。而に天台、妙樂、傳教等は進では在世法華經の時に

も漏させ給ぬ。退ては滅後末法の時にも生させ給はず、中間なる事をなげかせ給
 て、末法の始を戀させ給ふ御筆なり。例せば阿私陀仙人が悉達太子の生させ給ひし
 を見て、悲で云、現生には九十にあまれり、太子の成道を見るべからず。後生には
 無色界に生れて、五十年の説法の坐にも列なるべからず、正像末にも生るべからず
 と嘆きしが如し。道心あらん人々は此を見聞きて悦ばせ給へ。正像二千年の大王よ
 りも、後生をおもはん人々は、末法の今の民にてこそあるべけれ、此を信せざらん
 や。彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱る瀬人とは成るべし。梁の武帝の願
 に云、寧ろ提婆達多と成て無間地獄には沈むとも、鬪頭羅非とはならじと云。問て
 云、龍樹天親等の論師の中に此義ありや。答て云、龍樹天親等は内心には存せさせ
 給といへども、言には此義を宣べ給はず。求て云、いかなる故にか宣べ給はざるや。
 答て云、多くの故あり。一には彼の時には機なし、二には時なし、三には迹化なれば
 付囑せられ給はず。求て云、願くば此事よくよく聞かんと思ふ。答て云、夫佛の滅
 後二月十六日よりは正法の始めなり。迦葉尊者、佛の付囑をうけて二十年。次に阿
 難尊者二十年、次に商那和修二十年、次に優婆曇多二十年、次に提多迦二十年、已上

一百年が間は但小乗經の法門をのみ弘通して、諸大乘經は名字もなし。何に況
 や法華經を弘むべしや。次には彌遮迦、佛陀難提、佛駄密多、脇比丘、富那奢等の四
 五人、前の五百餘年が間は、大乘經の法門少々出來せしかども、とりたて、弘通
 し給はず、但小乗經を面としてやみぬ。已上大乘經の先五百年、解脫堅固の時
 なり。正法の後六百年已後一千年が前、其中間に馬鳴菩薩、毗羅尊者、龍樹菩薩、提
 婆菩薩、羅睺尊者、僧伽難提、僧伽耶奢、鳩摩羅駄、閻夜那、盤陀、摩奴羅、鶴勒夜那、
 師子等の十餘人の人々、始には外道の家に入り、次には小乗經をきわめ、後には
 諸大乘經を以て諸小乗經をさんざんに破し尖ひ給き。此等の大士等は、諸大乘
 經を以て、諸小乗經をば破せさせ給しかども、諸大乘經と法華經の勝劣をば、
 分明に書かせ給はず。設ひ勝劣をすこし書かせ給たるやうなれども、本迹の十妙、
 二乗作佛、久遠實成、已今當の妙、百界千如、一念三千の簡要の法門は分明ならず。
 但或は指を以て月をさすが如くし、或は文にあたりて一端ばかり書かせ給て、化道
 の始終、師弟の遠近、得道の有無はすべて一分も見へず。此等は正法の後の五百年、
 大集經の禪定堅固の時にあたれり。正法一千年の後は、月氏に佛法充滿せしかど

も、或は小を以て大を破し、或は權經を以て實經を隱没し、佛法さまさまに亂れし
 かば、得道の人漸くすくなく、佛法につけて惡道に墮る者かすを知らず。正法一千
 年の後、像法に入て一十五年と申せしに、佛法東に流て漢土に入りなき。像法の前
 五百年の内、始の一百餘年が間は、漢土の道士と月氏の佛法と諍論して、未だ事さ
 だまらず。設ひ定りたりしかども、佛法を信する人の心いまだ深からず。而に佛法
 の中に、大小權實顯密を分つならば、聖教一同ならざる故、疑ひおこりて却て外典
 と伴ふ者もありぬべし。これらのをそれあるかの故に摩騰、竺蘭は自は知て而も大小
 を分けず、權實を云すしてやみぬ。其後魏、晋、宋、齊、梁の五代が間、佛法の内に大
小權實顯密をあらそひし程に、いづれこそ道理とも聞えずして、上一人より下萬
民にいたるまで、不審すくなからず。南三北七と申して佛法十流にわかれり。所謂
南には三時、四時、五時。北には五時、半滿、四宗、五宗、六宗、二宗の大乗一音等、
各々義を立て邊執水火なり。然れども大綱は一同なり。所謂一代聖教の中には、華
嚴經第一、涅槃經第二、法華經第三なり。法華經は阿含、般若、淨名、思益等の經々
に對すれば、眞實なり。了義經、正見なり。然りといへども涅槃經に對すれば、無常

教、不了義經、邪見の經等云。漢より四百餘年の末、五百年に入て陳隋二代に智顛と申す小僧一人あり。後には天台智者大師と號し奉る。南北の邪氣をやぶりて、一代聖教の中には法華經第一、涅槃經第二、華嚴經第三なり等云。此れ像法の前五百歲、大集經の讀誦多聞堅固の時にあひあたれり。像法の後五百歲は、唐の始め太宗皇帝の御宇に、玄奘三藏月支に入て十九年が間、百三十箇國の寺塔を見聞して、多くの論師に値ひ奉りて、八萬聖教十二部經の淵底を習ひきわめしに、其中に二宗あり、所謂法相宗、三論宗なり。此二宗の中に法相大乘に、遠くは彌勒、無著、近は戒賢論師に傳へて、漢土にかへりて太宗皇帝に授けさせ給ふ。此宗の心は佛敎は機に隨ふべし、一乘の機の爲には三乘方便、一乘眞實なり。所謂法華經等なり。三乘の機の爲には三乘眞實、一乘方便、所謂深密經、勝鬘經等此なり。天台智者等は此の旨を辨へず等云。而も太宗は賢王なり、當時名を一天に響かすのみならず、三皇にも超へ五帝にも勝れたるよし、四海に響き漢土を手に握るのみならず、高昌高麗等の一千八百餘國をなびかし、内外を極たる王と聞へし、賢王の第一の御歸依の僧なり。天台宗の學者の中にも頭をさしいだす人一人もなし。而れば法華經の實義すてに一國に隱

没しぬ。同き太宗の太子高宗、高宗の繼母、則天皇后の御宇に法藏法師といふ者あり、法相宗に天台宗の襲るところを見て、前に天台の御時せめられし華嚴經を取り出して、一代の中には華嚴第一、法華第二、涅槃第三と立けり。太宗第四代玄宗皇帝の御宇、開元四年と同八年に西天印度より善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、大日經、金剛頂經、蘇悉地經を持て渡り、眞言宗を立つ。此の宗の立義に云、教に二種あり。一には釋迦の顯教、所謂華嚴法華等。二には大日の密教、所謂大日經等也。法華經は顯教の第一なり。此經は、大日の密教に對すれば極理は少し同けれども、事相の印契と眞言とは絶えて見へず。三密相應せざれば不了義經等云。已上法相、華嚴、眞言の三宗、一同に天台法華宗を破れども、天台大師程の智人、法華宗の中になかりけるかの間、内々はゆはれなき由は存じけれども、天台の如く公場にして論せられざりければ、上國王大臣、下一切の人民にいたるまで、皆佛法に迷て衆生の得道みな止まりけり。此等は像法の後の五百年の前二百餘年が内なり。像法に入て四百餘年と申しけるに、百濟國より一切經、竝に教主釋尊の木像僧尼等、日本國にわたる。漢土の梁の末、陳の始にあひあたる。日本には神武天皇よりは第三十代欽明天皇

の御宇なり。欽明の御子、用明の太子に上宮王子、佛法を弘通し給ふのみならず、並に法華經、淨名經、勝鬘經を、鎮護國家の法と定めさせ給ひぬ。其後人王第三十七代に孝徳天王の御宇に、三論宗、成實宗を觀、勒僧正、百濟國よりわたす。同御代に道昭法師、漢土より法相宗、俱舍宗をわたす。人王第四十四代元正天王の御宇に、天竺より大日經を渡して有しかども、而も弘通せずして漢土へかへる。此僧をば善無畏三藏といふ。人王第四十五代に聖武天皇の御宇に、審祥大徳、新羅國より華嚴宗を渡して、良辨僧正、聖武天皇にさすけ奉りて、東大寺の大佛を立させ給り。同き御代に大唐の鑑真和尚、天台宗と律宗をわたす。其中に律宗をば弘通し、小乘の戒場を東大寺に建立せしかども、法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了ぬ。其後人王第五十代、像法八百年に相當て、桓武天皇の御宇に、最澄と申す小僧出來せり。後には傳教大師と號し奉る。始には三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律の六宗並に禪宗等を行表僧正等に習學せさせ給し程に、我と立給へる國昌寺、後には比叡山と號す。此にして六宗の本經本論と、宗々の人師の釋とを引き合せて御覽ありしかば、彼の宗々の人師の釋、所依の經論に相違せる事多き上、僻見多

多にして信受せん人、皆惡道に墮ぬべしと考へさせ給ふ。其上法華經の實義は、宗宗の人々、我も得たり我も得たりと、自讃ありしかども其義なし。此を申すならば喧嘩出來すべし、黙して申さずば佛誓にそむきなんと、思ひ煩はせ給しかども、終に佛の誠を恐れて、桓武皇帝に奏し給ひしかば、帝此の事を驚かせ給て、六宗の碩學に召合させ給ふ。彼學者等、始は慢の幢山のごとし、惡心毒蛇のやうなりしかども、終に王の前にしてせめおとされて、六宗七宗一同に御弟子となりぬ。例せば漢土の南北の諸師、陳殿にして天台大師にせめ落されて御弟子となりしが如し。此はこれ圓定圓慧計なり。其上天台大師の未だせめ給はざりし、小乘の別受戒をせめをとし、六宗の八大徳に梵網經の大乗別受戒をさづけ給のみならず、法華經の圓頓の別受戒を叡山に建立せしかば、延暦圓頓の別受戒は、日本第一たるのみならず、佛の滅後一千八百餘年が間、身毒、尸那、一閻浮提に未だなかりし靈山の大戒日本國に始る。されば傳教大師は、其功を論すれば龍樹天親にもこえ、天台妙樂にも勝ておはします聖人なり。されば日本國の當世の東寺園城七大寺、諸國の八宗淨土、禪宗、律宗等の諸僧等、誰人か傳教大師の圓戒を背べき。彼の漢土九國の諸律には、圓定圓慧は天

台の弟子に似たれども、圓頓一同の戒場は漢土になければ、戒に於ては弟子とならぬ者もありけん。此の日本國は傳教大師の御弟子にあらざる者は、外道なり惡人なり。而れども漢土日本の天台宗と、眞言の勝劣は、大師心中には存知させ給けれども、六宗と天台宗との如く公場にして勝負なかりける故にや、傳教大師已後には東寺七寺園城の諸寺、日本一州一同に眞言宗は天台宗に勝たりと、上一人より下萬民にいたるまでおぼしめしおもへり。しかれば天台法華宗は、傳教大師の御時計にぞありける。此傳教の御時は像法の末、大集經の多造塔寺堅固の時なり。未だ於我法中、闕諍言訟白法隱沒の時には當らず。今末法に入て二百餘歲、大集經の於我法中、闕諍言訟白法隱沒の時に當れり。佛語まことならば定で一闕浮提に闕諍起るべき時節なり。傳へ聞く漢土は三百六十箇國、二百六十餘州は既に蒙古國に打破られぬ。華洛すでにやぶれて徽宗欽宗の兩帝北蕃にいけどりにせられて、鞦韆にして終にかくれさせ給ぬ。徽宗の孫、高宗皇帝は長安をせめおとされて、田舎の臨安行在府に落させ給て、今に數年が間京を見ず。高麗六百餘國も新羅百濟等の諸國等も、皆皆大蒙古國の皇帝にせめられぬ。今の日本國の壹岐對馬並に九國のごとし。

闕諍堅固の佛語地に墮ちず、あだかもこれ大海の潮の時を違へざるがごとし。此を以て案するに、大集經の白法隱沒の時に次で、法華經の大白法の日本國並に一闕浮提に廣宣流布せん事も疑ふべからざるか。彼の大集經は佛說の中の權大乘ぞかし、生死を離るゝ道には法華經の結縁なき者の爲には、未顯眞實なれども、六道四生三世の事を記し給けるは、寸分もたがはざりけるにや。何に況んや法華經は釋尊要當說眞實となのらせ給ひ、多寶佛は眞實なりと御判を添へ、十方の諸佛は廣長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釋尊は重て無虛妄の舌を色究竟に付けさせ給て、後五百歲に一切の佛法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて、謗法一闕提の白癩病の輩の良藥とせんと、梵帝日月四天、龍神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春の後に夏は來らずとも、日は東へかへるとも、月は地に落るとも、此事は一定なるべし。此事一定ならば闕諍堅固の時、日本國の王臣と並に萬民等が、佛の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを、或は罵詈訛、或は惡口し、或は流罪し、或は打擲し、弟子眷屬等を種々の難にあはする人々、いかでか安穩にては候べき。これをば愚癡の者は

呪詛すとおもひぬべし。法華經を弘むる者は、日本國の一切衆生の父母なり。章安大師云、彼が爲に惡を除くは即ち是彼の親也等云。されば日蓮は當帝の父母、念佛者禪衆眞言師等が師範なり。又主君なり。而を上一人より下萬民にいたるまで怨をなすをば、日月いかに彼等が頂を照し給べき。地神いかに彼等の足を戴き給ふべき。提婆達多是佛を打ち奉りしかば、大地搖動して火炎出でにき。檀彌羅王は師子尊者の頸を切りしかば、右の手刀とともに落ぬ。微宗皇帝は法道が面に火印をやきて江南に流せしかば、半年が内に夷人の手にかゝり給き。蒙古の責めも亦かくのごとくなるべし。設ひ五天の兵をあつめて、鐵圍山を城とせりともかなふべからず。必ず日本國の一切衆生、兵難に値べし。されば日蓮が法華經の行者にて有る無きかは是にて見るべし。教主釋尊記して云、末代惡世に法華經を弘通するものを惡口罵詈等せん人は、我を一劫が間あだせん者の罪にも百千萬億倍すぎたるべしと説かせ給へり。而を今の日本國の國主萬民等、我意にまかせて、父母宿世の敵よりもいたく憎み、謀反殺害の者よりも強く責めぬるは、現身にも大地われて入り、天雷も身を裂ざるは不審なり。日蓮が法華經の行者にてあらざるか。若しからばお、

きになげかし。今生には萬人に責められて、片時も休からず。後生には惡道に墮ん事、あさましとも申すばかりなし。又日蓮法華經の行者ならずば、いかなる者の一乗の持者にてはあるべきぞ。法然が法華經をなげすてよ、善導が千中無一、道綽が未有一人得者と申すが、法華經の行者にて候か。又弘法大師の云、法華經を行するは戲論なりと書かれたるが、法華經の行者なるべきか。經文には能持是經能説此經などこそ説かれて候へ。能く説くと申はいかなるぞと申に、於諸經中最在其上と申て、大日經、華嚴經、涅槃經、般若經等に、法華經はすぐれて候なりと申者をこそ、經文には法華經の行者とは説かれて候へ。若し經文の如くならば、日本國に佛法渡て七百餘年、傳教大師と日蓮とが外は、一人も法華經の行者はなきぞかし。如何に如何にとおもふところに、頭破作七分、口則閉塞のなかりけるは道理にて候けるなり。此等は淺き罰なり、但一人二人等のことなり。日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。此をそしり此をあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難にあふべし。これには日本國をふりゆるがす正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。此等を見よ、佛滅後の後、佛法を行する者に怨をなすといへども、今の如くの大難は一